

597-37



1200501528246

597

37

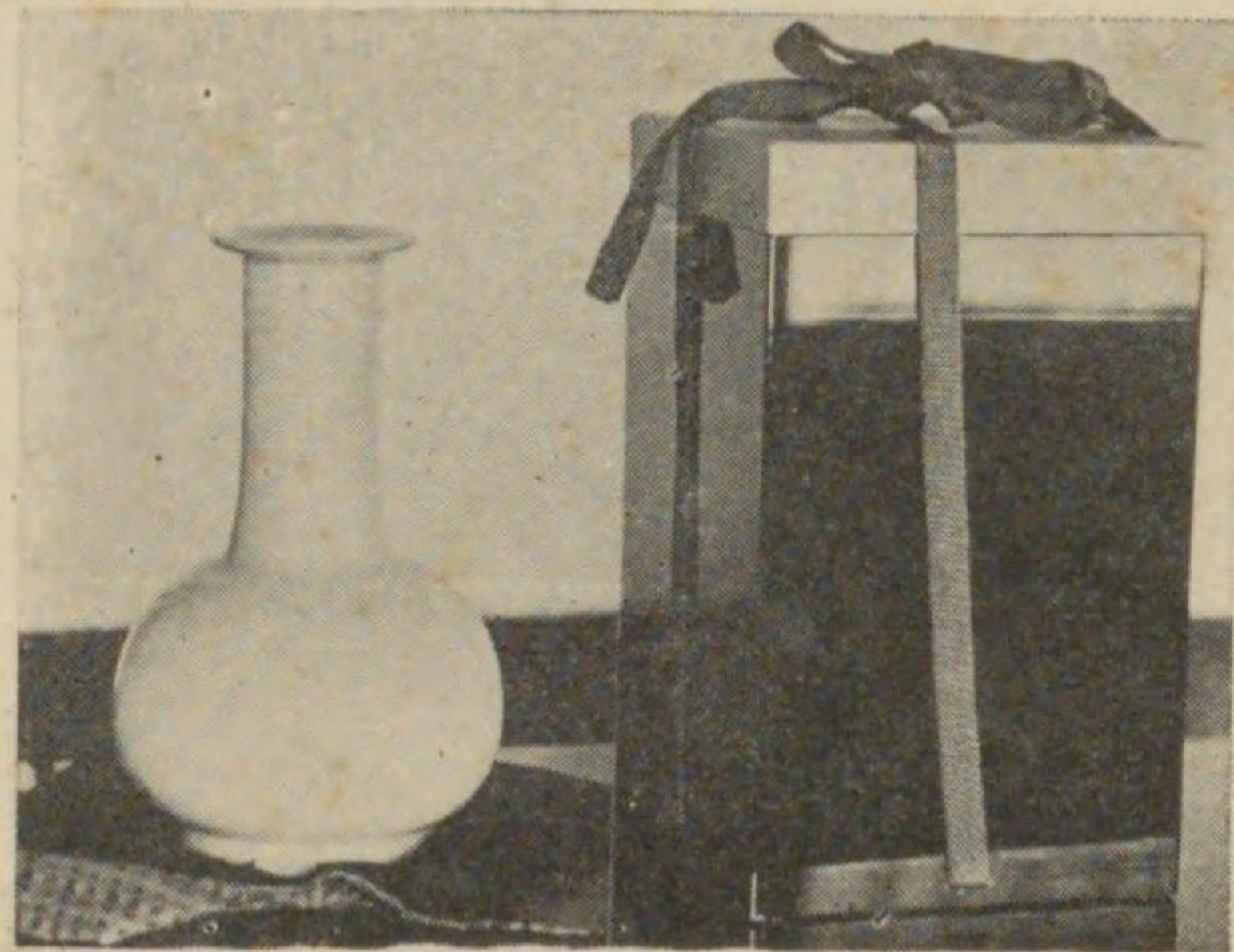


5.7.2



# 日本名寶物語

讀賣新聞社編



磁青磁花瓶雨過點晴

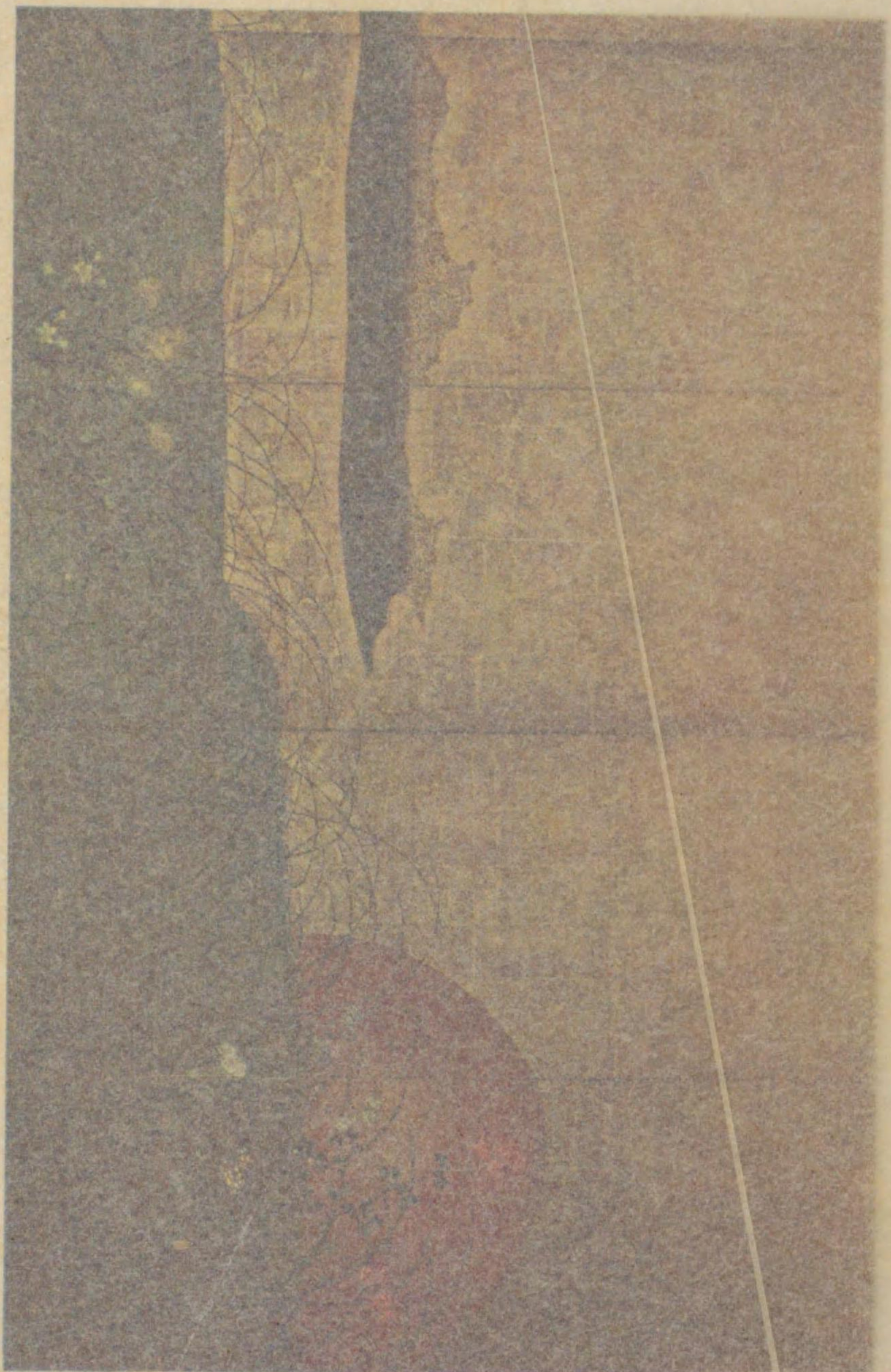
誠文堂發行



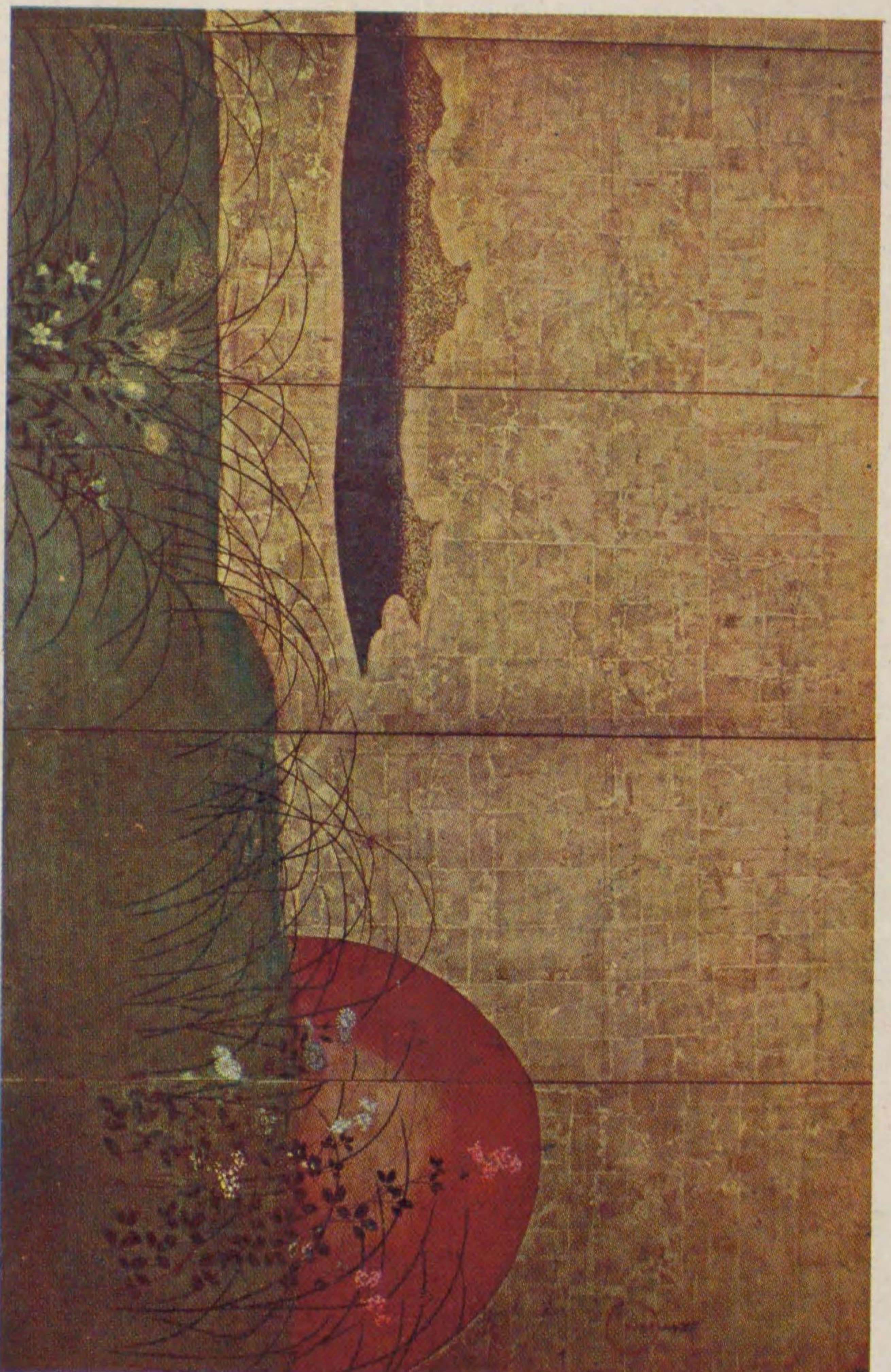


藏氏郎一嘉津根

月日野藏武筆達宗



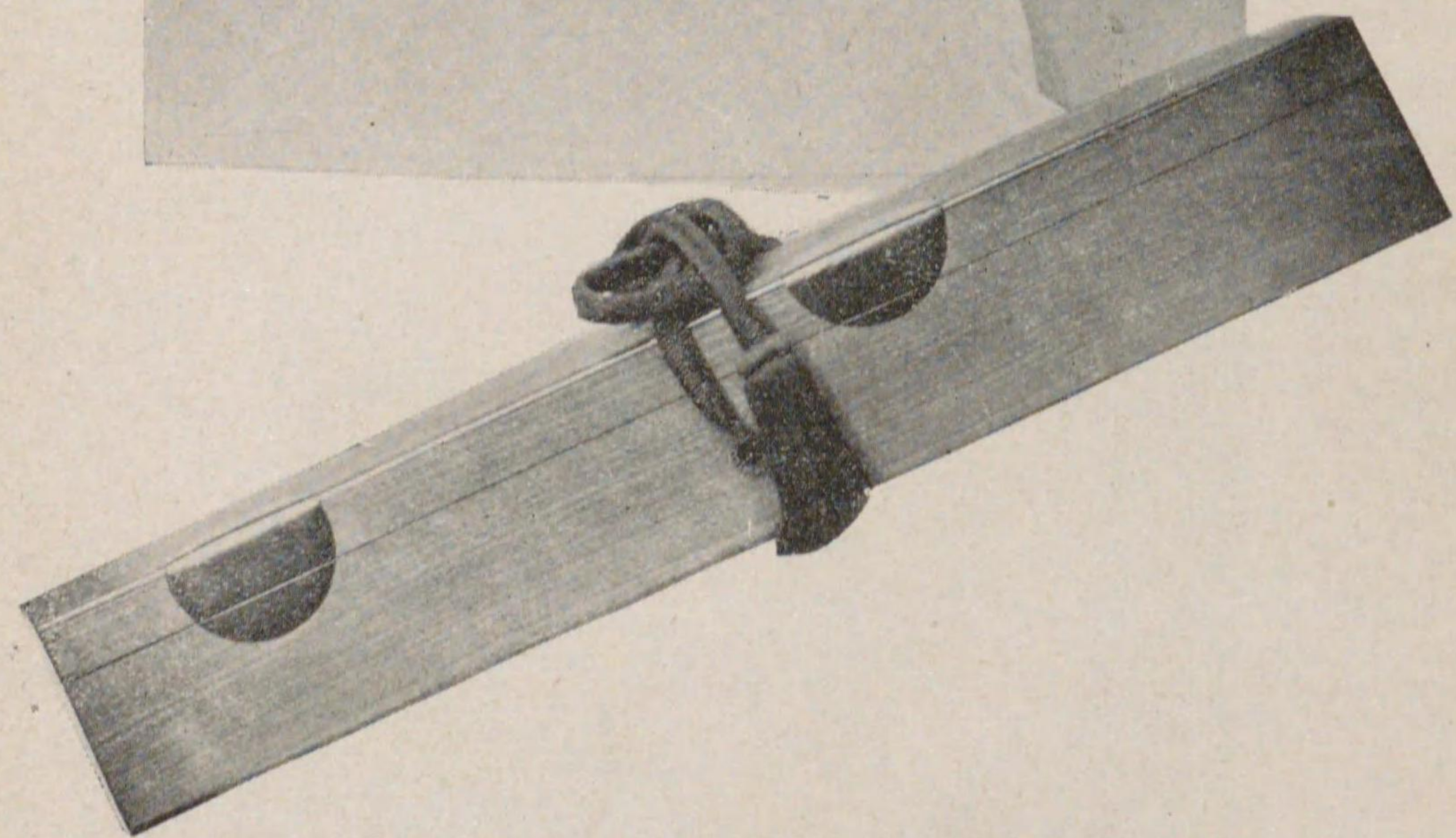
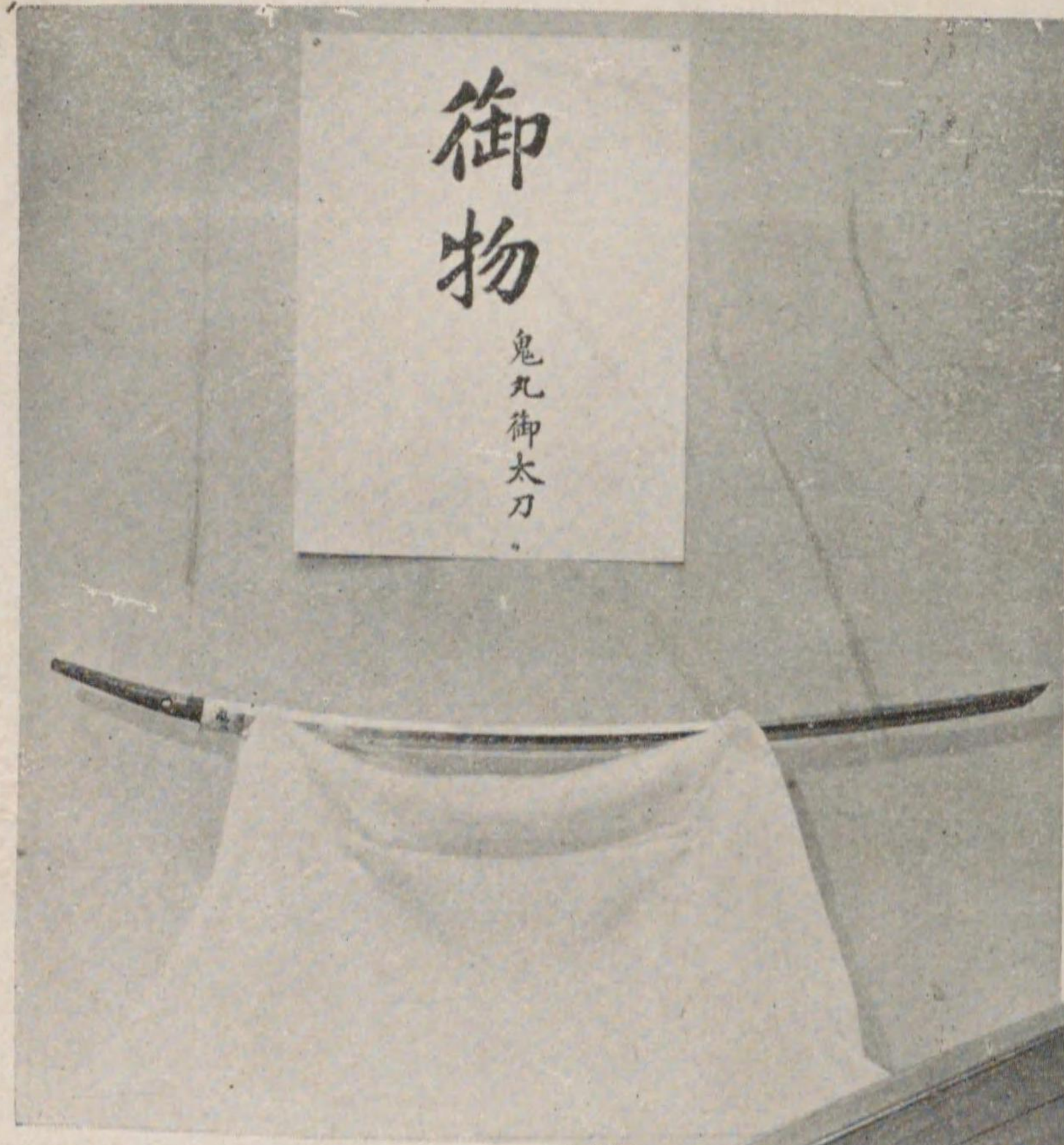




藏氏郎一嘉津根

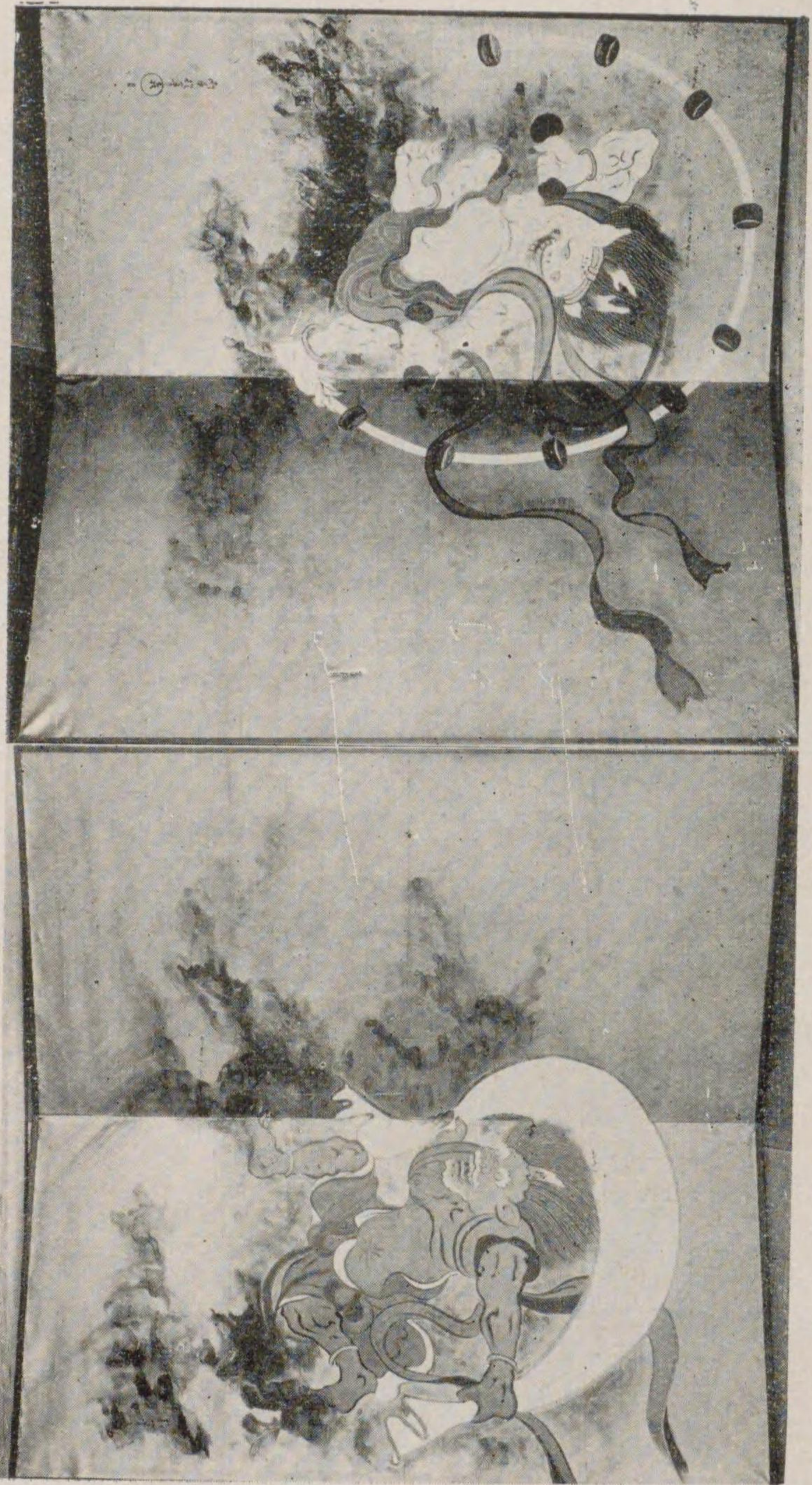
月日野藏武 筆達宗





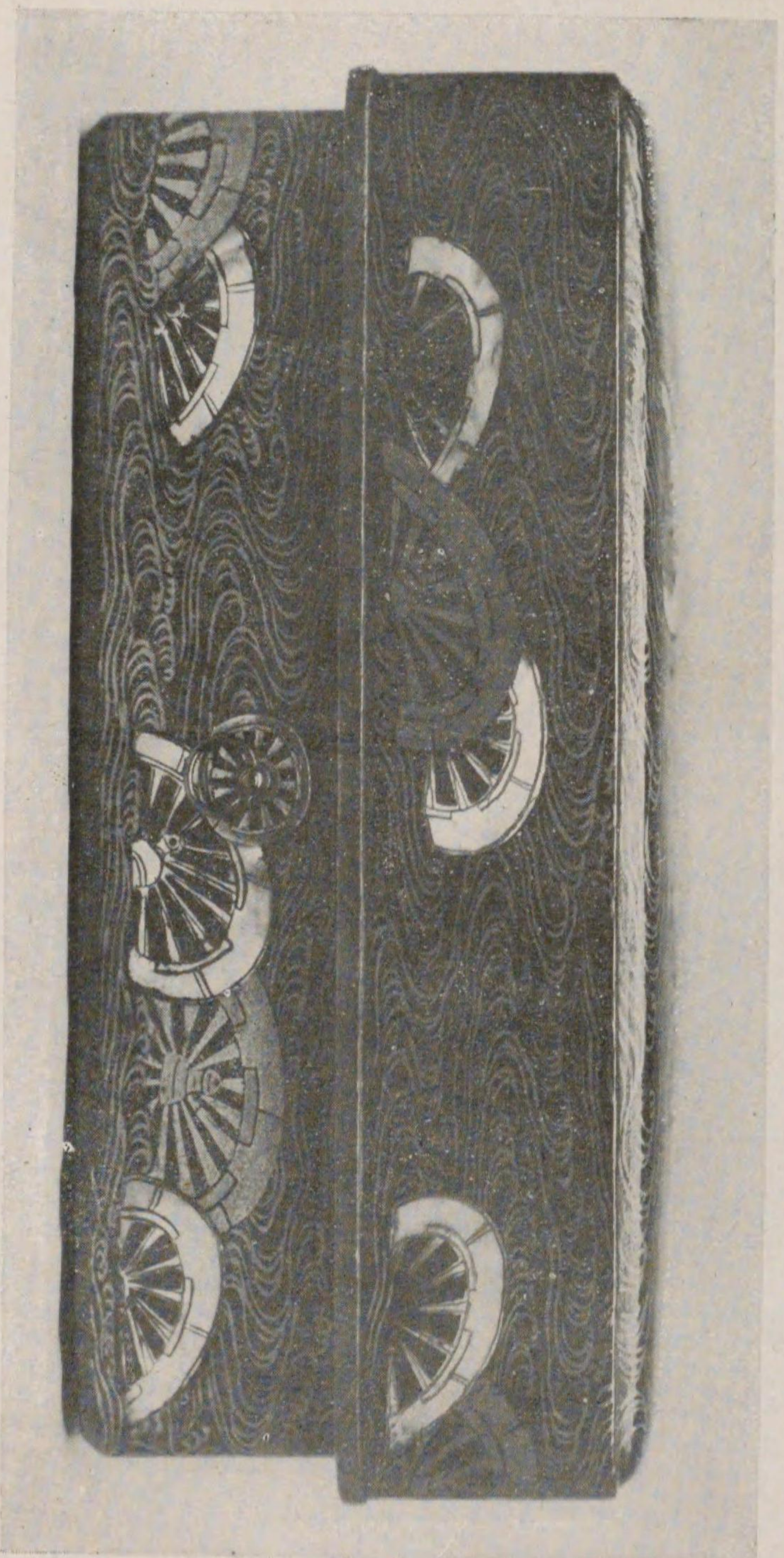
(照參頁一) 刀太御丸鬼物御室帝





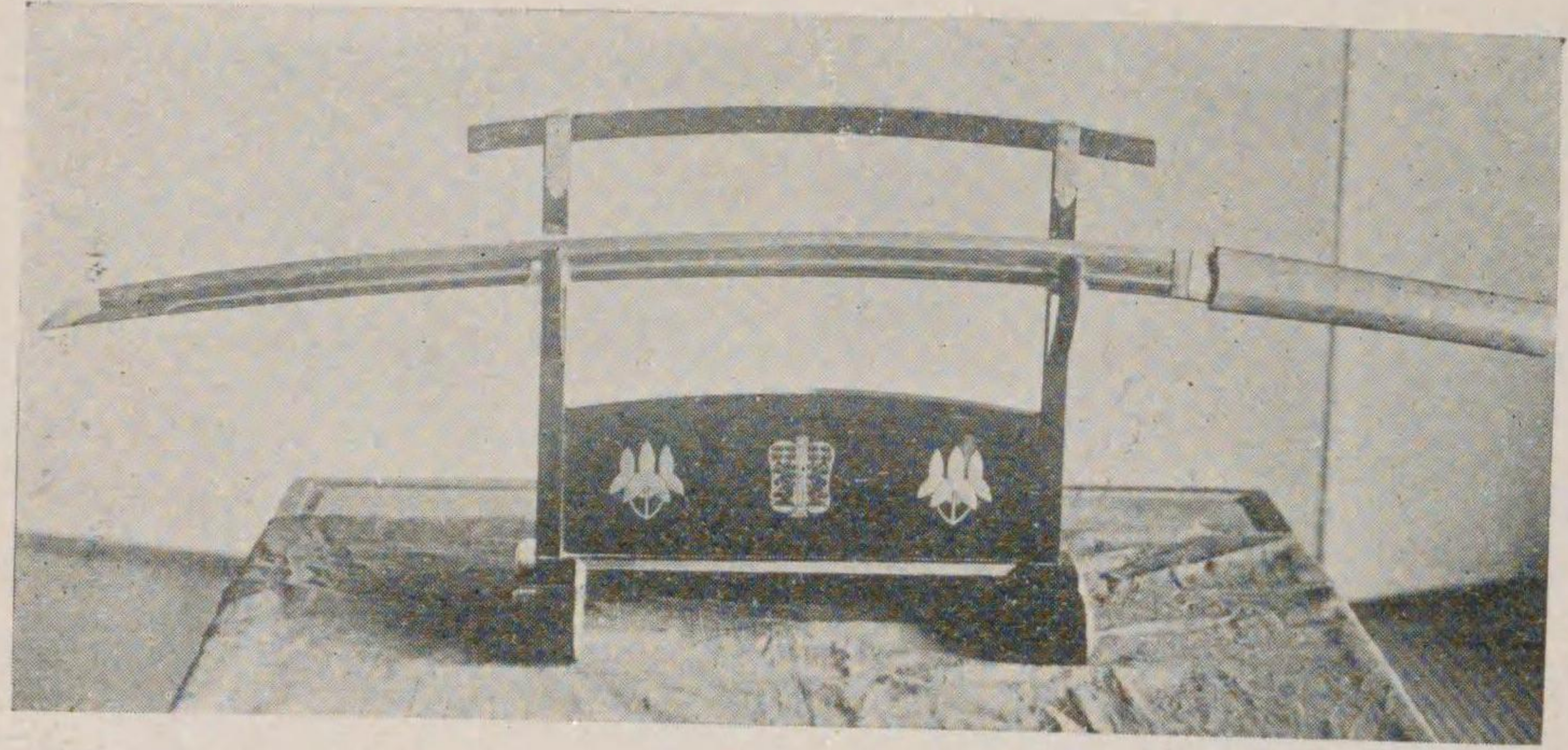
(照參頁八一) 藏氏一榮澤盞爵子 神 雷 神 風 筆一抱



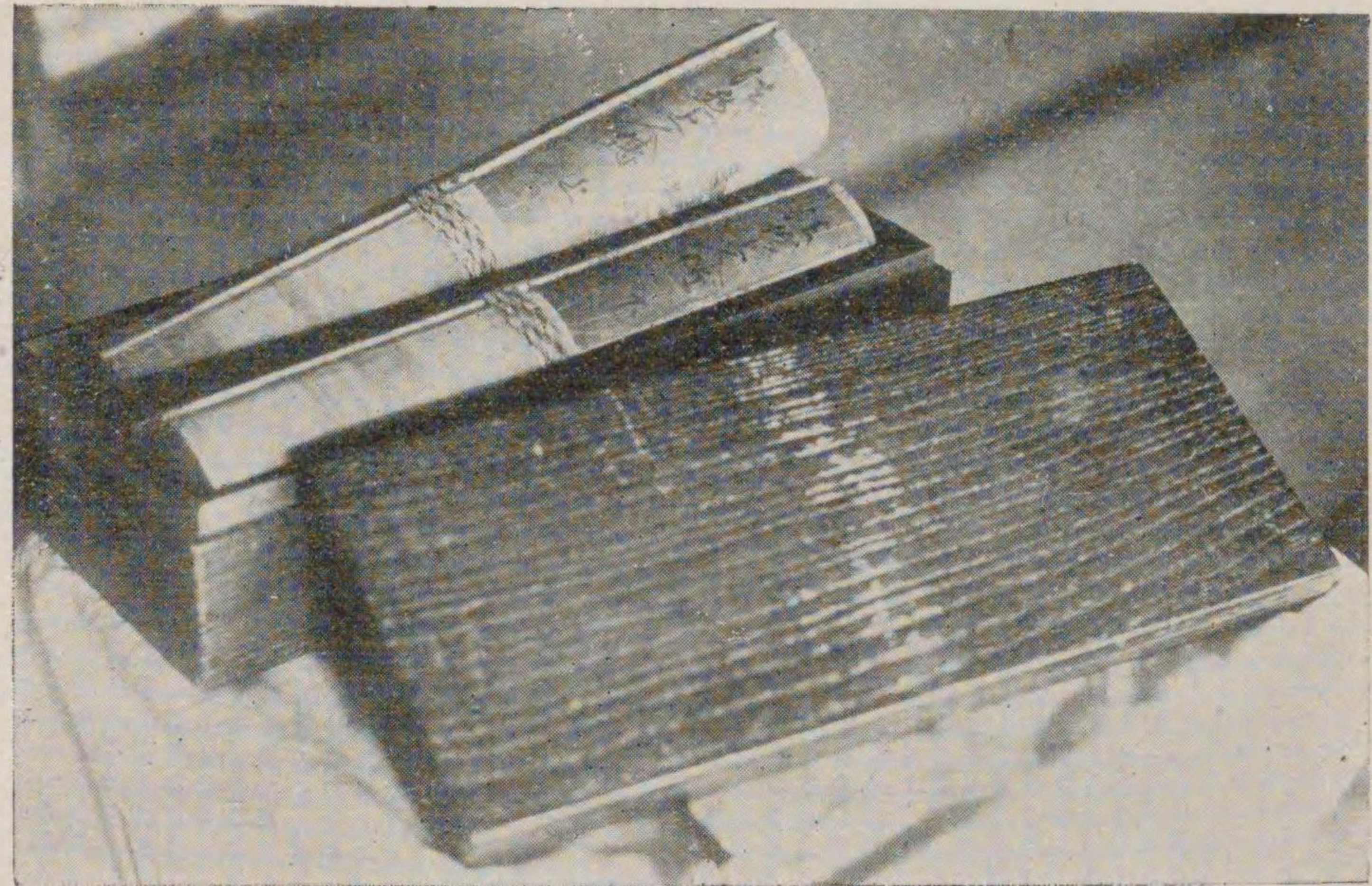


（照參頁〇三）藏氏吉常倉小 筭手繪蒔車輪片



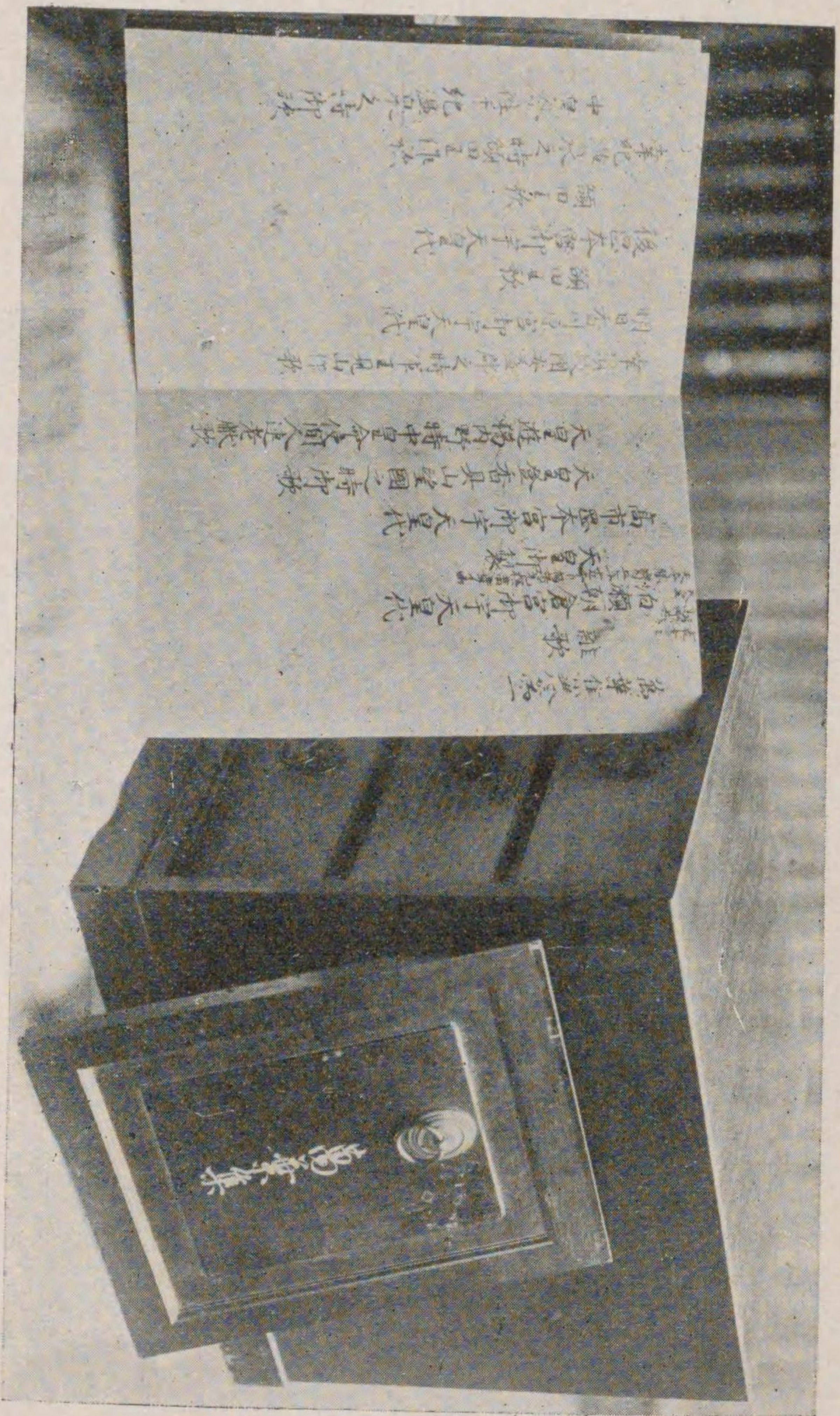


(照參頁九五) 藏氏春康平松爵子 刀 鄉 葉 稻



(照參頁四四) 藏寺上增 傳詞繪人上然法 寶國

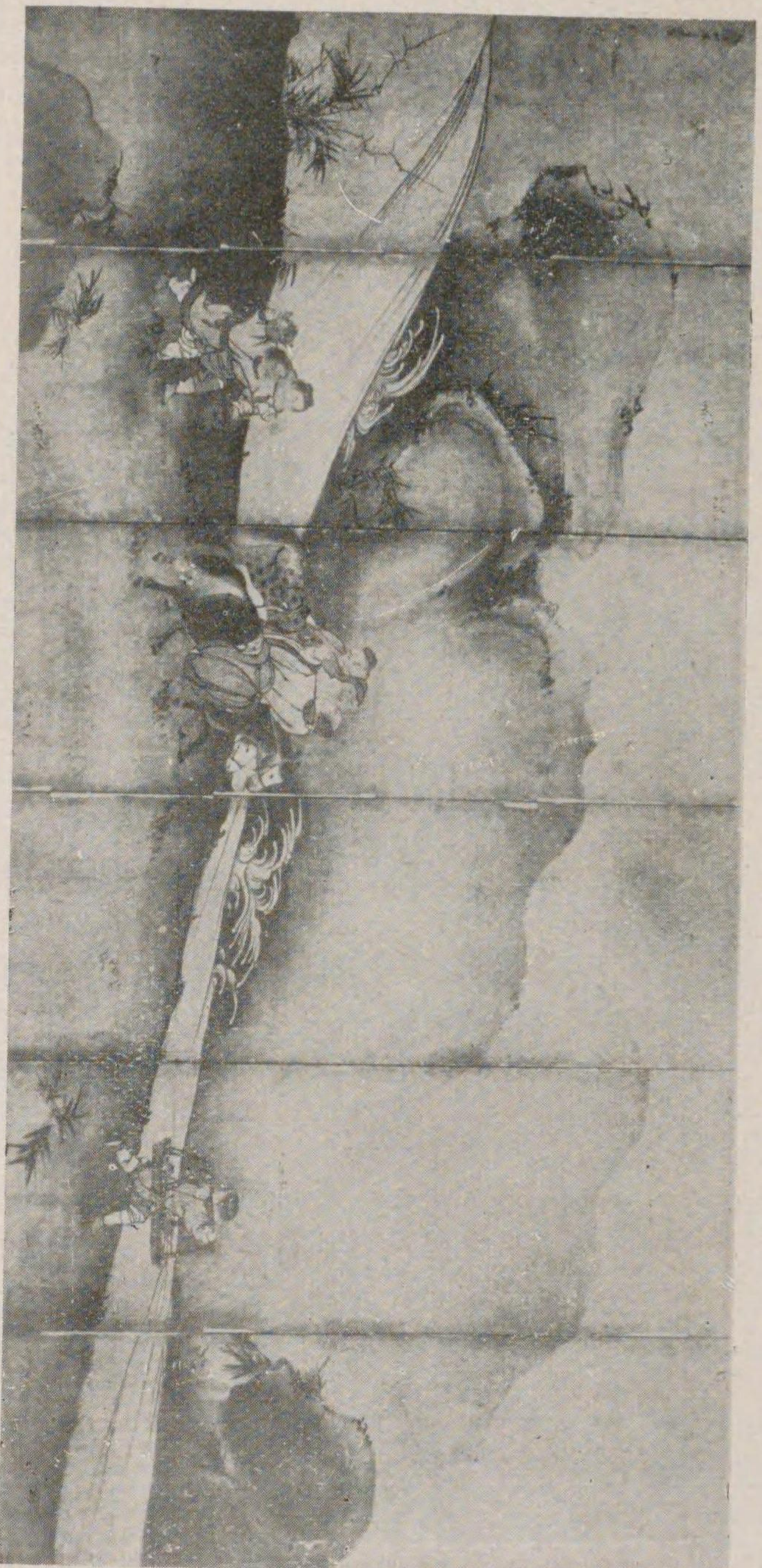




〔照參頁六七〕 藏氏助之虎河古爵男 集 葉 萬 曆 元

萬曆集卷之  
 雜歌  
 全白爛頰會宮柳字天皇代  
 天皇御集  
 高市盛本宮柳字天皇代  
 天皇登香具山壁國之時柳歌  
 天皇遊坊内野時中會令傳聞人連歌歌  
 本歌前卷附之時年上見出作歌  
 明日有可宮柳字天皇代  
 湖田五歌  
 後思本宮柳字天皇代  
 湖田五歌  
 兼此卷是之時歌四首作歌  
 中會宮柳字紀通宗之詩柳歌





(照參頁二九) 藏氏亮貞野牧爵子 風屏物入水山 筆村雪



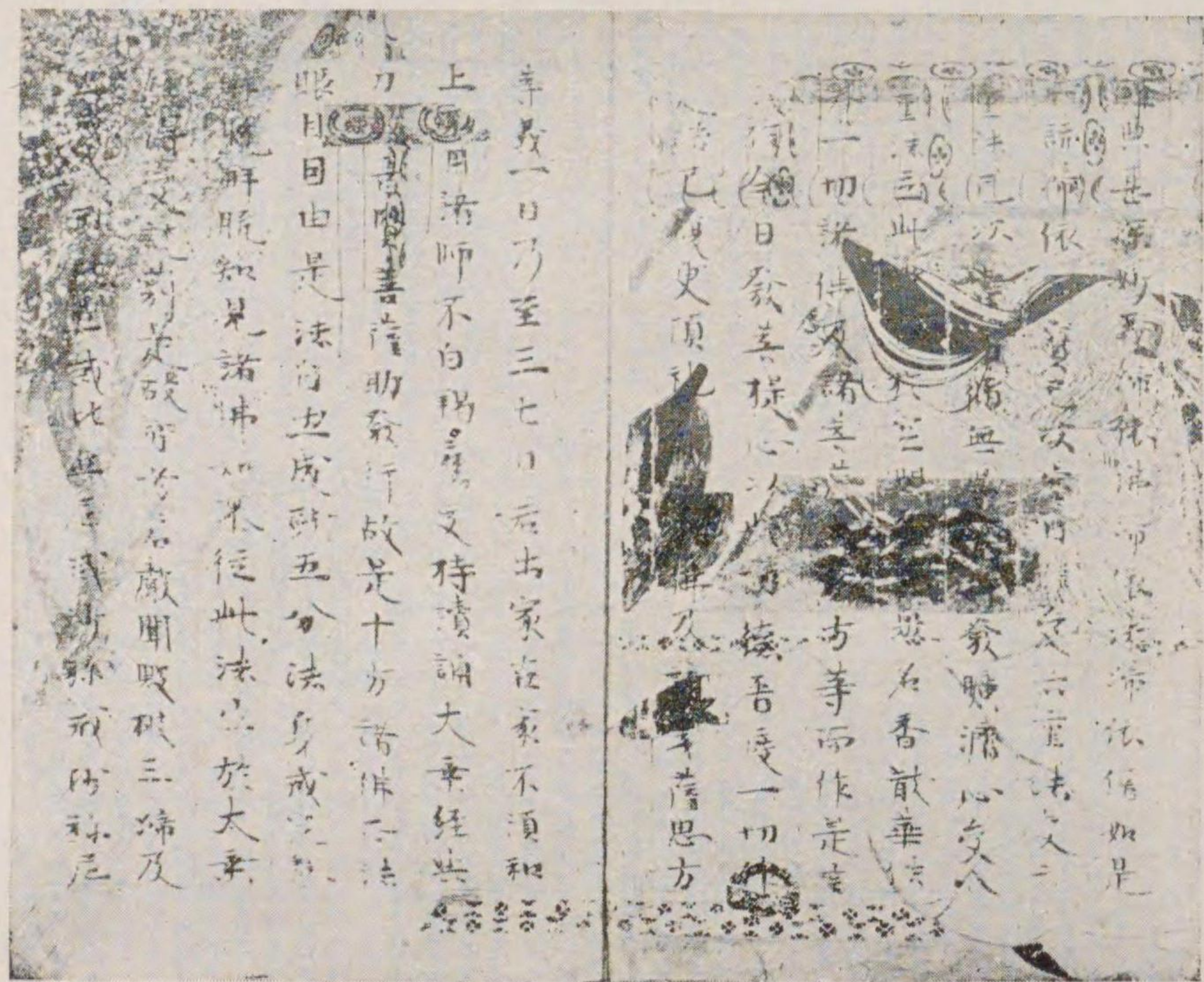


西行物語繪卷 藏氏親義川德爵候 (照參頁八九)





(照參頁一一一) 藏氏博仲田池爵候 詞繪戰合年三後



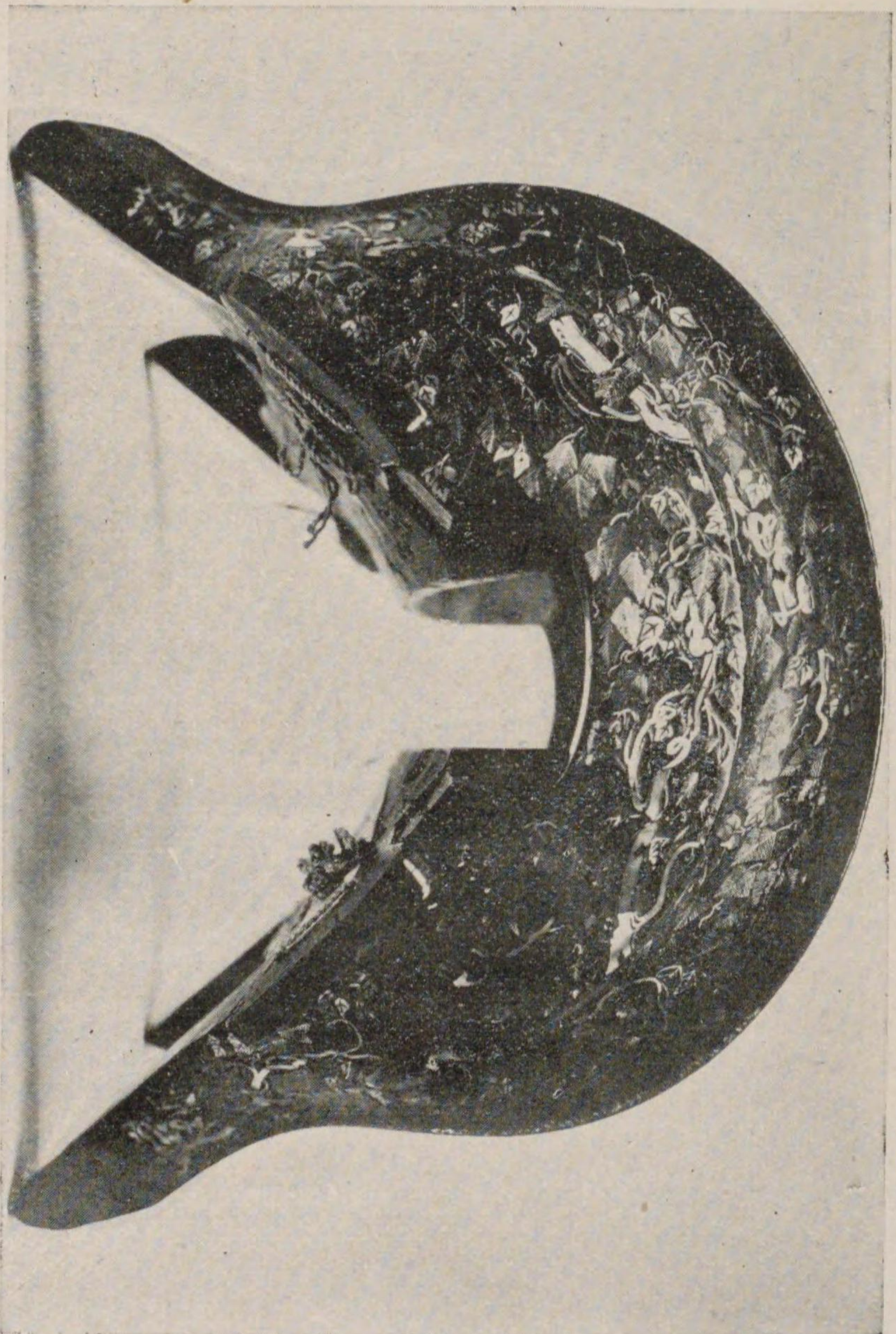
(照參頁三三一) 藏氏吉久山前 子冊經





(照參頁〇二一) 藏寺願本西 詞繪歸慕寶國





(照參頁二五一) 藏氏立護川細爵侯 鞍 雨 時 鈿 螺



## 序

建國三千年以來我國は歴史を誇る國である。特威なる歴史に輝やく我國には随つて、名寶古文獻貴什が數限りなく残された。

然も我國數千年の歴史の結晶たる多くの名寶貴什は、深淵の底深く埋もれて、門外不出のまま、自らが持つ秘史と哀話の豊富を吐つてゐる。實にそれ等の秘話を探り、哀史を尋ねることはそのまま、貴重にして正當なる我國の文化史であり、美術史であり、そして、又風俗史でもある。殊に思想國難の聲を聞く昨今、我國精神の傳統的本然美を遺寶に省みるといふ事は、國民精神作興の上にも意義ある事と思はれる。今春、我社が、多くの犠牲と困難と闘ひ、日本名寶展覽會の學を創畫し、大方の贊助と支援を得、

閑院宮殿下を總裁に奉戴して遂に此の大盛舉をなした。即ち從來舊公卿諸侯や古社舊刹にあつて、門外不出を稱へてゐた名寶古美術、或は一伸一觸直ちに數千金の毀損を免れ得ぬ古文獻、などが、帝室御物や國寶などと共に一堂に會した盛觀は實に未曾有の事であつた。



本書はその空前なる盛譽を記念するために生れたものであるが、尙其趣旨を徹底するため、未だ世に傳へられないそれ等名寶、古美術の足跡を尋ね、古事を探り、此れを物語的讀物として世に紹介せんとしたものである。歴史の参考の一助ともなり、古美術愛好家の一研究資料ともならば編者は望外の歡びである。

昭和四年六月

讀賣新聞社

日本名寶物語 目次

御物鬼丸御太刀……………帝室御貸下……………一

御堂關白記……………公爵 近衛 文麿氏藏……………三

頼政の請文と重盛の眞筆……………公爵 近衛 文麿氏藏……………九

金の茶釜……………伯爵 藤堂 高紹氏藏……………三

宗達、光琳、抱一、各筆 風神雷神……………伯爵 德川達道氏、建仁寺、男爵 澁澤 榮一氏藏……………一八

支倉六右衛門の羅馬土産……………伯爵 伊達 興宗氏藏……………三

支倉六右衛門羅馬市民權證書……………同……………二六

片輪車蒔繪手筈……………小倉 常吉氏藏……………三〇

明の冊卦……………子爵 石川 成秀氏藏……………三四

紅雪左文字……………侯爵 德川 頼貞氏藏……………四一

法然上人繪詞傳……………增 上 寺藏……………四四

牧溪筆 江天暮雪……………末延 道成氏藏……………五〇

目次



經隆筆、雪中大内圖……………安田善次郎氏藏……………三五

佐野卿消息……………伯爵 松平 直亮氏藏……………五

稻葉郷刀……………子爵 松平 春康氏藏……………五九

千代金丸刀……………侯爵 尚 裕 氏藏……………六二

小野通女筆家康像……………增 上 寺藏……………六六

光琳筆紅白梅屏風……………伯爵 津輕 義孝氏藏……………七〇

光琳筆四季草花……………伯爵 津輕 義孝氏藏……………七四

元曆萬葉集……………男爵 古河虎之助氏藏……………七六

行長筆鎌足公像……………牧田 環氏藏……………八二

華山筆黃梁一炊圖……………原 邦造氏藏……………八五

住吉物語殘缺……………伯爵 大村 純英氏藏……………八九

雪村筆山水人物屏風 戴文進筆釣魚圖……………子爵 牧野 貞亮氏藏……………九二

三日月宗近太刀……………公爵 德川 家達氏藏……………九五

西行物語繪卷……………侯爵 德川 義親氏藏……………九八

紫式部日記繪卷……………侯爵 蜂須賀正紹氏藏……………一〇二

青磁砧下燕下花瓶……………原 邦造氏藏……………一〇五

破來頓等繪卷……………侯爵 德川 義親氏藏……………一〇九

後三年合戰繪詞……………侯爵 池田 仲博氏藏……………一一一

中殿御會圖……………公爵 九條 道實氏藏……………一一四

高野切……………侯爵 山内 豊景氏藏……………一二七

國寶慕歸繪詞……………京都 西本 願 寺藏……………一三〇

地獄草子繪卷……………男爵 益田 孝氏藏……………一三六

直幹申文繪詞……………伯爵 酒井 忠正氏藏……………一三九

經冊子……………前山 久吉氏藏……………一四三

三十六歌仙屏風、扇面散し屏風……………原 邦造氏藏……………一四五

耶加里貞次大脇差……………子爵 京極 高修氏藏……………一三八

宗達筆四季花卉卷(光悅書)……………男爵 團 琢磨氏藏……………一四一

類聚古集……………侯爵 中山 輔親氏藏……………一四四



日本名寶物語

三十六人歌仙集	伯爵	大谷	光照氏藏	一四七
螺鈿時雨鞍	侯爵	細川	護立氏藏	一五二
病草紙繪卷	男爵	關戸	守彦氏藏	一五四
牧溪筆布袋圖	男爵	益田	孝氏藏	一五八
秋草蒔繪八足机	東京	帝室博物館藏	一六〇	
日暮料紙蒔繪硯箱	子爵	藤堂	高實氏藏	一六三
國寶慧安東嚴蒙古降伏祈禱文	京都	正傳	寺藏	一六六
大日本史草稿	伯爵	徳川	因順氏藏	一七〇
大石良雄所用の手鏡	侯爵	徳川	達道氏藏	一七三
國寶北野天神緣起繪卷	男爵	團	琢磨氏藏	一七六
毛益筆芙蓉麝香猫	男爵	小倉	常吉氏藏	一七九
永德筆許由巢父圖	伯爵	伊達	興宗氏藏	一八一
傳光元源氏繪冊	子爵	青山	忠敏氏藏	一八三
小僊筆避暑閑居圖	東京	帝室博物館藏	一八六	
土蜘蛛草子	東京	根津嘉一郎氏藏	一八九	
矢田地藏緣起繪卷	東京	帝室博物館藏	一九三	
天狗草子繪卷	東京	帝室博物館藏	一九六	
清水寺緣起物語繪卷	備前	曹源	寺藏	一九九
國寶俄鬼草子	山城	高山	寺藏	二〇二
國寶鳥獸戲畫	東京	帝室博物館藏	二〇五	
狹衣物語繪卷殘缺	東京	帝室御貸下	二〇七	
御物柱本萬葉集	同	同	二〇八	
御物金澤萬葉集	侯爵	池田	仲博氏藏	二一〇
荒木又右衛門の刀	伯爵	伊達	興宗氏藏	二二三
大俱梨伽羅廣光刀太鼓鐘貞宗小脇差	侯爵	池田	宣政氏藏	二二六
又兵衛筆故事人物圖卷	子爵	秋元	春朝氏藏	二二八
雪舟筆毘沙門天	鎌倉	光明	寺藏	三三〇
國寶當麻曼陀羅緣起繪卷	鎌倉	光明	寺藏	三三〇

目次

土蜘蛛草子	東京	帝室博物館藏	一八六	
矢田地藏緣起繪卷	東京	根津嘉一郎氏藏	一八九	
天狗草子繪卷	東京	帝室博物館藏	一九三	
清水寺緣起物語繪卷	東京	帝室博物館藏	一九六	
國寶俄鬼草子	備前	曹源	寺藏	一九九
國寶鳥獸戲畫	山城	高山	寺藏	二〇二
狹衣物語繪卷殘缺	東京	帝室博物館藏	二〇五	
御物柱本萬葉集	東京	帝室御貸下	二〇七	
御物金澤萬葉集	同	同	二〇八	
荒木又右衛門の刀	侯爵	池田	仲博氏藏	二一〇
大俱梨伽羅廣光刀太鼓鐘貞宗小脇差	伯爵	伊達	興宗氏藏	二二三
又兵衛筆故事人物圖卷	侯爵	池田	宣政氏藏	二二六
雪舟筆毘沙門天	子爵	秋元	春朝氏藏	二二八
國寶當麻曼陀羅緣起繪卷	鎌倉	光明	寺藏	三三〇



日本名寶物語

名物眞守太刀……………伯爵 松平 頼壽氏藏…二二三

堀田加賀守正盛殉死の脇差……………伯爵 堀田 正恒氏藏…二三四

木村長門守重成最後の佩刀……………子爵 秋元 春朝氏藏…二三七

正恒太刀……………伯爵 小笠原長幹氏藏…二四〇

洛中洛外屏風……………公爵 三條 公輝氏藏…二四二

光悅茶碗……………伯爵 酒井 家正氏藏…二四六

蛇皮線……………侯爵 尙 裕氏藏…二四八

國寶鬼切丸太刀……………京都 北野神社所藏…二四九

雉子造、鷹造、及眞長太刀……………伯爵 南部 利淳氏藏…二五五

淨瑠璃坂仇討の脇差……………豊後 櫻神社所藏…二四九

武藏筆 蘆雁屏風……………侯爵 細川 護立氏藏…二五三

柏木菟螺鈿蒔繪鞍……………侯爵 細川 護立氏藏…二五五

伴大納言繪詞……………伯爵 酒井 忠克氏藏…二五九

藤原佐理卿詩懷紙……………伯爵 松平 頼壽氏藏…二六二

大阪冬の陣と大阪夏の陣……………侯爵 長田 長成氏藏…二六六

熊野懷紙……………伯爵 大谷 光照氏藏…二七三

日本名寶物語 目次終



日本名寶物語

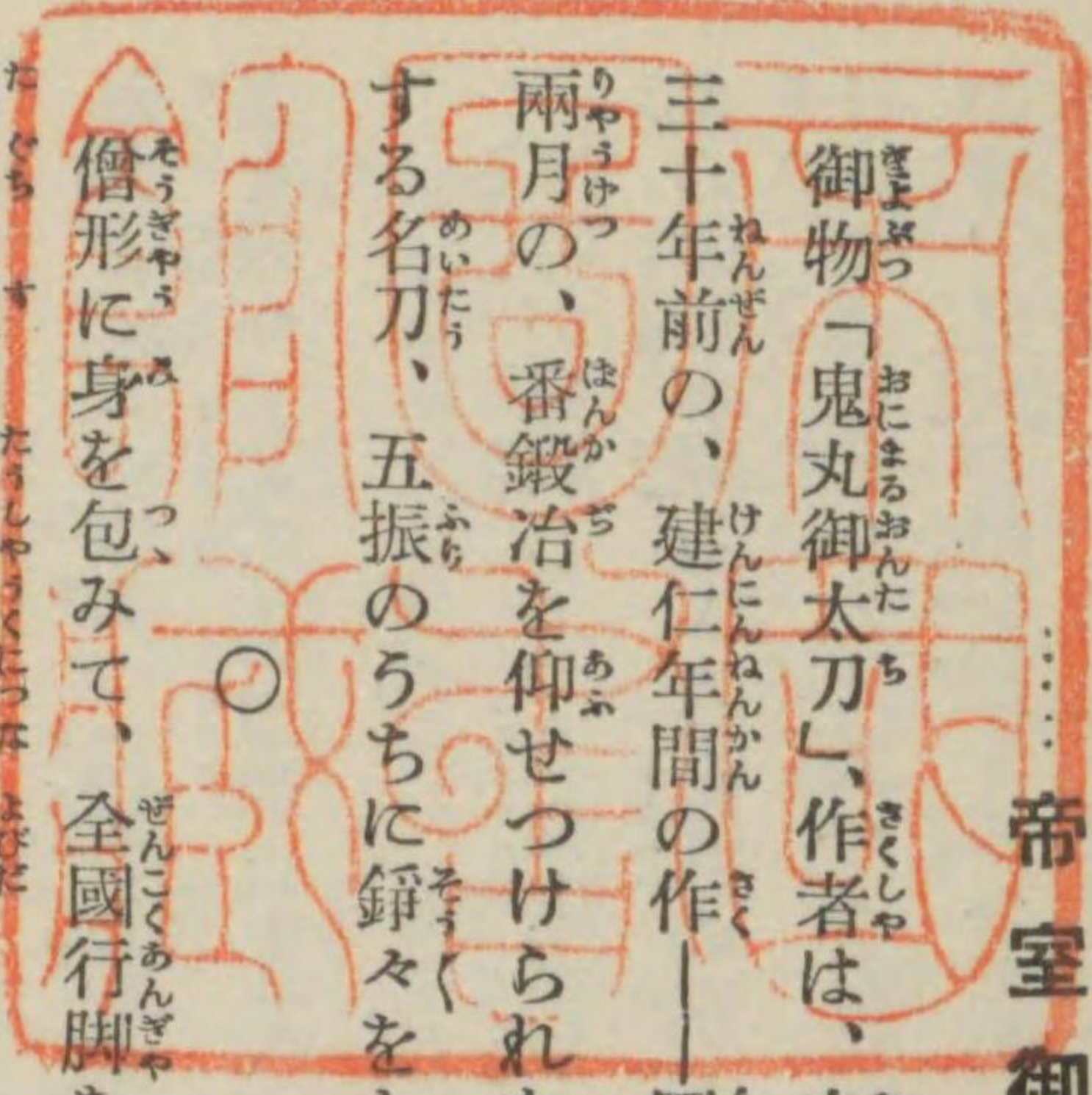
讀賣新聞社編



御物 鬼丸御太刀 (口繪参照)

帝室御貸下……

御物「鬼丸御太刀」、作者は、山城國粟田口國綱、長さ二尺五寸八分、銘に國綱とある。約七百年前の、建仁年間の作。國綱は鎌倉初世の刀匠、後鳥羽天皇に召されて隱岐に従ひ、五十六月の、番鍛冶を仰せつけられた人、九十五歳の長壽を終へて死んだ。この太刀は、天下に現存する名刀、五振のうち一振となへてゐる。



僧形に身を包みて、全國行脚をした北條時頼が、鎌倉府に、執權の勢威を揮つてゐたころ、粟田口に住む刀匠國綱を呼出して、名刀を打出せと命じた。國綱は、この命令を一世一代の榮譽と擔ひ、斷食祈願七日、初めて銚をとつた。國綱は、すべての神經を、この刀身にあつめたので、鍛へあげられたものは、かれ自身さへも、驚歎する程の出來榮えてあつた。時頼にこれを差出すと、巨匠僅か一振の名作に、時頼は、あらゆる最大級の形容詞を用ひて、褒めそやした。時頼が

鬼丸御太刀



すぐに、佩刀に仕立て、手放さなかつたのは無論である。

時頼は、ふとしたことから病ついた。病状はかばかしくなかつたので、かれは焦立つてゐた。ある日病床から、傍へにある獅嚙火鉢の鬼面に、眼を投げた。時頼の眼がかどやくと、病鬼はこれだと、この太刀で鬼面を切り落とすと、病は拭はれたやうに快癒した。時頼はこの太刀に鬼丸の名を與へ、北條家の重器とした。

高時が自殺して、北條家が崩れるとともに、この鬼丸は、新田義貞に移つた。湊川の戦ひに、義貞の乗馬が斃ると、敵兵の飛矢は一つに集まつた。義貞は、名甲薄金を鎧ひ、鬼丸を揮つて、二十重の敵を衝いたと傳へられてゐる。義貞は北國に轉戦し、延元三年、燈明寺嶽で戦死した。その時、鬼丸の噂を聞き傳へてゐた、敵將足利尾張守高經は、この太刀をもとむるため、義貞の屍を探ね歩いた。高經が義貞の屍を發見した時の欣喜は、殆ど狂人のやうであつた。むさぼるやうに鬼丸を奪ふと、後も見ずに駆け出した。——この話が、いつか尊氏の耳に傳はつた。

尊氏は、この刀を手に入れるために、手段の善悪を問はなかつた。すぐ高經を召出し、數回の所望に及んだが、かれは頑として聞き入れなかつた。あまりうるさかつたので、高經は一策を案じ、刀を火に焼いて、鬼丸は焼けたと、尊氏にこれを贈つた。しかし、この偽りも續かなかつた。高經が依然として鬼丸を珍重してゐることを聞くと、尊氏は、かれの論功行賞を除外した。二人の間には、越ゆべからざる溝が掘られた。高經の孫義敏の時、不和であることの不利を察して、鬼丸を將軍義政に贈つた。

足利氏が滅んだのち、義昭は、鬼丸を秀吉に贈つた。秀吉はこれを本阿彌光徳に保管させたが家康はその後をつぐと、光徳の子光室に保管を命じた。鬼丸は、累代の本阿彌家に護られ、維新まで京都にあつた。——明治十五年、天下有數の名刀鬼丸は、帝室の御物に移つた。

### 御堂關白記

……公爵 近衛文麿氏藏……







ほのかに通はせる。

○ 道長の息子で、頼通といふのがあつた。長保五年の冬、齡十二歳で右近衛少將に任官した。翌年の寛弘元年二月の五日、氏神春日祭の使者として、南都に赴いたことがあつた。その日の京のあたりは、春の陽差しに、花を折かざして歩む人さへあつた位の暖かさであつたのに、六日の日は、俄に綿をちぎつたやうな大雪が降り出した。

○ 道長は、悲し氣に空を眺めては、思ひを頼通に通はせて居た。そして頼通の伴をして行つた者の父である左衛督公任に、親心から一首を贈つた。『若菜摘む、春日の野邊を雪ふれば、心使ひをけふさへぞやる』同じ思ひに公任は『身をつみて、覺束なきは雪やまぬ、春日の野邊の若菜なりけり』と返歌した。この事がいつしか、花山法皇のお耳に達した。法皇は『我すらに、思ひこそやれ春日野の雪間をいかで、田鶴のわくらん』と、一首を道長に賜はつた。——頼通は、田鶴の君とよばれた男である。

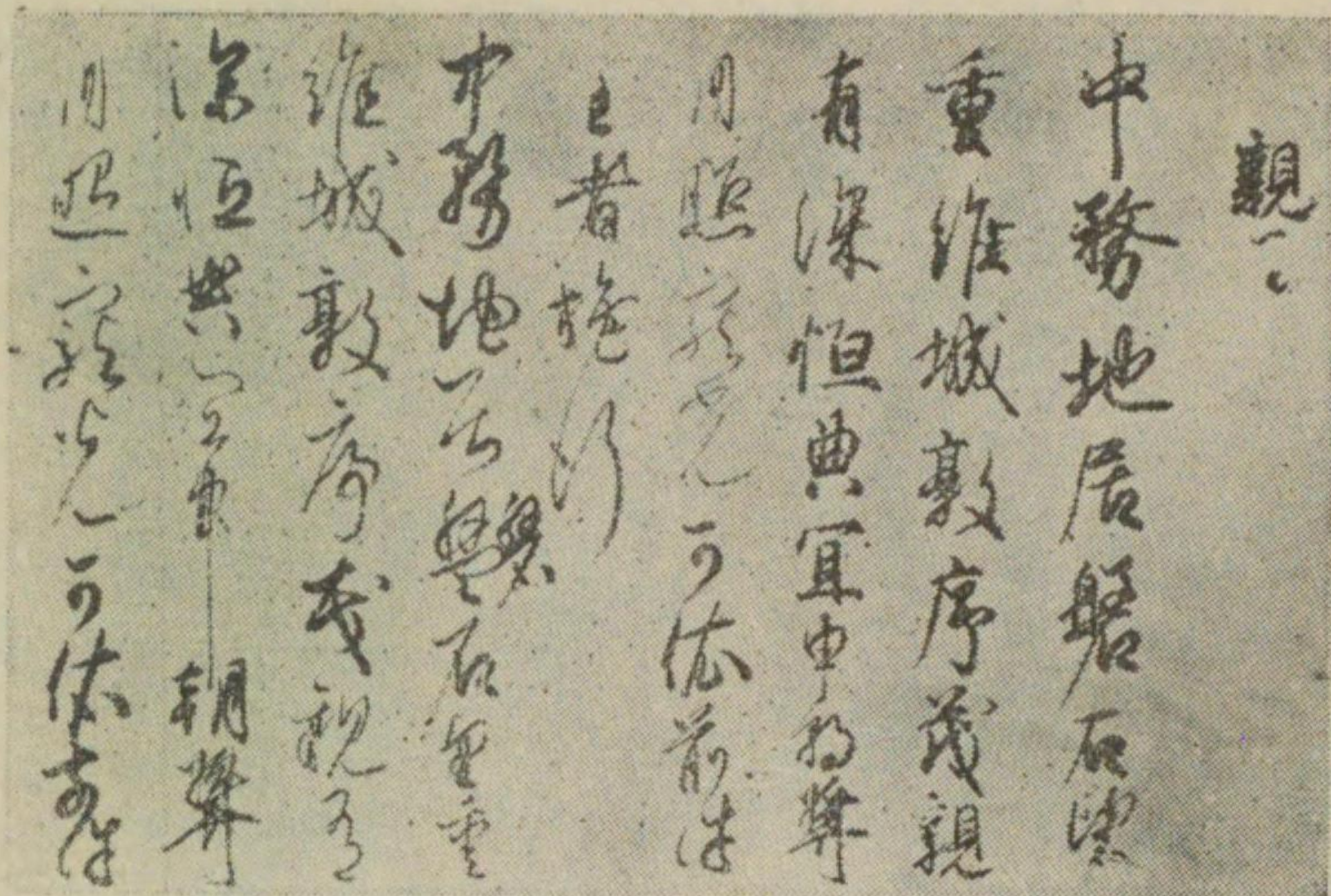
○ 道長は、詩歌や管絃の道ばかり長じた男でなかつた。書もよくして、唐人を驚かせたほどであつた。西園寺公の祖先である閑院公季から、法性寺南門の篇額揮毫を頼まれたことがあつた。無論、道長が、當時最高の権力者であつたことが、由緒ある篇額の筆者に選ばれた、最も大きな條件であつたには相違ないが、書も優れてゐたことが窺はれる。しかしさすがの道長も、これにはいさゝか弱つたらしく、その日記に『素より能書に非ず、度々堪へざる由を示すと雖も、功德によつて故らに書す』とおそれ謹んで居る。

○ 晩年には入道して名を變へ、行觀より行覺といつただけに、道長は若い時から、佛に歸依することが篤かつた。道長は折々寫經をしたが、いつかそのために眼を患つて、三四尺離れると、物體がはつきりせぬやうになつた。驚いて醫者に診せると、菜食からの榮養不良と判つたので、醫者は魚食をすゝめて戻つた。道長はすぐに身を淨め、衣服を改めて佛前に額づき『寫經の時の魚食は禁物だが、慾で食べるのではないから赦して頂きたい』と、夜をこめて訴へ、そしてその仕事をとう／＼完成させた。

○ 前にも書いたやうに、その娘の彰子は、後一條天皇と後朱雀天皇の生母であつた。一條院の女



親



行成筆「親王位記」の部

御として入内し、中宮になつたのであるが、女流文學家の紫式部や赤染衛門を、その侍女に推薦したのは道長であつた。後一條天皇のお生れ遊ばす時には、さすがの道長も、殆ど寢食を忘れて心配したので、身は削られたやうに痩せ衰へて、見るも痛々しい容になつた。

道長は自分の所有してゐる、あらゆる権力と、あらゆる財力とを動かして、皇子御出産の祈禱を行つた。すべての手段を惜しまずに供養をも施した。その豪奢を盡したさまが、この『關白記』に載つてゐる。道長は當時の一流彫刻家に命じて、釋迦、文珠、普賢、七佛、薬師、六観音、五大尊等の佛像を等身大に刻ませた。或者には、眼も眩ます許りの金色を埋め、或者には、彩色膽を奪はんばかりの仕上げを施したので、その絢爛と巧緻は、京の街々を驚倒させるに充分であつた。その外に法華經多數を供養して、家運のためたさも、讃へさせたといふことである。

であつた。その外に法華經多數を供養して、家運のためたさも、讃へさせたといふことである。

平安朝時代における、新興文學の保護者であると同時に、道長自身も、一つの識見をもつた文學者であつた。そこで書籍を多數蒐めたことも、この日記に書かれてゐる。大きな厨子棚をつくつて、これへ藏したものが、文選その他二千卷、道長はこれを片つばしから讀破した。そして、面白いところを一巻の書に綴つて、宮中に献上したことなどが書いてある。

『御堂關白記』は、近衛家隨一の名寶である。非常の場合にはいつでも、他に移せる装置がしてあり、常に寶庫の入口近くへ置かれてある。近衛家が、いかに『關白記』保護に手をつくしてゐるかも、この一事で窺はれる。

### 頼政の請文と重盛の眞筆

……公爵 近衛文麿氏藏……

陽明世傳に納められてゐるものは、『御堂關白記』をはじめ、古文書類だけで七十通、いづれも國頼政の請文と重盛の眞筆

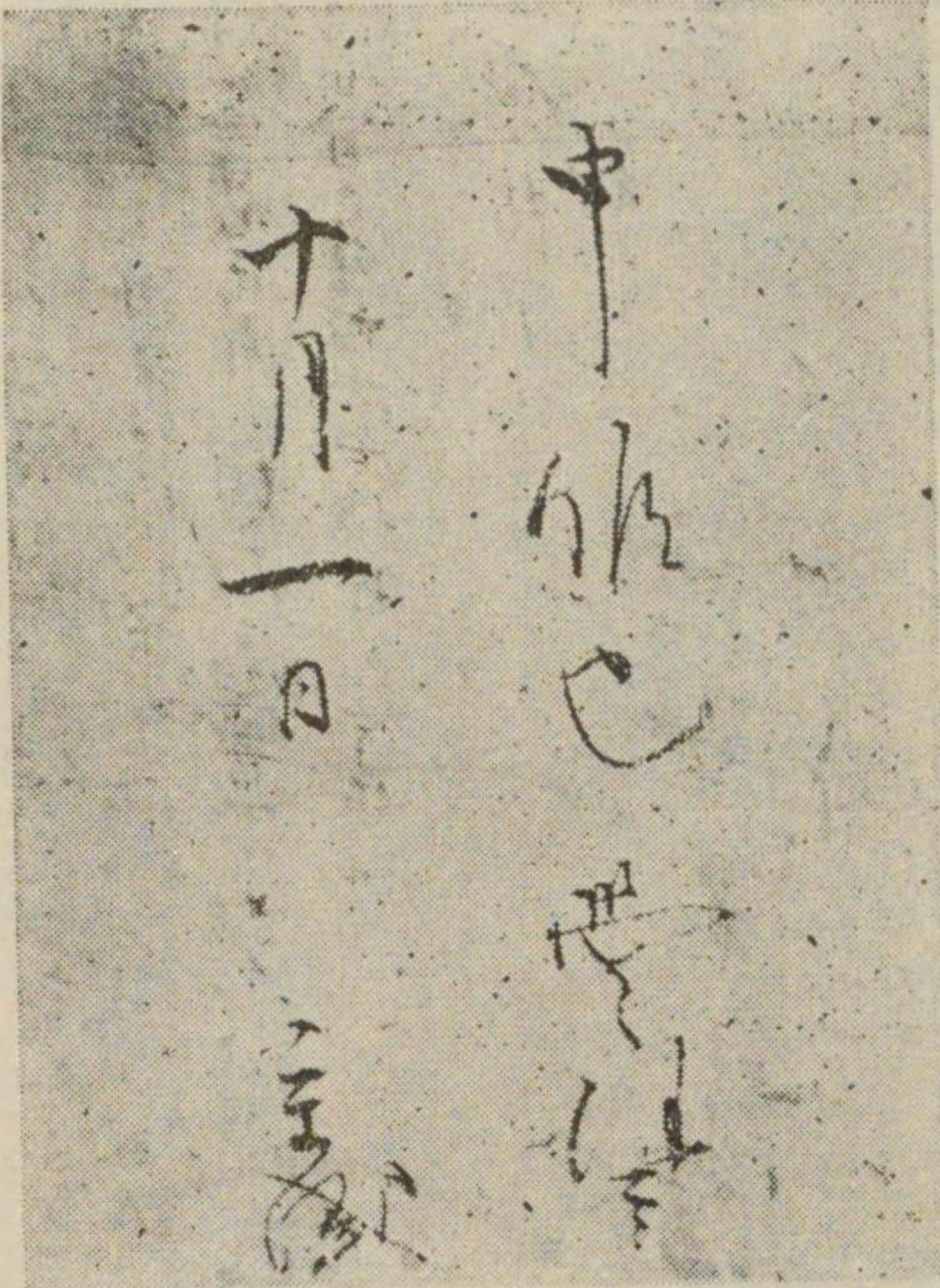


史を究める上に得難い資料ばかりである。

堀河院の國母賢子、白河院の建立せられた法勝寺で、國忌を行はれたことがあつた。この國忌を終つた後、當時從五位下の位にあつた源頼政は、布施取の役を命ぜられた。頼政が奉つたのは仁平四年九月二十二日、法勝寺の常行堂において、御國忌執行により、布施取の役として束帯をつけ、巳刻に參勤すべき趣を書いたのがこの請書である。文事に長じた頼政の遺筆は、三井寺切、平等院切の名葉にあるが、みな頼政のものであるといふ傳はりだけで、この請書のやうに的確なもの外にない。雄渾なる筆勢頼政の面目を窺ふに足るものがある。

平重盛の筆として信用の出来るものは、二つしか無い。一つはこの、近衛家にある書狀の斷片である。たゞ書狀の結尾と月日署名に過ぎぬものであるが、筆致悠悠々流るゝ如きうちに、重盛の非凡な識量を見出だすことが出来る。此書は、重盛が藏人を勤めてゐた久安六年以降のもの、まだ三十歳にならぬころの筆である。外の一つはもと、近衛家から帝室に獻納したもので、今では御物として保存せられてゐる。

大塔宮の御書がある。高さ九寸七分五厘、幅二尺七寸、宮から近衛家へ賜はつたものらしいが、宛名の所が切れてゐるので、たしかなことは判つてゐない。文中には、宮前夜面調せられしにも拘らず、重ねて使者を馳せ、仰せ遣はさる所あらんとして、院宣濫に披露あるべからずなど、ゆるがせにならぬ空氣が流れてゐる。恐らく大塔宮が、まだ兵馬の間身に任ねられぬ前、嘉歴元徳ごろのものであるらしい。書風豊に圓味を帯びてゐるが、その氣骨順秀、凜として犯すべからざるものがある。當時伏見天皇をはじめとして、能書の皇族の多數おはした



たが、筆致颯爽、四邊を拂ふ氣宇の存するのは、獨り大塔宮においてのみ見るところである。



法華經譬喻品の斷簡は、小野道風の筆といはれてゐる。道風の書は、早年において多くは華麗晩年に至つて骨力外に現はれた。この斷簡は柔媚のみの筆法なので、早年の書らしいといはれる。

藤原佐理消息の斷片がある。佐理の眞筆は、このほかに松平家にある『暮春月賦隔水花光合應教の詩懷紙、帝室御物の『恩命狀』赤星氏舊藏の『去夏狀』浪花帖所載の『國申文狀』松平家の『離落狀』の諸消息ぐらゐるものである。

藤原行成の筆といはれる倭漢抄——和漢朗詠集——の、殊に名のあるものが三つある。その一は原氏、關戸氏等の卷子本の斷片、第二は帝室御物、および、關戸氏の卷子本、第三は帝室御物と、法輪寺切として、諸家の秘寶になつてゐるものである。近衛家の倭漢抄二卷は、第三に屬して重要な位地を占めてゐる。この二卷は赤字なく、渾然たる美玉をなしてゐる。たゞ最後に『しらくし』の歌は缺けてゐるが、却つて、珍奇の異本として尊重すべきものであらう。書體に一點の霸氣や街氣がなく、端正にして無限の品位あること、恰も束帯して陽を迎ふるが如き感がある。稀世の珍寶といはねばならぬ。

### 金の茶釜

……伯爵 藤堂高紹氏藏……

遠い傳説の、夢の中に浮かんで來さうな『金の茶釜』、これこそ真正正銘の金無垢、伯爵藤堂高紹氏のもので、寶庫深く秘められてゐる眼も眩らまんばかりの一品、無論一門一統の人にも容易に見せぬ物、見た人は數へる程しかない。藤堂家秘藏寶物中の白眉、一組八品になつてゐるのが、この『金の茶釜』。

黄金風爐一貫三百卅六匁、水指蓋共、四百三十五匁、金蓋環七百四十五匁、水庭百四十九匁、柄杓立二百六匁、蓋置八十三匁、茶椀台百卅七匁、合せて三貫百五十匁。

當時の小判に換へると六百五十六兩一分、いまの金にすると約一萬六千圓、この茶釜こそ絶世の逸品である。この『金の茶釜』を、當主高紹伯も見ることがある。其の日は伯をはじめ、家令家職の人々全部が、茶器を秘めて置く唐櫃の周圍に集まる。片唾をのんだこれ等の人々が、厳し

### 金の茶釜

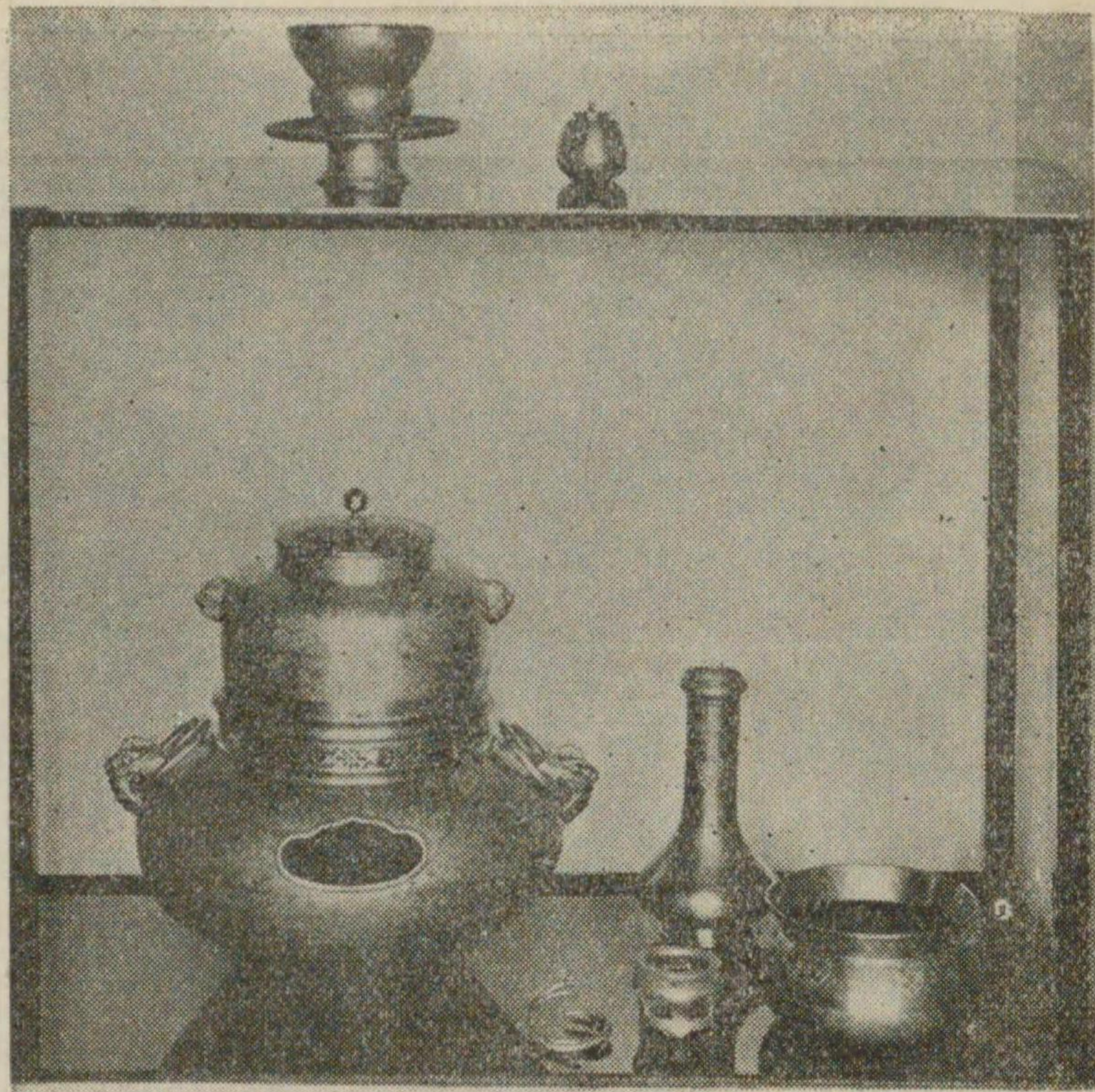


い封印をきつて、みな一様に、この唐櫃をのぞく。茶器が燦爛たる光りを發して、なみ居る人々の眼を射ると、或るものは、その目録と照し合はして、伯に『異狀ござりあせぬ』と、聲をかけるのである。すると靜かに封印は施されて、一同うやくしく退席するといふことになつてゐる。舊幕時代から、年一回の行事であるといふ。

この『金の茶釜』が、いつの時代に出來たものであるか、また何人が、作つたものであるかは誰も知らない。そこに、無限の興味が生まれて來る。伯爵家一門一統の人々は、代々、その解決に骨を折つたけれど、この物語のやうな『金の茶釜』は、依然、謎をつんだまゝ、今に至るも黙々として眼をとちてゐる。事實伯爵家には、この名器を説明する何等の書きものも残されてゐない。先祖の藤堂高虎から、當主高紹伯にいたるまでの十五代、約四百年の間、不思議なものとして來た。たゞ不出世の巨匠が、精根をこの品に移したものだらうといはれてゐるだけである。

『謎の名寶』前にも記したやうに、藤堂家代々の當主さへも、年にたゞ一回だけしか見ることの出來ぬ品になつてゐる。それも手にとるのではなくて、のぞきこむだけであるが、たゞ一つ、これについて、藤堂家に傳はるる口碑がある。

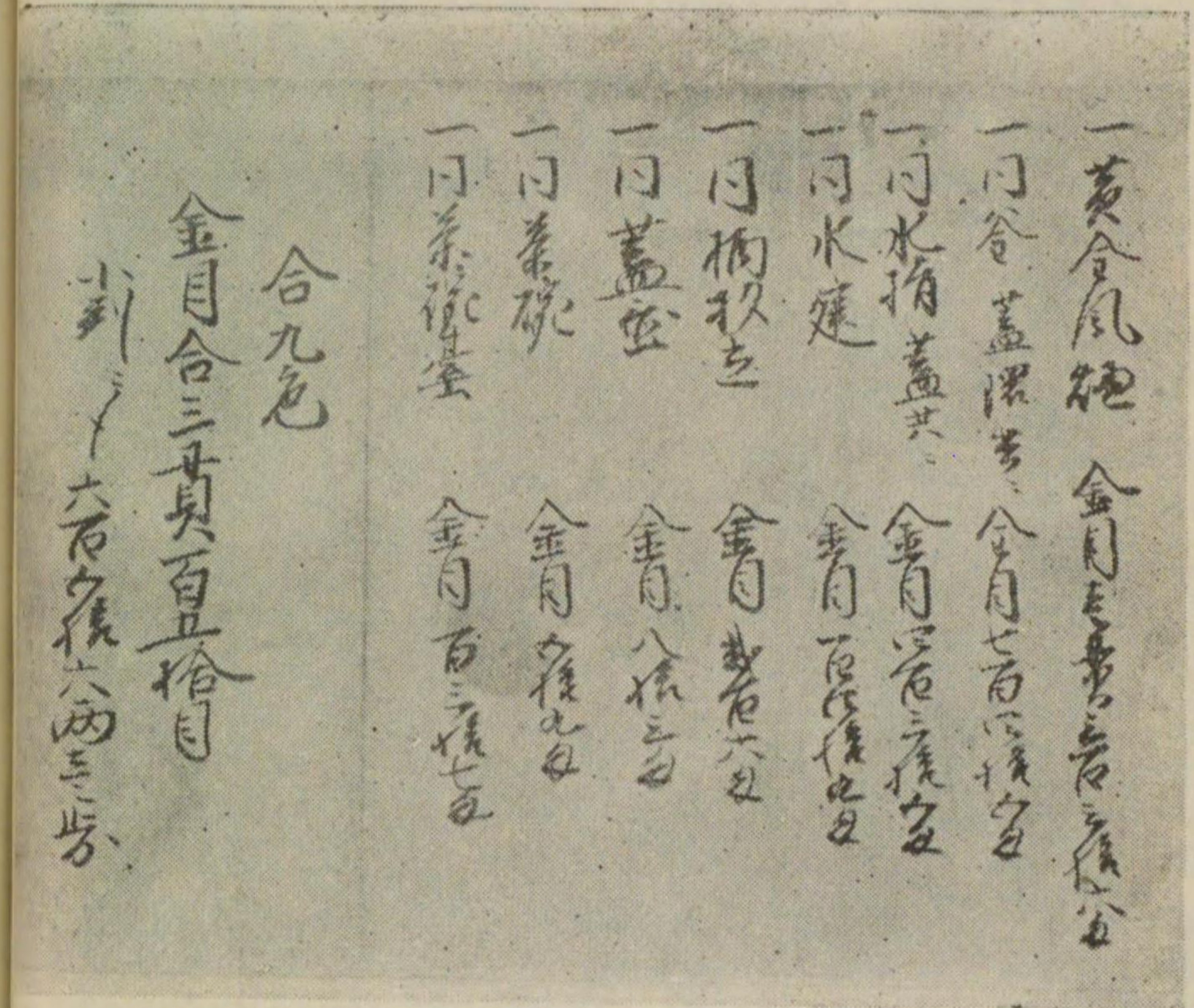
四國の僻邑、今治の里から身を起した祖先の藤堂高虎は、一戰より一戰へと、功名の密度を加へて行つた猛將、戦塵洗ふひまなき當時の豪傑連も、この加速度的戰勳の前には、みな、猫の如く頭を垂れた。豊臣の政治的勢力が徳川方に移らうとする雲行きを、早くも看取した高虎が、徳川勢に加擔したことは、豊臣方の士氣の前に、おそろしい脅威となつて現はれた。



金の茶釜

天下分け目の戦ひ『關ヶ原』の一戦





から、大坂城「夏の陣」や「冬の陣」に樹てた高虎の偉勳は、赫々、上下の視聽を一つに集めた。高虎はどの戦ひでも、最大の手柄である先陣をのがさなかつた。殊に元和二年五月二日の夏の陣における、いまの關西線八尾驛近く茶の亂戦には、巨人の斧を揮ふが如き勳功をたてた。大阪方に謳はれた名將、眞田幸村が戦死した若江附近の戦闘は、智略の高虎、散々の正攻で、敵の陣營を搔亂して置き、さらに大阪城の南方へ迂廻して、楔子のやうに食ひ入つたため、不落を誇る堅城も、空しく騎跡に踏み躪られたのである。

勝ち誇つた家康が、論功行賞を行つたのは、それから暫らくしてからのことであつた。その前に高虎は、思ひがけなくも、家康から招ぜられた。家康がいつになく上機嫌だつたのは、珍らしいことである。かれは、徳川勢の勝利を得たことを、客分である高虎一人のせゐであつたかのやうに褒めちぎつた後「何か前祝ひに、御褒美をあげませうかな」と考へこんだ。

むつかしい皺をよせてゐた家康の顔が、少しの間で崩れると、家康は大きくうなづいて、膝がしらをボンと打つて、「ウム、あるぞ」と笑ひ出した。それは、焼け落ちた大阪城の跡を掘つて見たら……といふのであつた。大阪城は、天下無二名城である。人間のあらゆる力が構成した、最大努力の表徴である。そして、關白秀頼の居城であつたので、家康には、高虎に興へるそのものよりは、ここを掘り返したら、何が出て来るかといふ、興味で一杯なのであつた。

高虎にも、家康のこの肚が、はつきりと讀めた。そして同じやうな興味が、胸から胸へ傳はると、二人は顔を見合せたが、次の瞬間には、爆發するやうな哄笑が、この間にははされた。高虎は従者二十餘名をつれて、焼け跡に行き、自分でも鋤鍬を持つて、一生懸命に、寶物の掘り

金の茶釜



出しにかゝつた。——暫らくしてから掘り出した最大の收穫が、いま藤堂家に傳はつてゐる、この謎に包まれた『金の茶釜』なのである。歸つて、家康にこの事を話すと、家康は、また笑ひこけた。なほ一説には、高虎の掘り出したのは、大きな金塊であつたので、豊家の風流を偲ぶため、これで『金の茶釜』を鑄させたのだとも傳へられてゐる。

この名器、天災に遭ふこと實に三四度、安政の震災に遭つた時は、『謎の茶釜』に『謎の奇蹟』がめぐつて、毛筋ほどの傷みもなかつた。大正十二年の震災當時は、藤堂家は本所横網にあつたが、總てを焼かれたので『金の茶釜』も失はれたものと思ひ、家令家職が焼け跡に行つて見ると、『謎の茶釜』は、燦爛と光り輝いてゐた。彌次馬も取巻いて『黄金だ〜』と驚いてゐたので、家職はすぐに砂をかけて、徹宵張番をした。また『金の茶釜』が示した一つの奇蹟に、人みな驚き呆れたといふ。

### 宗達、光琳、抱一各筆風神雷神 (口繪參照)

……建仁寺 伯爵徳川達道氏 子爵澁澤榮一氏蔵……

天下たゞ三つ、『風神雷神』の屏風が、二曲一雙づゝとなつてゐて、これがみな、筆者や持主が異になつてゐる。一は、京都建仁寺のもので國寶の指定、野村宗達の筆である。一は徳川達道伯爵の尾形光琳筆のもの、残る一つは、酒井抱一の筆、澁澤榮一子の家寶になつてゐる。三双の『風神雷神』——これを縦に綴る一つの鎖、そこに奇しき縁因が、秘められてゐるのも面白い。最初これを、宗達が描いた。宗達の畫風を慕つてゐた光琳は、この屏風を見て、ひどく感歎した。そしてこれを、模寫したものであつたが、光琳から繪の影響を尠からずうけてゐた抱一は、こんど筆をおろして、光琳のものを模寫して『風神雷神』を描いた。

最初『風神雷神』を描いた野村宗達は、近世初期において、大和繪の復興を企て、これを獨自の境に持ちこみ、咀嚼し盡して、一家の風を得た人である。宗達は、鎌倉時代に描かれた、藤原経隆の、『天神縁起』から思ひつき、大膽な筆を揮つて、この『風神雷神』を描いたものといはれてゐるが、巨匠宗達鏤心のあとが、建仁寺の屏風にうつされ盡してゐる。

○ 宗達に私淑する光琳が、この模寫した『風神雷神』あとを見ると、光琳の持つ繪の個性が、屏風

宗達、光琳、抱一作風神雷神



一杯にあふれ切つてゐる。當時、畫壇を風靡した宗達、——この巨匠を最高の標準に求めて、精進して來た光琳が、描きあげてからの會心の笑顔、そのほゝゑみが、名残りなく流れて、宗達のものと同じく違はぬといはれてゐる。

抱一は、また光琳を一世の畫匠と仰いだ。そしてかれは、光琳の描いた、この『風神雷神』の屏風うらに、せめても、自分の身の榮えにと、風神の方には、秋風になやむ草々を、雷神の方に、水あふるゝ雨後の景に秋草をあしらつて描いた。それが銀裏に映えて、何ともいへぬ、一種の哀愁に顫へてゐる。

抱一は、これを描き上げると、急に自分も『風神雷神』が描いて見たくなつた。そしてかれは、光琳のものを見て、そのまゝを、細密に模寫した。この畫には、抱一の持つてゐる、あらゆる畫趣を呼び集めて、かれの面目を、この一双のうちに躍らせてゐる。抱一は、これが出來あがるとこの裏にも、雷神の方へは、秋風に吹かるゝ草花を、風神の方へは、白百合、女郎花、薄などを描いたが、この裏は紙地なので、光琳の方に描いたものより、幾分手を抜いてゐる。しかし抱一

眞の妙趣が、こゝに湛へられてゐることは、いふまでもないことである。



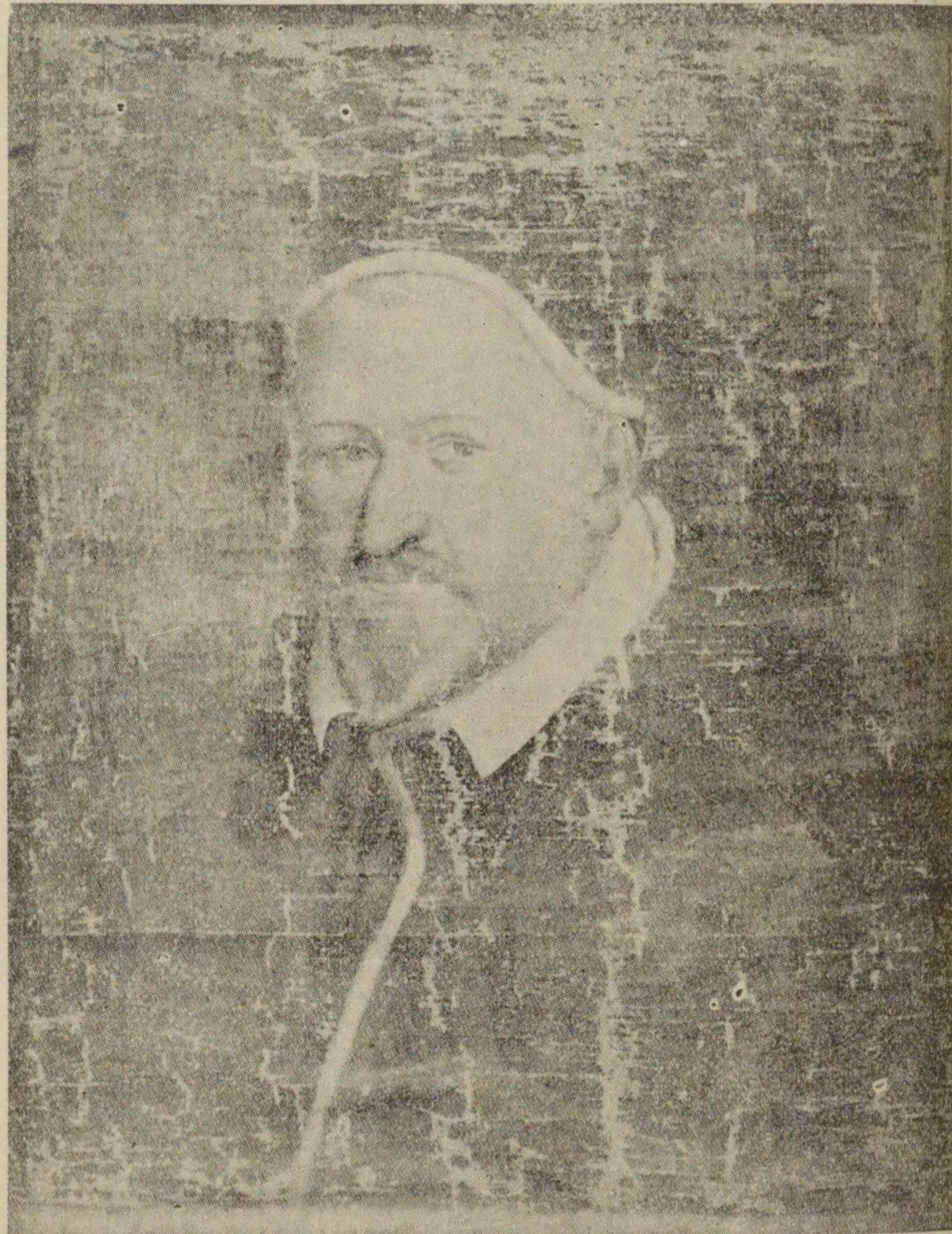
### 支倉六右衛門の羅馬土産

……伯爵 伊達興宗氏藏……

徳川二代の將軍秀忠は、戰塵やうやく收まると共に、俄に擡頭した來た切支丹を、虎のやうに怖れた。秀忠の怖れたのは、宗義そのものよりも、當然團結して來る、一つのある反逆的な勢ひに對してであつた。切支丹信者は、その信仰のうへに、到る所で極端な重壓を加へられた。

○ 奥州五十四郡の棟領である伊達家も、將軍家に對する遠慮から、切支丹信者の支倉常長が、ロ  
ーマから持つて來たいろくの秘寶があるにも係はらず、徳川家に仕ふる間、そのことをひた隠  
しに隠してゐた。

○ 切支丹の布教と、東洋殖民地と日本の間に於ける貿易を行ふために、安土桃山時代から、イス  
パニヤやホルトガルの紅毛が、かなり日本に渡つて來た。家康も、江戸に幕府を開いてから、通  
商には壓迫を加へなかつたが、布教は嚴禁した。二代秀忠の時、イスパニヤの宣教師ソロテが、



像畫世五ルウパ王法馬羅



浅草に會堂を建てたので、秀忠は直に、兵を遣はして會堂を焼き拂ひ、信者を捕へて極刑に處した。ソロテも捕へられて、斬首せられんとしたのを、伊達政宗が命乞ひした。そして政宗は、ソロテをつれて仙臺に歸つた。

政宗がソロテを救つたのは、大きな理由があつてのことだつた。そのころ九州の島津家が、琉球征伐に成功したので、霸氣満々たる政宗は、功名をあせつて、南蠻征服を密かに企てゝゐたのである。ソロテを仙臺に連れ戻つた政宗は、家臣支倉常長(通稱六右衛門)、今泉令史、松木忠作等をソロテの弟子として、イスパニヤの國情をさぐらせた。三人は機會ある度に、調べ上げた事實を復命した。矢も楯もたまらなくなつた政宗は、遂に貿易交換を名として、支倉常長をイスパニヤに遣はし、その國情を探ぐらせることゝなつた。常長は六十貫四百十三文を領し、大御番組の侍であつた。

政宗は幕府の政船職、向井忠勝に乞うて、屈強の船夫十名を雇入れた。一切の手筈と準備を整へ終ると、慶長十八年九月十五日、ソロテを案内役に、常長を大將格とした一行六十八名、百噸位の和船に乗つて、陸奥國牡鹿郡月の浦を船出し、こゝに驚嘆すべき世界的大冒險敢行の骰子は振られた。――いまから三百十六年以前の出來ごとである。

どんな風にして太平洋を渡つたか、一行は兎も角、ノバイスパニヤ(今のメキシコ)の西海岸アルパルコに着いたのが、翌年一月の廿八日丁度五ヶ月目であつた。ここで一行は和船を捨て、いろいろの見聞を書き留め、五月三日には、東海岸からイスパニア艦隊の客となつて、六月十八日、キューバ島のハヴノに着き、七月二日また發航して、九月二日、イスパニヤのサンルカールにつき、十一月廿日、遂にマドリッド府に着いた。一行は准國賓の資格であつたので、軍艦の中ではかなり優遇されたといつてゐる。ぶつ裂き羽織に長刀で、甲板をうろついてゐた形が想ひやられる。

翌年の元和元年正月卅日、一行はイスパニヤの國王、フィリップ三世に謁見した。常長は政宗の書を奉つて、交通貿易を開かれんことを、ひたすらに願つた。それから一行は、二月十七日に洗禮をうけ、九月三十日、つひに目的地のローマ府に到着して、法王ポール五世へ、謁見の支

支倉六右衛門の羅馬土産



度にかゝつた。十一月三日に、法王から、謁見すべき旨の沙汰があつた、澄み切つた初冬の陽を一杯に浴びて、錦繪のやうな形で練り歩いた一行が、紅毛を驚かせながら入府の式を行つたことは恐らくかれ等にとつて、一生のうちで、最も愉快な思ひ出であつたに相違ない。

一行が法王に謁見すると、法王は思ひのほかの上機嫌で、喜ばしさうに一行を迎へた。常長は政宗の書をうやゝしく奉つて、我が奥州に宣教師を派遣せられたきことと、東洋におけるローマ植民地との間に、交通したき旨とを述べて、大得意で御前を退下した。

### 支倉六右衛門羅馬市民權證書

……伯爵伊達興宗氏藏……

羅馬法王のポール五世が、珍客東洋人の一行に對する歡待は想像のほかで、すべての者に、すべての好意を寄せることを忘れなかつた。法王は常長に對し、破格な優遇から、つひに市民權さへ與へた。——伊達家の珍寶、この市民の證書を見ると、我國では見ることの出來ぬ珍しい羊皮紙に、美しい色彩が施してある。——これ等の一行が、ローマに滞在してゐることから、日本與

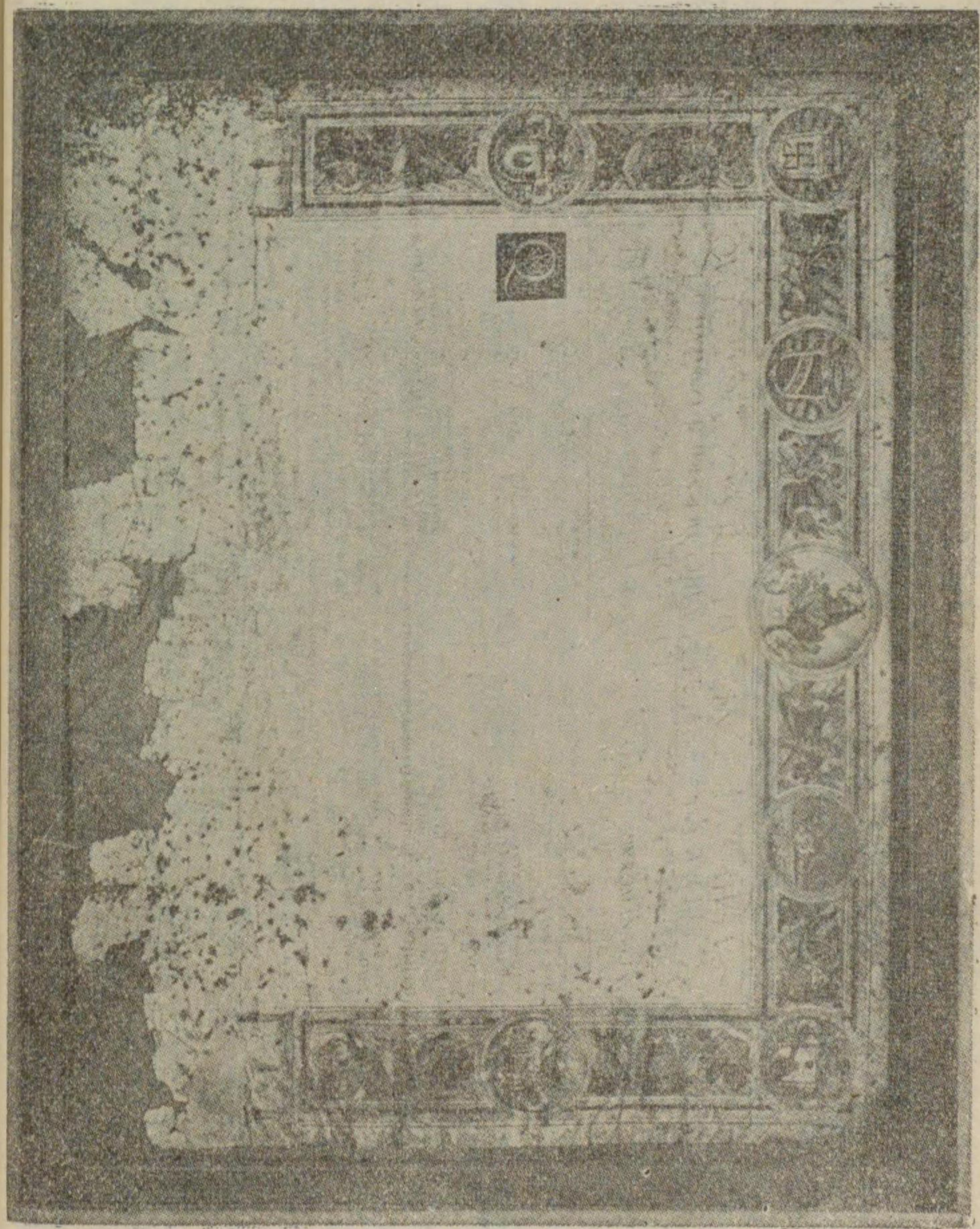
州王の政宗の名は、誰一人として知らぬ者なきまでに轟き響いた。

○ かなりの間、ローマに滞在した常長等は、使命を終へて、法王に暇乞ひに出た。法王は、一行と別れるのをひどく惜んで、油繪の肖像畫を出し、常長に托して政宗に贈つた。そしてその繪がローマ第一流の畫伯の筆になるもので、自分によく似てゐるといふ證明に、常長が、南蠻の祭服を着て合掌した姿も、描かせて贈つた。實際常長の肖像畫を見ると、その人に瓜二つだといはれてゐる。そして法王は、さらに長袴に大小をさした侍姿の常長の肖像畫も見せ、紀念として、永遠に保存することにしたいといつた。この侍姿の畫像は、今でもローマにあると傳へられてゐる。

○ 常長は、法王の國書をはじめとして、いろんな土産を持つてローマを出發し、歸途に就た。再びイスパニヤに戻り、こゝで、皇帝に再度の謁見をして、政宗への國書を貰つた。ノバインパニヤに着き、乗り捨てて置いた和船を操つて、太平洋の浪と戦ひながら、ルスンに立ち寄つた。更に準備を整へて發航し、元和六年の夏八月の夕刻、昔ながらの鳶色に沈む山々や、港にかゞやく灯

支倉六右工衛羅馬市民權証書





書證權民市馬羅

の色をなつかしみつゝ、出發以來八年ぶり、ふるさとに近い月の浦のさざ波を見た。

○ 常長は、視察して來た一切を、政宗に復命して後、すぐに南蠻征伐を行ふべき旨を、熱烈な口調で建言した。政宗もやうやく意を固めて準備中、切支丹に對する壓迫が、さらに痛酷を極めて來た。幕府の隱密が、伊達藩にも、影のやうに現はれて來た。そして常長が、切支丹信者だといふことが噂されてゐたので、つひに囚はれの人となつたが、仙臺光明寺の住職が、常長は檀家であるといふことを證明したために、僅に、命を繋ぎ得たといふことである。

○ こんなことから、政宗斗南の雄圖も、空しく斷念するの外はなかつた。常長もたゞ、命を賭けてローマに使ひした、豪膽きはまる外交政治家の先驅者であつたことにのみ終つた。そして、元和八年七月一日年五十二歳で死んだ常長は、その面、高額廣額であつたといふから、非凡の偉材であつたに相違ない。

○ 筆者にこの機會に、支倉家の跡始末をつけて置きたい。常長の次男常直は、父の影響から、火



片輪車の手筥

のやうな、切支丹信者であつたために捕へられた。兄常頼もこれに坐して、寛永十七年三月一日共に刑死した、常頼の子常信は、伊達家から、祖父の功によつて、五貫文の地を賜ひ、靜かな日を追ふて一生を過した。

伊達家の寶庫に納まつてゐる、常長がローマから持ち歸つたものは、法王が政宗に贈つた劍二ふり、法王の畫像、ローマの祭服、常長の市民權の證書、萌黄羅紗外套などすべてで十七點である。

片輪車蒔繪手筥

……小倉常吉氏藏……

作者は、誰であるか判らない。出來た年代も、正確にわからないが、兎も角、延暦年間——今から千五十年ばかり前から始まつた、平安朝時代の作品であることは、慥である。巨匠、畢生の魂をここに刻んで、作りあげたのが『片輪車の手筥』——これが今の世にいたるも形を少しも崩さずに、もとのまゝの姿で、優雅な匂ひを、ほのかに偲ばせてゐる。驚くべきことであるま

いか。

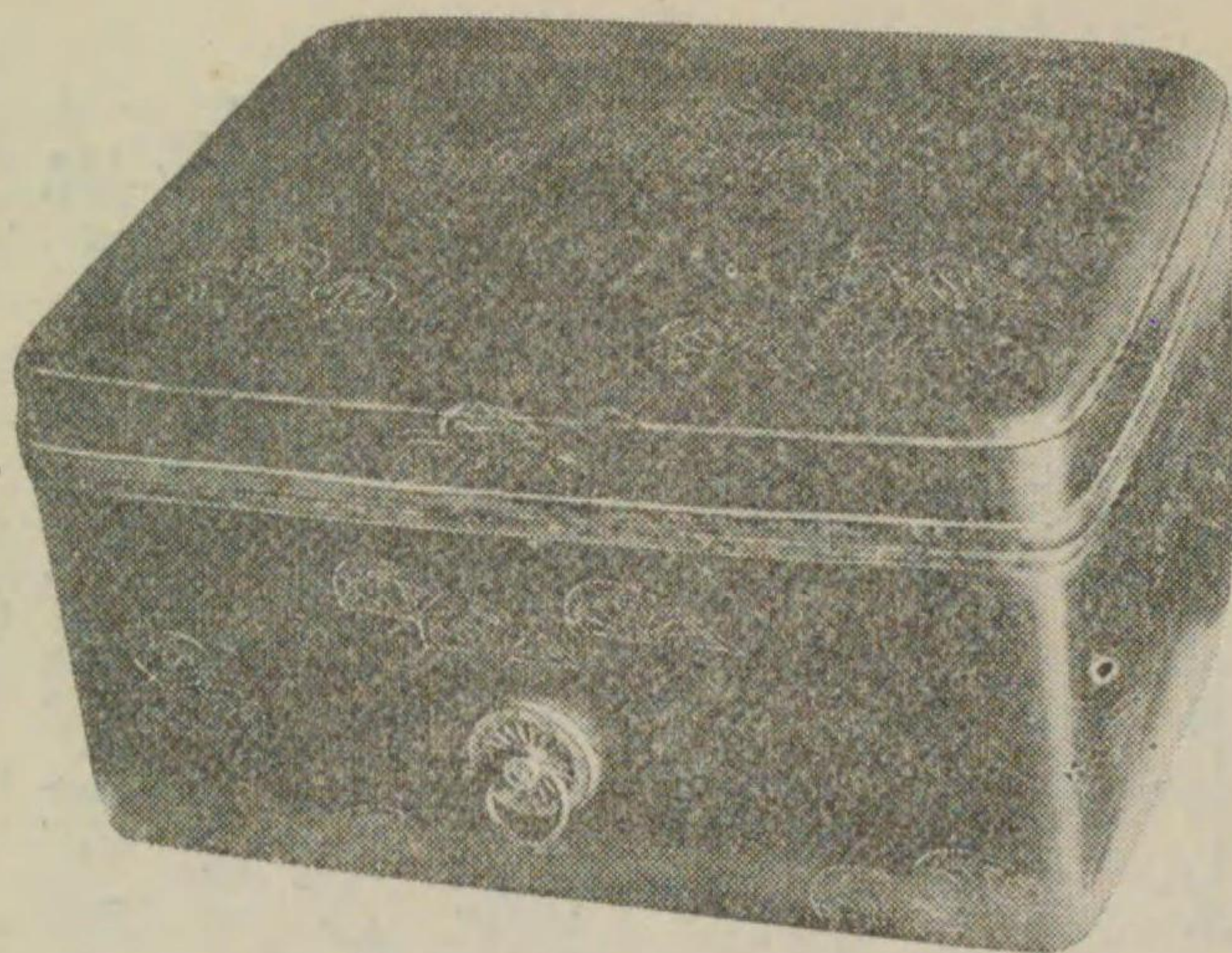
長さが一尺一寸、横八寸、それに豎が四寸五分ある。水波に浮き漂はせた、無数の車の紋散らし——『片輪車の手筥』といはるゝゆゑである。白く盛りこまれた車が螺鈿で、水は、磨き出しの金蒔繪、この間に、水草の花束をはめこんでゐて、これも、金蒔繪にあらはされてゐる。手筥の鏝は金着せ——この時代に、金無垢といふものは使はなかつた。これへ紫の紐がついてゐるので、美しき色のとり合はせ、絢爛眼を奪ふ、全く文字通りのそれである。

平安朝時代でも、恐らく、中期の制作に屬する藝術品であらう。この時代は、文學や藝術が、いちぢるしき刺戟をうけてゐた時である。中にも、蒔繪の如きは、長速度の進歩を見た。そのころの蒔繪は、支那から渡來した蒔繪師とか、その者に習つて、大成をした藝術家とか、時間や經濟問題を放れて、名を惜しみながら制作した時代であつたが、世を驚かすやうなものが出来ても、決して落款はしなかつた。



片輪車の手筥

鎌倉時代の美術工藝品には、可成落款があるので、藝術品考證のうへにおいて、いろいろの便宜があるが、平安朝時代——殊に中期のものにはそれがないので、この手筥など、殆んど、絶



片輪車の手筥

品と稱してもよい位の出来であるのに、作者の知れぬのは洵に残念なことである。それに手筥そのものゝ姿が、千餘年を経たけふも形を損せず、立派に昔のまゝを傳へてのでます。惜しまざるを得ないことになる。

奈良の巨刹、法隆寺には、その頃の藝術品——しかも、最上層に位するものを、多數蒐めて寺寶にした。それが徳川末期になると、法隆寺も財政的苦難にあつて、困窮をきはめた。當時の豪商錢屋五兵衛は、この沈倫を見るに忍びず由緒深き寺を護る意味で、多くの献金をしたので、法隆寺では、それに酬ゆるために、この手筥を贈つた。——また一説には、錢屋五兵衛が買取つたのだともいはれてゐる。いづれにしろ、金と手筥が、交換せられたことは事實であつた。尙法隆寺で

はこの手筥と同じものをつくつて、埋合せに置いたさうである。

錢屋五兵衛は加賀の人、貿易によつて巨富を積んだ男であるが、かれが加賀の河北潟を埋立てゝゐる最中、猛烈な流行病が発生した。その病氣は、河北潟の魚がもたらしたもので、五兵衛が、こゝを埋立てするため、魚に投毒したものだといふ疑ひと、國禁を犯して、外國と貿易したといふ二つのことから、嘉永五年の春、この裁判が始まり、つひに關所の判決を下された。その時没收せられた家産の中に、無論この手筥もあつた。——五兵衛の死んだのは、嘉永五年十一月、齡八十二であつた。

この手筥は、徳川家よりさる大名に呉れなものであるが、その大名の後が、大正十二年、家政整理をしたとき、今の所有者小倉常吉氏へ、廿六萬圓で渡した。——その華族の手にあつたとき帝展第五部の審査員赤塚自得氏が、この手筥の命數つきる日を懼れ、同じものを作りたといふ申し込んだが、華族は、それさへ許さなかつた位に、珍重してゐたものであつた。



# 明の冊封

……子爵 石川成秀氏藏……

わが國の歴史を點綴する人物のうちで、豊臣秀吉ぐらゐ、多面多色な存在も珍しい。一世の豪華桃山城の一隅、老梅の影、墨の如く障子に篋めこまれた春の茶室で、千利久等から茶道を學ぶ風流氣があるかと思へば、朝鮮をふみ躪つた餘勢を藉つて、明四百餘州に軍を進める雄圖も抱いた。かれが功名史へ浮び出た振り出しの姿がすでに奇、動中に靜を得、靜中に動を擱む。端倪すべからざるかれの行動が、かれの一生を華やかにつゞり合はせる。

○ 秀吉の『人生道中双六』のうちで、われ／＼に誤り傳へられてゐる二齣の場面がある。一つは、明使を迎へた場所が、伏見桃山城になつてゐることである。これは明かに大阪城の誤り、もう一つは、秀吉の一生のうちで、最も痛快な歴史の場面、明の冊封を裂いたといはれることである。事實、小學六年生の歴史教科書にも、その事が立派にのせられてゐる。だがこの冊封は、雲鶴模様を織りなした綾絹のきれなので、容易に裂き得べきものではなかつたのである。

○ この問題の冊封は、いま、子爵石川成秀氏の藏、無論門外不出の珍品、この冊封を見ると、秀吉が裂いたといふその痕が、少しも見出だせぬ。従つて、文部省によつて綴られた、わが國歴史の一部を根本から覆へす立派な證據、またこれを改訂せしむるうへに、唯一の確實な資料となるこの冊封、いかにして石川子に傳はつたか。――

○ 文祿元年、鷄林八道を暴風の如く席卷した秀吉は、さらに壯圖をのべて一舉明をも屠るべく兵馬長驅の計畫を樹てた、明の万曆帝は、この事を聞いて驚きおそれ、すぐに、腹臣の陳惟敬を使者として、征鮮の將、小西行長のもとへ和議を申し入れた。その條件には『皇女を人質として日本に送ること』や『朝鮮を半分日本の領土とすること』などが書かれてあつたので、行長も乗り氣になり、この趣を、肥前名護屋へ柳營を進めてた、秀吉のもとに指揮を仰いだ。

○ 秀吉も、この條件には異議を稱へなかつた。やがて陳惟敬は名護屋で秀吉に面謁して、万曆帝の意を傳へ、さらに、あらゆる謙恭の態度をつくして、ひたすらに和睦を乞ふたので、秀吉も、



皇祖誕育多方  
 昔我  
 固不率俾  
 海隅日出  
 命薄將監  
 不尊親帝  
 覆地載莫  
 廣運凡天  
 皇帝制曰聖仁  
 大承運  
 奉  
 之域貞珉  
 遠錫扶桑  
 龜紐龍章

大蒙榮施  
 鎮國之山  
 嗣以海波  
 之揚獨致  
 風占之隅  
 當茲盛際  
 宜績彝章  
 答爾  
 平秀吉  
 起海邦知  
 尊中國西  
 馳一介之  
 使欣泰來  
 同此叩萬

改めて遣はされる明の正使を迎へ、平和條約をむすぶべき旨を約束した。陳惟敬は、重荷をおろしたやうな顔をして國に歸つた。

やがて、明の正使、揚方享等の一行三十餘名は、堺の濱へ着いた。秀吉は代理の者を送り、この使者に對して慰勸の禮をとらせた。一行は、金絲銀絲で縫ひ取つた、眼も眩むやうな装束に、珍奇な形をした帽子を戴いてゐた。これ等の使者は、まだ馬に乗つたことがなかつた。差し廻された馬に、こはんながら乗つたが、馬が歩むたび、一様にこぼれ落ちた。これ等の使者を見物に來てゐた老若男女のむれが、そのをかしさに耐へず、腹を抱へて笑ひこけるので、警護の侍は眼を三角に、嚴めしく叱りつけた。

明の揚方享は、いよく、大阪城に迎へ入れられた。當時桃山城に、これ等の使者を迎へる筈であつたが、大地震のために、形なきまでに破損したので、急に大阪城に模様替へをしたものである。慶長三年九月、世を駭かせる明使との會見の幕は、大阪城の大廣間で切つて落されたのであつた。



その日の秀吉の氣持ちは、爽涼として、水のやうに澄み切つてゐた。そして、晴れやかなかれの胸には、一片の雲さへ去來せぬ。生れてさう覺えのない、得意の絶頂を攀ぢてゐるのであつた。上機嫌の秀吉は、綺羅星のやうに居流れた群臣を尻目に、大阪城の大廣間、一段高い所に座を構へた。秀吉はやゝもすれば、躍りあがる心の駒に、手綱を引絞ることさへ忘れ勝ちである。

○ 明の使者はこゝへ請ぜられて、事は豫定通りに運んで行つた。やがて揚方享は、錦の袋から取り出だした万曆帝の冊封を、うやうやしく秀吉に捧げた。秀吉は、心を押し鎮めながら、僧の承兌に、これを読むことを命じた。諸大名は、しはぶき一つさへせぬ。大廣間は、水底を探るやうな静寂さであつた。

○ 承兌は、冊封を高らかに讀みつづけるうちに、次の行に眼をうつすと忽ち、顔色土のやうに變つた。聲もよどみ勝ちになると、秀吉は不興げに、次を讀めと、光らせた眼で催促した。――「汝を封じて、特に日本國王」と讀みかけた時には、いかづちの如き秀吉の怒聲が、大廣間の隅々にまで一杯に響いた。

○ 秀吉は先刻から、万曆帝の不遜な言葉に、尠からず、心の動きを覺えてゐた。この一言――秀吉の胸は、こらへ得ぬ怒りを感じた。その怒りは、侮辱をうけた時に發する怒りと同じものであつた。秀吉は、承兌から冊封をひつたくると、矢庭に疊へ叩きつけた。諸大名は、耳を掩ふてひれ伏した。揚方享等の一行は、身の禍ひを怖れて、腰さへも起て得なかつたといふことである。

○ その冊封には、次のやうに記されてあつた。

制に曰く、聖仁廣運、凡て天覆地載、尊親せざるは罔し、帝命溥ねく、將に海隅日出に暨ぼさんとし、率俾せざるは罔し。昔我が皇祖、多方を誕育し、龜紐龍章、遠く扶桑の域に錫ひ、貞珉大篆、榮を鎮國の山に施す。嗣いで海波の揚がるを以て、偶風占の隔を致す。茲の盛際に當り、宜しく彝章を續ぐべし。

○ 一 咨爾豊臣秀吉、海邦に崛起し、中國の尊ぶを知る。西に一介の使者を馳せ、欣慕來同し北に万里の關を叩き、内付を懇求す。情は既に恭順より堅く、思は柔懷に斬むべし。茲に特に



爾を封じて日本國王と爲し、之れが誥命を賜ふ。於戲寵賁芝函冠裳を海表に襲ひ、風行一服、藩衛を天朝に固うす。爾臣職の當に修むべきを念ひ、約束を恪循し、皇恩る己に渥きな感じ歎誠を替る無たれ。祇みて綸言に服し、永へに聲教に遵ひ、欽めよや。

○ 秀吉は明使を迫り返すと、すぐに兵馬を閲して、またも鮮明征伐の大業を企てたが、その計畫も半にして、齡六十歳、つひに他界した。冊封は、寵臣堀尾茂介吉晴が手に入れた。堀尾吉晴は出雲隱岐を領し、松江で二十三万五千石を賜はつてゐたが、吉晴の孫忠晴に子が無かつたことから、絶家することになつたので、忠晴は女婿である伊勢龜山城主で、いまの石川子の祖先にその歴史的絶寶である冊封を始め、所藏の寶物をみな傳へた。

○ 冊封は、前に書いたやうに、綾絹で記されたもの、青、赤、黄、白、薄鼠の五色にわかれたれ、雲鶴模様の織出しがあつて、長さ一丈八尺七寸、幅一尺四分、日付の所には、五寸三分角位の『製語の印』といふ印があり、終りには、製作者の名と場所も記されてゐる。

明の万曆帝が、秀吉に送つたのは、冊封とともに、國王としての秀吉が着るべき、紗帽、常服、羅、大紅織に、金モールで、麒麟の模様のついた着物等十數點であつた。これらの服はいまだに前田侯爵や、上杉伯爵の秘庫に、珍重保存せられてゐる。

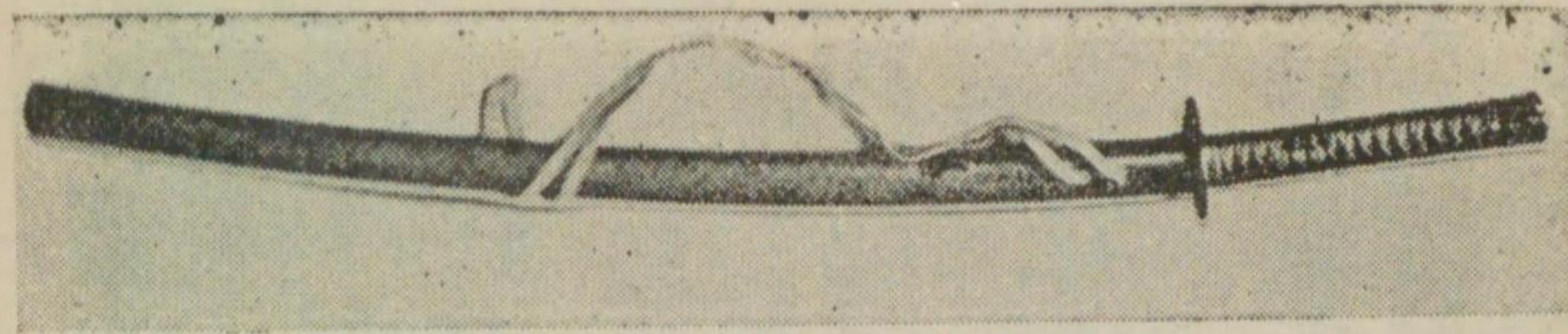
### 紅雪左文字太刀

… 侯爵 徳川頼貞氏藏…

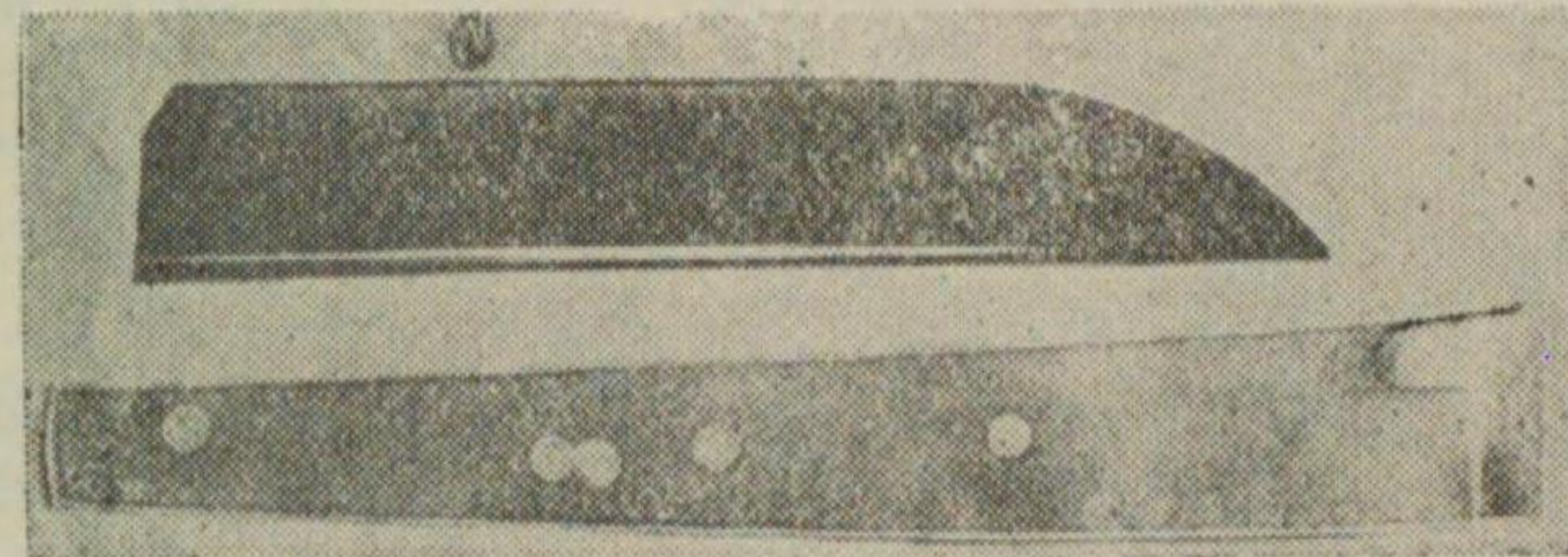
○ 歴史が、日本にうち建てられて以來、政治的霸權を握つた、歴代の將軍のうちで、徳川家康ほど質素な男はなかつた。ふだん、木綿の袖無しを着てゐるやうな男なので、錦繪を展べたやうな挑山時代、派手者秀吉とくらべて、配色にいちじるしき珍奇を覺える。この消極的生活形式が内を固めて、十六代の基礎をつくつたことは、無論の話である。

○ 家康の佩いた太刀の一振、いま紀州家——徳川頼貞侯の秘藏になつてゐる。作者は正宗の高弟で、築前の左、銘に『築前住左』と刻まれてゐる。名づけて『紅雪左文字』、二尺五寸八分は、水もしたゝる大業物である。





「字文左雪紅」料差の康家



「銘と身刀」字文左雪紅

○ 劍工一代、魂をうちこんで、觸るゝもの、悉く斬れよと鍛へてはゐるが、つくりは、さすが家康の佩いた刀だけあつて、驚くほど質素なものである。赤銅鍔で、鞘が黒塗り柄は革の着たお粗末のもの、權勢並びなき、徳川家開祖の大御所、家康のこの刀のつくりの質素さ、當時の旗本ですら、こんな刀は持たなかつた。

○ この時代にも、武士の魂には、それ相應の見得があつた。みな地味なものながら、刀に、相應の拵らへはあつた。しかし家康は、自分の抱いてゐる地味な氣持ちを、この刀のつくりにまで延長させ、すぐに戰場への用意に、役立つものにした。そして自ら、天下至寶の名刀と稱してゐた。數あ

る刀のうちで、この「紅雪左文字」ばかりは、決して側を離さなかつた。

○ 北條氏直の家老で、當時囊中の錐と稱せられてゐた、坂部岡紅雪齋——のちに、岡紅雪齋、俊敏隼の如き策謀を胸に疊んで、羽柴勢を苦しめたが、天定まつて捕虜となつた。秀吉が北條方を最も憎んだことは、氏直が約を背き名胡桃城を奪つたことであつたので、秀吉は紅雪齋を引出し、そのことを詰問した。かれは平然と申開きをし、主君を辱しめなかつたので、秀吉は、京で磔刑にするつもりであつたが、かれを助けて側近に置いた。——一説には、紅雪齋の豪膽に怖れ、恩愛の枷に、反逆の心を柔げたものだともいはれてゐる。かれが佩いた刀こそ、かれ自らが名づけた「紅雪左文字」であつた。

○ この刀が徳川家康に傳はつた。家康は小躍りして、日夜の愛撫を惜しまなかつた。家康が身内のなかで、最も可愛がつてゐたのは、第十子、南龍院頼宣であつた。家康は、二代秀忠に與へずこれを頼宣に與へた。——爾來、紀州家では、門外不出の祕寶とし、家康よりうけた一つの遺訓



とき、深くかへり見て、世々に傳へて來た。

法然上人繪詞傳（口繪参照）

……増上寺藏……

それは文治二年の秋のことであつたから、靜かに眠る京の藁は、聲もなく流れ行く風に、寂しく撫でられてゐたところであつたらう。この古沼のやうな都の靜けさを破つて、牛車で練り歩く公卿にも、花うる娘たちにも、ひとしく眼をまるくさせるやうな、一つの大きな事件が起つた。それは當時の知識と謳はれた法然上人と、比叡山延曆寺の大僧正法眼顯眞師とが、一世の大法輪を行つたことであつた。場所は洛外大原の里、今の世に残る大原談議である。

『法然はつねは智慧ちゑの深い男をとこだが、いさゝか偏執へんしつのところがある』——顯眞けんしんはいつか、同門どうもんの或人あるひとに、かう洩もらしたことがあつた。法然はつねはそのころすでに、叡山えいざんを下つて京洛きやうらくに居かまを構へ、念佛ねんぶつに精進しやうじんしてゐたので、廣學くわがくの譽ほまれ、都鄙とひに高たかかつた。この言葉ことばがいつしか法然はつねの耳みみに入ると、かれは、『我われの知らぬものには、必ず疑うたがひを起おこすものだ』と、一矢しを酬むくいた。

顯眞けんしんはそれを聞くと、自分じぶんの輕卒けいそつな言葉ことばに恥はぢた。そして百日間ひゃくにちかんといふものは、大原おほはら在ざいの勝林しやうりん院いん丈六堂ぢやうろくどうに立籠たてこもつて、淨土じやうとの章疏しやうそを披閱ひえんし、精魂せいこんを碎くだいて研究けんきうした。間もなく法然はつねの許へ、『淨土じやうとの法門はふもんを研究けんきうしたから、問答談議もんたうだんぎに來てくれぬか』と、顯眞けんしんから立會演說たちあひえんせつを申し込んだ。法然はつねはすぐに承知しやうちして、當時たうじ、新人しんじんの聞きこえ高たかかつた俊乘坊しゆんじやうぼう重源ぢゆうげんや、印西いんさいなど卅餘名しやくじゆめいを引具ひきぐして、直ただちに丈六堂ぢやうろくどうに向向むかした。——重源ぢゆうげんは留學生りうがくせいとして入唐にふたうした人で、奈良ならの大佛だいぶつをつくつた有名ゆうめいな男をとこであつた。

燃ゆるやうな紅葉もみぢが、京きやうの山谷さんこくをあか〜と染め、加茂かものの流れはむせびながら、錦繡きんしやうの下をくゞつて行つた。その時に丈六堂ぢやうろくどうで行はれた大法論だいほろんは、さながら、閃々火せんくひと熱ねつの鋭い交錯かうさくのみであつた。この論争ろんさうは一晝夜ちゆうやにわたつた。双方さうほうとも、あらゆる力を傾けて搏ち合つたが、法然はつねの蘊蓄うんちやくを極めた淨土じやうとの談議だんぎは、満座まんざの衆しゆを説破せつぱ心服しんぷくし終つた。顯眞けんしんをはじめ叡山えいざんの一門もんは、香かうを炷たき念佛ねんぶつを唱へて、三日三晩さんじつさんばん、法然はつねに敬意けいぎを表して引揚ひきあげた。京きやうの街々まちまちは、この論争ろんさうを、たゞ駭おどろき仰あぶぐのみであつた。



この『大原談議』は、『法然上人繪詞傳』にすべて收められてある。これが明治三十二年、國實に指定された。芝増上寺の庫裡深く秘められてある寶物で、紙本着色の二卷、京の知恩院と、大和の當麻寺に所藏されてある四九八卷の上人傳とともに、最も世に珍重せられてある。三つのうちでも、この二卷が、最も原始的價値を有するものといはれ、上卷は豎一尺八分に長さ卅二尺、下卷は豎一尺八分、長さ卅六尺四寸といふ見事なものである。

『法然上人繪詞傳』に盛られてゐるのが、上卷は

建塔、施行供養中陰圖、母子訣別登途人寺修業圖、邂逅關白殿下登山入室圖

また下卷には

剃髮出家圖、青龍出現圖、法皇殿御談議圖、道俗教化圖、善導來現影像拜寫せしむる圖、三尊影現圖、大原談議行道念佛圖、上西門院御談議圖、上西門院說戒小蛇得益上天圖

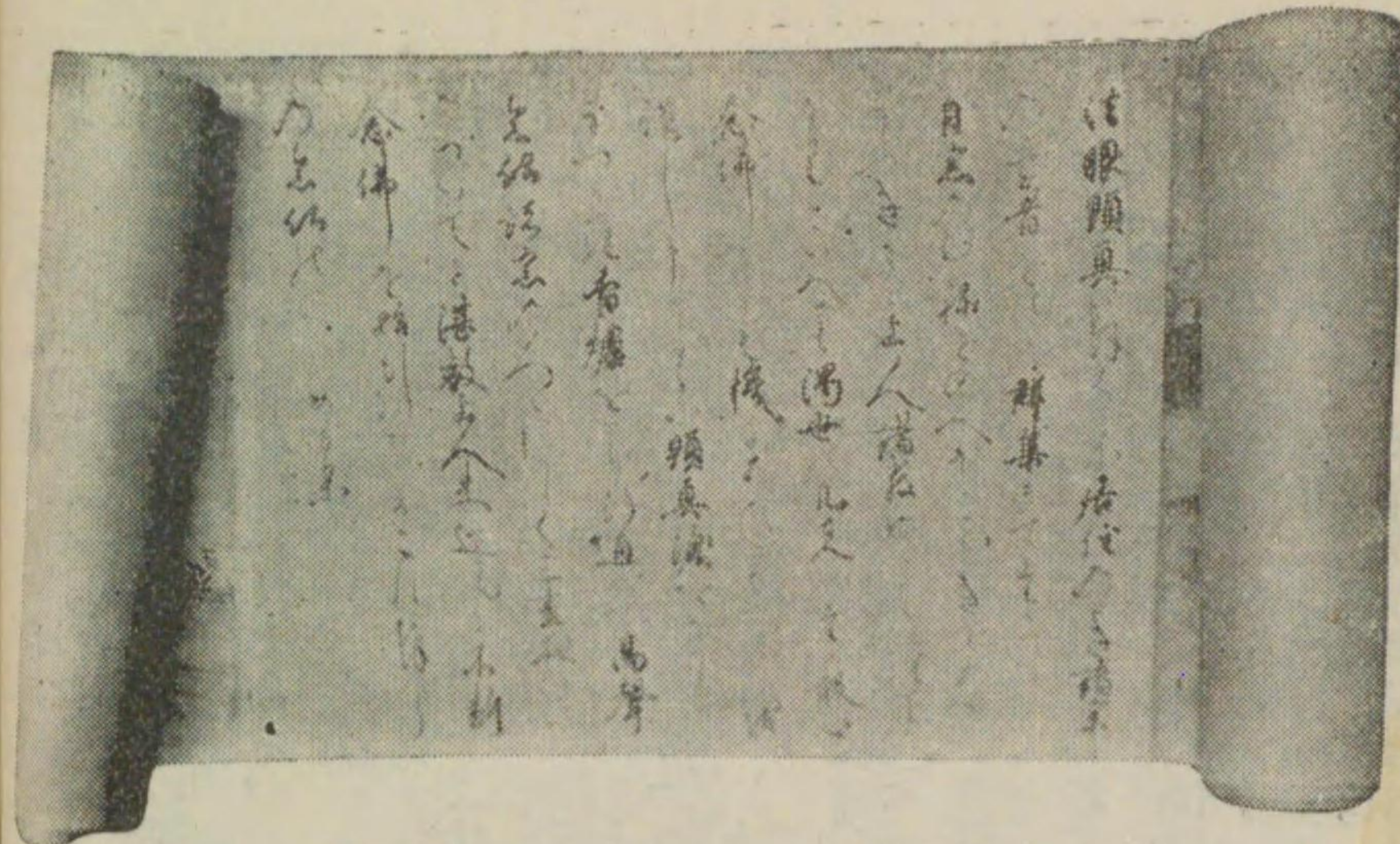
法然上人繪詞傳の繪の筆者は刑部土佐吉光、いまから六百三十年前、土佐派を繼いだ當時の巨匠である。佛畫を最も得意とした吉光が、この繪筆の先にすべてを投げ傾けたといはれるだけ

あつて、雄渾の筆致と、極まりなきその構想、加へて絢爛なる藤原時代の人物風俗が、畫中に躍動してゐる。詞書は、後二條帝の御筆、一部の書繼ぎが、大覺寺門跡、梶井宮空性法親王、法然の行狀と事蹟を記されてゐる。

慶長十五年の六月、増上寺十二代の存應上人が、勅宣を畏んで後陽成天皇に拜謁した。そして淨土一宗の幽旨と、大乘菩薩の妙戒をお耳に達したところ、帝の御感に叶つたことから、特別の思召で、この『法然上人繪詞傳』の二卷を下賜せられた。以來増上寺寶物中の隨一として、深く秘められてゐるものであつたが、當代大和繪の大家松岡映丘氏が、一門と連れ立つてこの『繪詞傳』を見、その最高峰藝術の魅力に、限りなき驚きを覺えたといふ。

ところが、この下卷にのせられてゐる『大原談議』の繪が原因となつて、現在なほ引續き、淨土宗と淨土眞宗との間に、『心行問題』といはれて、論争を捲起してゐることがある。それは『淨土教の理論と實行は、いづれを先にすべきか』といふ問題に對して、法然は、實行先決論を唱へたが、親鸞は、理論先決論を固執して止まなかつた。





「傳 詞 繪 人 上 然 法」

○ 親鸞は法然の弟子である。「繪詞傳」にある大原談議の場へも、法然の伴として赴いた。しかし主張の相違から顯眞の側に起ち、師の法然を相手に論破に努めたと、淨土眞宗派ではいつてゐる。だがこの「繪詞傳」を見ると、親鸞は列席してゐない。これがまた議論をかもし、當時すでに大成の親鸞が、列席してゐない筈はないといへば、淨土派側では、親鸞など、お弟子でもなければ、無論大成もしてゐなかつたと、後世口角の沫、なか／＼に拭はれやうとはせぬ。

○ 法然の死んだのは建暦二年の正月二十五日、京都東山の大谷禪房で、齡八十歳であつた。その日は雪催ひの空が、重くたれこめてゐた。法然は長承二年の四月七

日に、美作久米、南條稻岡の庄にうまれて、九歳のとき、父塗國時、非業の死を遂げたが、その遺命を守つて菩提寺に入つた。十五のとき、はる／＼と比叡山にのぼつて出家受戒した。淨土宗を別開したのは、高倉天皇の御宇、承安五年の春三月、京の街には、櫻霽のたちこめてゐる時であつた。

○ 七十五歳のとき、南都北嶺の衆徒の強訴と、門弟の間に起つたある事件のために、法然も禍ひせられて、はる／＼土佐の國に流されたが、間もなく赦免にあつて京に歸つて來た。没後は、敬慮畏くも、大師の諡號を賜はること六回におよんだ。

○ 元祿十年正月十八日、東山天皇より圓光光師、寶永八年正月十八日、中御門天皇より東漸大師寶曆十一年正月十八日、桃園天皇より慧成大師、文化八年正月十八日、光格天皇より弘覺大師、萬延二年正月十八日慈教大師、明治四十四年二月二十八日、明治大帝より明照大師、大正三年二月二十七日、大正天皇より勅額「明照」を下賜されるなど、餘榮はかれの點じた法燈とともに、燦として光り輝いてゐる。



牧溪作江天暮雪

# 牧谿作江天暮雪

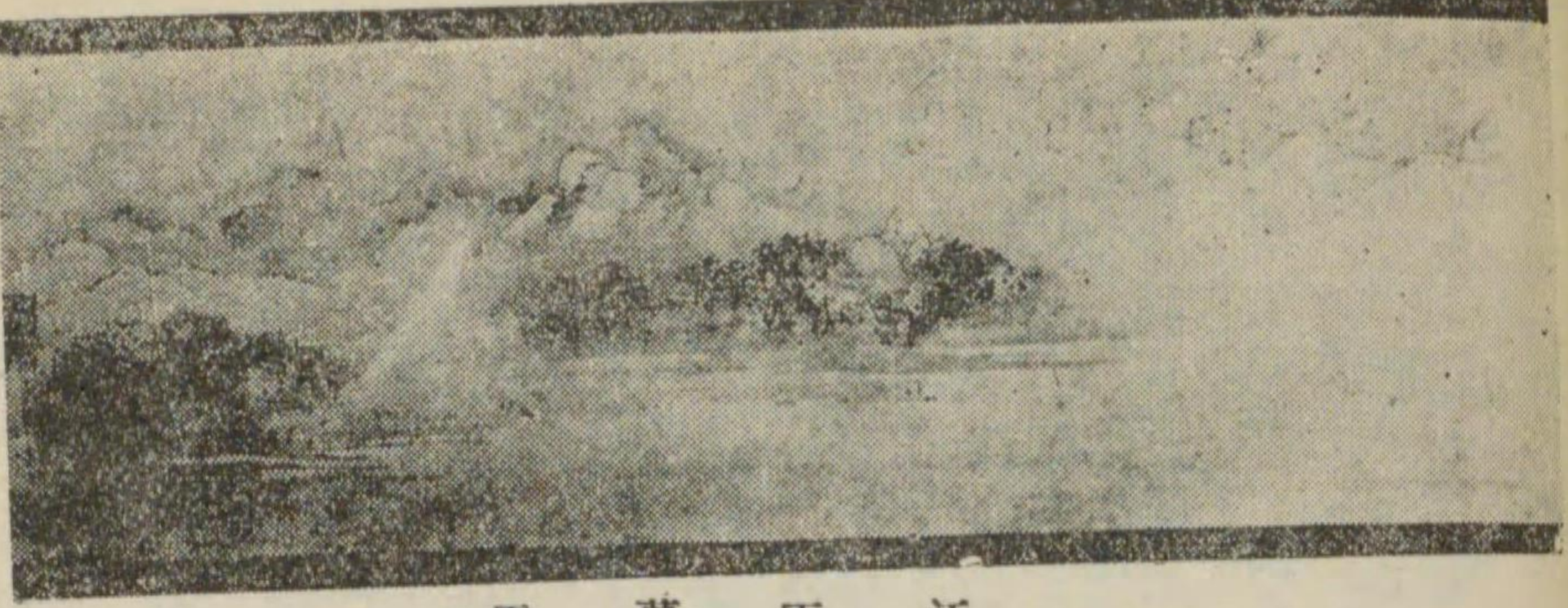
……末延道成氏藏……

足利三代義滿の時代、——後村上天皇の正平年間、いまから五百八十餘の昔に、支那南宋の畫聖といはれた。牧谿の紙本墨畫、十六景にわかたれてゐる大軸小軸、この二卷が渡來した。——牧谿は、十三世紀末の人で、畫人として天下無二の名、全支にとどろいた人である。一管の繪筆を携へて、旅から旅へ流浪をつゞける名人氣質、この繪の前に、いかなる權力者もひた伏したと傳へられてゐる。牧谿は、殊に風景畫を、くした。

○ 風流ものゝ義滿は、この二卷の渡來を聞いて、小兒のごとく欣びまはつた。そしてその繪が、かれの權勢と金權の前に、あまりにたやすく轉げこんで來たことが、義滿には、いさゝか不滿にさへ思はれた。壯麗一代をほこつて、東山のほとりに金閣寺を築き、世を駭かせたほどあつて、彼の透徹した鑑賞眼には、當時の美術家、悉く舌を捲いたさうである。

○ その時代の床の間は、四幅、六幅、八幅といふ風に、軸が並べられた位に大きなものであつたが、それでも足りず、鴨居にまで、横物をかけることがはやつた。義滿は、十六景を一景づゝに切離し、長々と懸けては、かれの朝夕を楽しんでゐた。

○ この中でも、義滿が最も愛してゐた部分は、『江天暮雪』の景であつた。連山雪を頂いた寒江の夕間暮れ、見る人に寒さ慄々として迫つて來る。これは大軸の末卷であるらしい。繪の上部にある『龍山』といふ印は、元の時代における所有者の名らしく、又下部に捺されてゐる『道有』のしるし、これは義滿のものといはれてゐる。二卷を切つて十六幅、かれの珍藏品も、足利一家没落後は、いづくともなく散逸した。



江天暮雪

日本名寶物語

○ 後世、この繪の珍重せられたことは想像のほかにあつた。天正四年、織田信長は、濃州安土城を築いたとき、見事な出來ばえによるこんで、



牧谿作江天暮雪

工事監督をしてゐた羽柴秀吉を呼び、大軸八景のうち、『洞庭秋月』の一幅を興へた。秀吉が、鬼の首でも獲つたやうにして歸つた噂が傳はると、諸將はみな過分の恩賞を、こゝろよく思はぬ程であつた。

○ 徳川初期の頃の日本畫壇に、この繪の興へた影響ほど、深いものはなかつた。一流の畫家は、悉くこれを標識として進んだ。代々の將軍たちが、裏打ちをしたこの繪の絶對的價値が、流れ行く藝術の水をせばめて、自ら、こゝの通路へ導いたこともあらうが、兎も角、この繪の持つ魔術に、みな踊つて來たことは、動かせぬ事實である。

○ 家康は、四散してゐる牧谿の十六幅を、一生懸命で蒐めた。そして、ごく稀に——ごく稀に、大功を建てた家來には、一幅づゝ興へてゐた。家來は、これを拜領することを、一國一城を貰つたよりも名譽にしてゐた。家康は、自分の第十子南龍院頼宣を、殊のほか可愛がつてゐたので、大軸の三幅を、思ひ切つて興へた。頼宣は、日本全體を貰つたより、嬉しかつたといつたさうである。

經隆筆雪中大内圖

……安田善次郎氏藏……

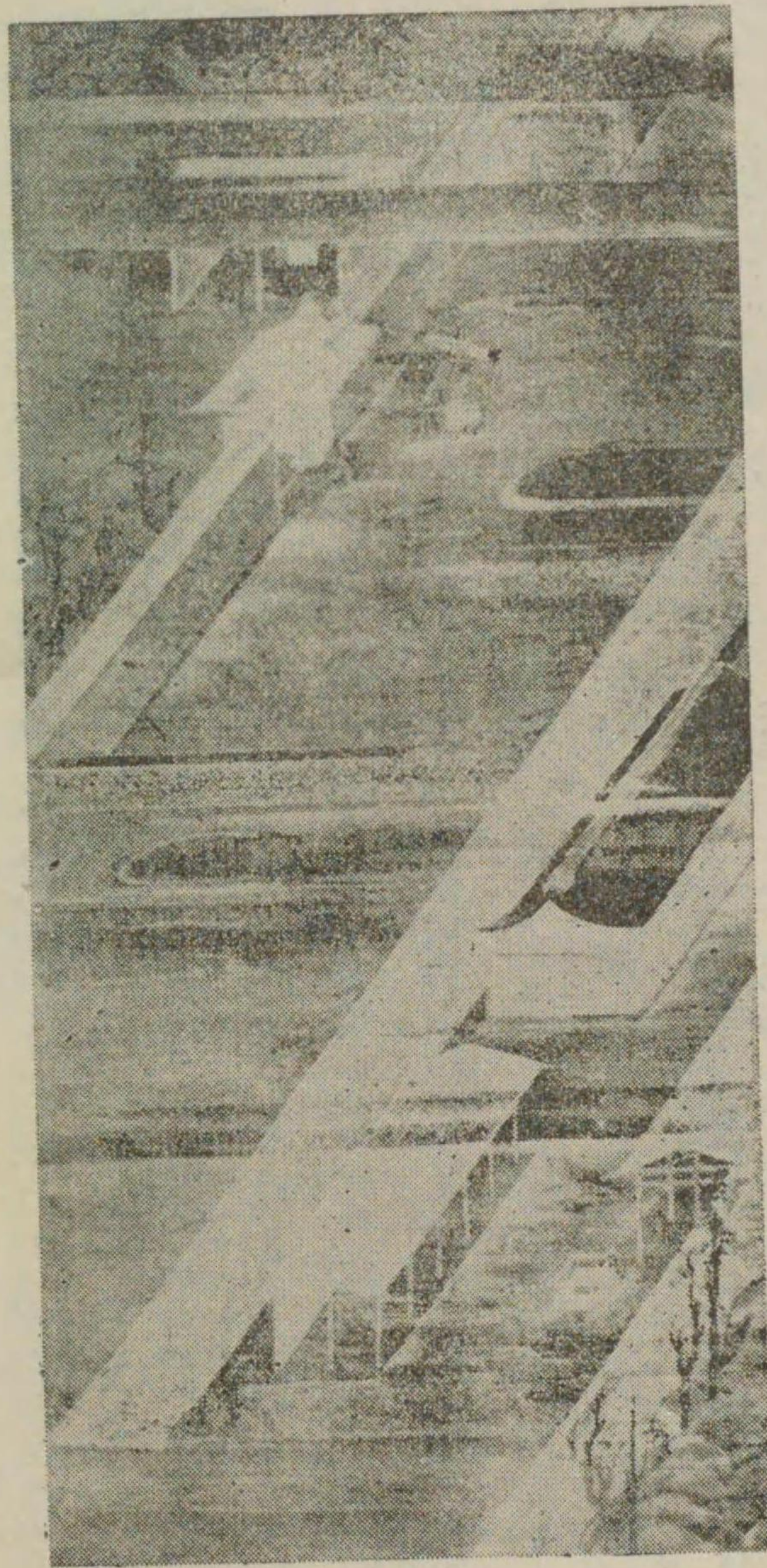
大和繪の主系である土佐派の畫で、縦描きになつてゐるものは殆ど無いといつてよい。佛畫には無論縦描きのものはあるが、他はみな、横描きになつてゐる。ごく稀にある縦描きのもので、現代にまで傳へられてゐる、著名の大物といふのが、根津家にある、巨勢金岡の『那智瀧圖』安田善次郎氏秘藏の『雪中大内圖』の二幅、土佐派の研究家はこれを見たいことが、年來の念願であつた。

○ 那智の瀧は神體になつてゐる。金岡がこれを寫す時は、精進潔齋身を淨めて制作にかゝつた。その態度は、恰も佛畫を描く時のやうに、心は一つの、信仰のうへにのぞんでゐたいはれてゐる。これに反して、『雪中大内圖』は、精粹土佐派の妙をつくした畫で、心に何の隔てもなく、藝術的良心の溢るゝまゝに、渾然と描き出してゐる。——筆者は經隆、一代の畫匠である。



經隆作雪中大内圖

藤原經隆は、承安年間の人、父祖の業をうけて畫事に詳しく、從五位下、土佐權守に任ぜられたので、土佐派の名が起つたともいはれた位の男、畫家としての地位も、ほゞこれで窺ふことが



雪中大内圖

出来る。

この『雪中大内圖』の大きさは、竪三尺七寸三分、横一尺二分七厘で絹本極彩色、絢爛華美のうちにも、一脉閑雅の趣き、全幅に流れてゐる。そのうへに、この繪の持つ、緻密さが驚くべきもので、巨匠の筆跡に潜む大きな力、それが描かれてゐる雪のうちに、遺憾なく現はれてゐる。經隆が持つ畫想のすべてが、あらゆる細心な用意をして、寫生風に、この一幅に臨んでゐるのはかれの印して來た畫道への足痕、——その大きさを、はつきりと知らしめてゐる。

○ 經隆は、新人の聞えあり、やゝもすると、當時の畫壇から、眉をひそめらるゝぐらゐの、大膽と霸氣を、つねに畫の上へ現はして來た。それが『雪中大内圖』のうへに偉大の姿を現はし、雪の厚薄を、影の深淺によつて感じさせてゐるのも、當時としては、驚嘆すべき行き方である。また屋根の雪などは、極めてこまかな板目を描き、その上に胡粉を布いたことも、大膽きはまる試みであつた。——その頃、この場合の雪を描くには、たゞ、厚く胡粉さへ塗れば好い時代であつた。雪を頂いた樹々、釣瓶の繩なぞにも、見遁せぬ親切な描きかたがある。

○ 土佐派のもので、山水畫が屏風になつてゐるものは、京都東寺のもの、神護寺のものなどある

日本名寶物語



佐理卿消息

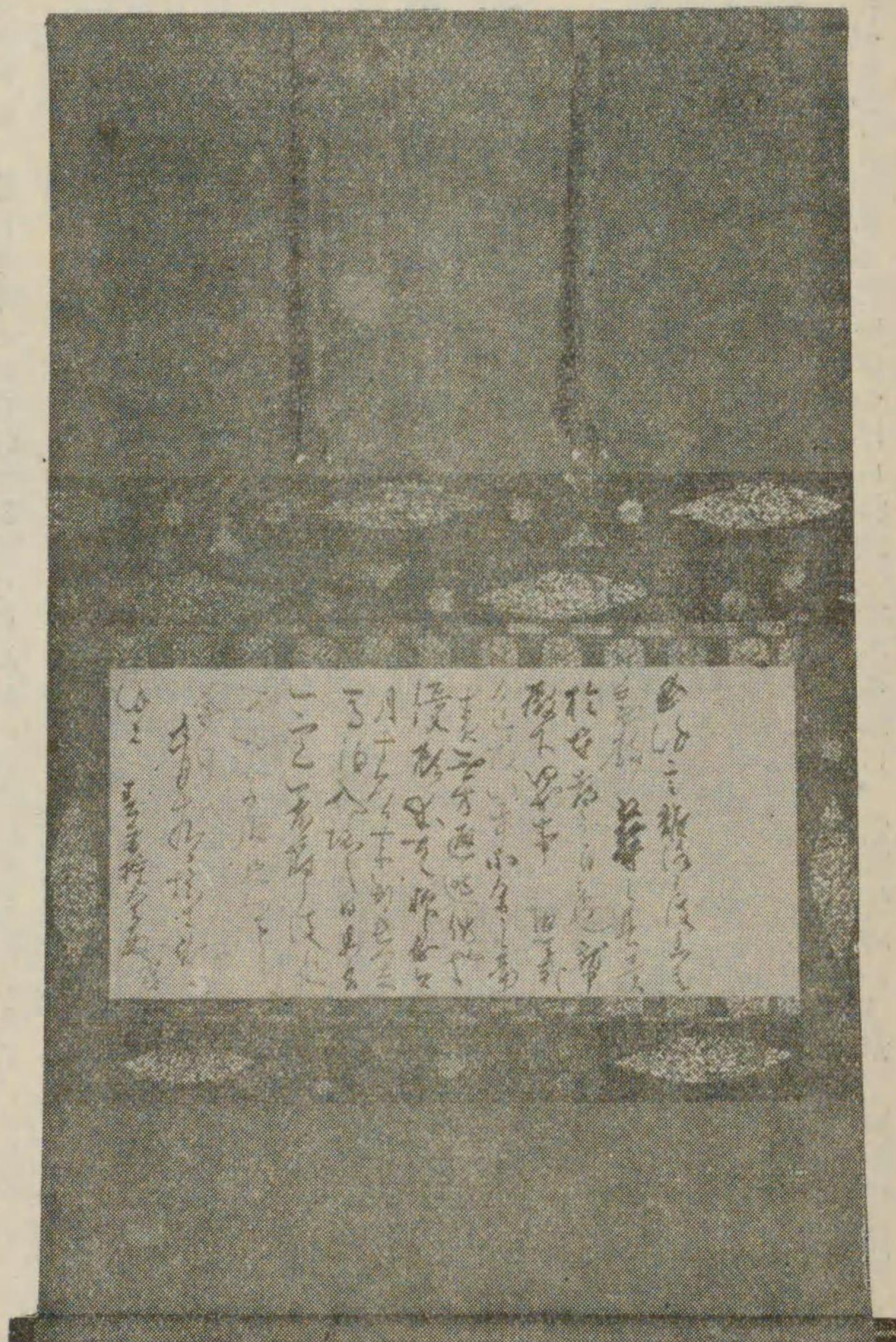
が、これは筆者不明、経隆の「雪中大内圖」も、さういふ屏風の一枚であるまいかといはれてゐる。さらにこの圖は、雪降りしきるうちに、傘をさしかけてゐる殿上人なぞ出てゐるので、清涼殿の描かれてゐる一枚と、對になつてゐたものに相違ないといふ議論もある。

佐理卿消息

……伯爵 松平直亮氏藏……

天徳年間に、累官して参議となつた藤原佐理は、正暦年間、選ばれて太宰大貳となり、筑紫に赴任した。長門赤間關につくと、佐理はすぐに、京にゐる親友春宮権太夫に、手紙を出した。それには、四月十六日以来、長門赤間關に泊つた、間もなく着府するから委細ゆるゆる御通知するといふ、意味が認められてあつた。五月十九日に出した手紙で、名は旅士として、書印がある。——旅士といふのは、無論、旅の空にゐる男といふのであらう。

○ この消息は、松平直亮伯の秘藏になつてゐる。いま京都八幡在の舊家中家にも、佐理が大貳位にあつた當時の牒に書印のあるものがあるが、これも、松平家のもつと一致してゐる。これ



佐理卿筆「消息」

にも、旅士と書かれて花押があるのである。いま残つてゐる佐理のもので、自分の名を書いてあ

日本名寶物語



るのが、松平頼壽伯の、詩懷紙たゞ一つ。これとともにこの、松平伯の消息は、佐理の筆を鑑定するうへに、常に手本とせられてゐるぐらゐの、最高位のものである。

○ 當時、書家としての、藤原佐理の名は、天下にとゞろき渡つてゐた。小野道風、一藤原行成ともに、本朝三蹟といはれた程であつたので、いかに書をよくしたかも想像出来る。當時の、文壇、歌壇の大立物であつた重之は、自分の著書重之集の最初にも、佐理の手書きであることを、しきりに褒めたたへてゐる。そればかりでなく、重之は、佐理が太宰府に行つてゐる時、自分の作歌中より選んで數十首を送り、書の手本にするため、これを書いて貰ひ、名譽にして保存したくらのであつた。

○ また藤原道長の日記のうちにも、佐理が書を能くしたことが書かれてゐる。それによると、宮中でお飾り付けのいろ／＼なもの、標題を、佐理に命じて書かせられてゐるが、これの標題に、佐理はみな、筆者としての署名をしてゐる。やはりこれを書いた、小野道風、紀貫之などと肩をならべて、この仕事をいひつけられたのであるから、當時佐理の筆が、いかに重要せられたかも

知ることが出来る。

○ それから驚かされるのは、この佐理消息にせられてゐる、表装である。これには、宋元時代の思ひ切つてよい、印金を使つてゐるのは全く驚嘆に價する。この表装だけでも、時價何万圓といはれてゐる。しかも華美にかたよらず、地の色は、強い藍に似てゐるので、極めてしつとりと、落付いてゐる。この輪廓にはめこまれてゐるので、佐理の立派な筆のあとが、ます／＼冴えて來る。

### 稻葉郷刀 (口繪参照)

……子爵 松平春康氏藏……

『郷と妖怪は、見たことがない』むかし、こんないひ觸らしがあつたぐらゐ。——郷といふのは越中松倉の刀匠、元應年間に鳴りとどろいた、郷義弘のことである。古へより傳はつてゐる、義弘の鍛へた刀といふのは、殆ど稀だといつてよい。寛文の名鑑定家、本阿彌光山は『天下二つの郷といふのは、一は稻葉、一は富田』と、いつてゐる。富田郷は前田侯のもの、これと共に義弘



稻葉郷刀

名作中の双絶と謳はるゝ稻葉郷は、松平康春子第一の重寶。

○ 稻葉郷刀は、二尺三寸四分二厘無銘象眼銘、表に所持稻葉勘右衛門尉、裏に天正十三年十二月日、江本阿彌磨上之と刻まれ、花押もある。鍛へた時代は元應年間といふから、六百十餘年前、義弘は、正宗の高弟であつた。

○ 銘にまで刻みこんだ、この義弘の銘刀を持つてゐた、稻葉勘右衛門重通は、戦國の武將、かれが、鍾愛措かなかつたのは、この刀であつた。重通は、入道一鐵の子で、春日局の養父、初めは織田信長に仕へてゐたが、父の死後は、美濃國清水城主として封ぜられ、一万二千石を領してゐた。——のち重通は、豊臣秀吉に近侍して兵庫頭と稱した男である。

○ 徳川家康は、質素な男であつたが、武士の魂と稱さるゝ、刀の鑑定にかけては、一廉の目利きであつたので、よい刀を見ると、無闇に欲しがつた。文祿年中、家康は重通からこの刀のこゝとを聞くと、矢も楯も溜らなくなつて、すぐに交渉を開始した。重通も手放すのは惜しかつたが有数の勢力家であつた家康に強要されて見ると、かなり重苦しい壓迫をうけて、つひにその通りになつた。——家康は重通に五百貫を贈つた。

○ 慶長五年七月、家康は、上杉景勝を討伐するために、野州小山に兵をすゝめた時、西國に兵の起つたことを聞いた。家康は、次男の秀康を呼んで對策を講じた末、家康は軍を西にまはして、秀康を景勝に備へさせることになつたが、秀康はこれを怖れて、ひたすらに辭退した。しかし家康はどうしても許さなかつた。秀康は仕方なく覺悟をきめ『責任を負うて、景勝を白河關より出さないから、安心して西を征伐してくれ』といつたので、家康はやつと安心をし、鎧一領と、義弘の刀を秀康に與へて勵ました。——爾來この義弘は、秀康の裔、津山松平家の秘寶となつて代々相傳へて來た。

○ この稻葉郷刀は、地肌が頗る玲瓏なるもの、これに、幅ひろさきのたれ心の、小亂れを焼き入り、上半は、ことに華麗を極めてゐるが、次第に大亂れになり、その餘勢、鎧にまでもかゝつて



ゐる。趣先の趣も、何ともいひ得ぬ味を含み、神韻測々、直ちに人に迫るものがある。この刀は、熟視反覆してゐると、いよいよ無限の味が芽えて來るといはれ、現存の銘刀中、有數珍奇の評、斯界にとゞろいてゐる業物である。

### 千代金丸刀

……侯爵尚 裕氏藏……

尙侯爵家に、五百年前から傳はる一振の銘刀『千代金丸』、刀身二尺三寸六分、——これが、明治四十二年の夏、手入れをした時『傳家の名刀たるのみならず、天下の至寶なり』と、當時鑑定  
の大家、今村長賀、關係之助に、かう折紙をつけられた。——この名寶のものがたり。

文字通り、天下麻の如くに亂れ群雄、土地せまきまでに四方に割據して虎視耽々、大は、大に、小は小に、ひとしく一つの骰子に、運命を賭けてころげ廻る戰國時代、搏ち合ふ浪頭のみ、いたづらに汐の香にむせぶ琉球にも、同じ鬪争に追はるゝ日が続いた。この島に割據する三人の權力者、北山王、南山王、中山王の三人は、互に三角形の頂點をもとめながら、争ひ鬪ふてゐた。

○

この島にも霖雨は續いた。かゞりをたいてまどろむ兵卒の鎧糸や楯さへも、朽つる許りに降りつゞいた。やがて琉球の山河草木にも、眼に浸みる緑色につゞられて、うるはしい夏姿を見た。——應永廿三年の夏五月、今の國頭郡を領してゐた北山王と、中頭郡に覇をとなへてゐた中山王とは、あらゆるものを力にかけて鬪争を續けたが、遂に北山軍に呪はれの日が來た。

○

北山王の攀安如は、楔子の如く食ひ入つて來た敵の前に自刃をした。この北山王の自刃に用ひた刀こそ『千代金丸』であつた。爾來六百年、奇しき物語りを秘めたまゝ寶劍は昏々眠りをつゞけてゐる。尙家の祖先、尙圓王が、この刀を手に入れてから約五百年になる。

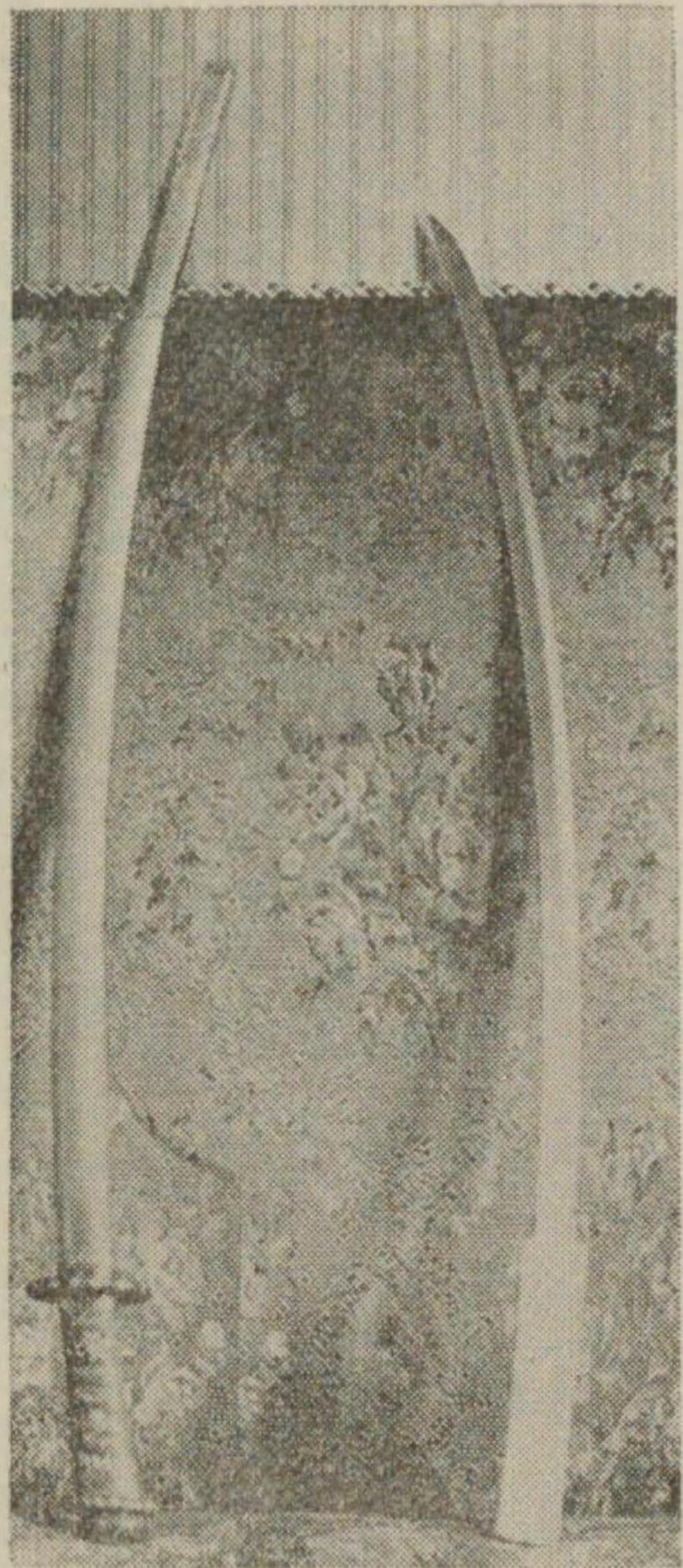
○

寶劍『千代金丸』が、王家に傳へられた事情は判明してゐない。が現在尙家にある由來書を見ると、かう記されてゐる。  
北山王攀安如、千代金丸と名付けし累代相傳の寶刀あり、應永二十三年中山と戦ひ、終に敗北



千代金丸刀

して城内二の丸に引揚げ、前代より城の守護神として尊崇する磐石の前に到り、予、今死を決す、汝、豈獨り生けると云ひ、自ら腹を切り、其反す刀をもつて磐石を十文字に斬り、其刀を重間川に投じ而して亡ぶ、其後伊平屋島の人其刀を護る、其受劍石（磐石のこと）は北山城内に今尙存す、此寶刀は何王の時代王府に入るや記録明らかならず。



北山王の寶刀

この『千代金丸』は、各所を轉々したものは思はれぬ。尙王家初代か

二代目のころは、すでにこの刀は、尙王家の所有に屬してゐたものであらう。——といふ説が有力である、『千代金丸』は、いまでは尙家の護り刀とせられてゐる。

明治二十三年、故小松宮殿下が琉球を巡視せられたことがあつた。尙家へお立ち寄り之時、こ

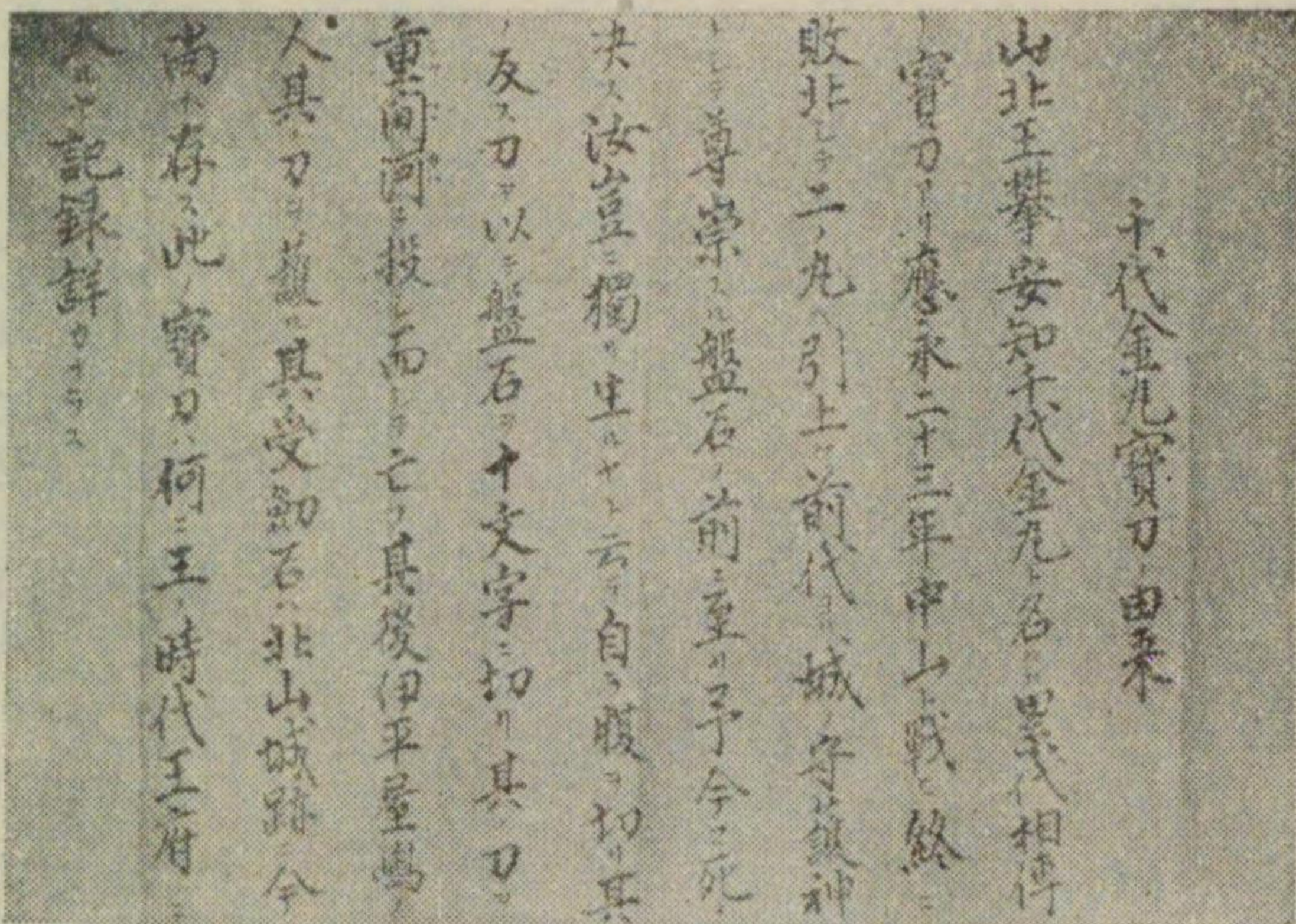
の名刀を御覽せられた。名劍にまつはる歴史と傳説、それを言上すると、殿下は『美事なる一振だ』と、刀を手にはせられながら、六百年前の戦ひの上に、はるかな想ひを通はせられた。御歸還後、刀劍の話が出るたび、『千代金丸』の話を遊ばすのを常とせられたといふ。

自分たちと關係のない戦争に追はれて、久しい間、困窮と疲勞に喘いで來た琉球の民衆は、尙王家の手に、全島が支配されるやうになつてからは、初めて、安らかな夢を結ぶことが出來た。が、それも束の間で、慶長年間、島津家では、尙王家四代尙寧のころ、このなごやかな眠りを驚かせて、琉球討伐を企てた、琉球の軍兵は、この無遠慮な闖入者は前に、一と溜りもなくひれ伏して、尙寧王は、人質として薩摩に囚はれの身となつたが、數年後、初めて歸島を許された。

尙寧王は、王城には入らなかつた。別にさゝやかな隱宅を設けて、快々たる日を過ごした。總てを島津勢に奪はれたうちに、寶劍『千代金丸』ばかり無事であつたことは、今でも尙家に、奇蹟だといつてゐる。徳川二代秀忠の時、日本と合併して、琉球王となつた尙王家が、東京に居を構へてから、この『千代金丸』は、明治四十二年まで、一度も手を入れたことがなかつた。



千代金丸寶刀由来



千代金丸刀由来記

山北王攀安知千代金丸名、累代相傳、寶刀、應永二十三年申山、戰、敗北、二丸引上、前代、城守、尊宗、盤石、前至、予、今、死、夫、汝、宜、獨、生、云、自、腹、切、其、及、刀、以、盤、石、十、文字、切、其、口、重、河、投、而、亡、其、後、伊、平、屋、島、人、其、刀、藏、其、受、知、北、山、城、跡、今、尚、存、此、寶、刀、柯、王、時、代、王、時、代、記、録、詳、り、す。

頭菊紋の毛彫は、想ふに琉球特有の作ならん、京都の作とは思はれず、刻する所の大世の

二字、尙泰久王世代所鑄大世通寶の銘文二と字格頗る相似たり、蓋し大世は、同王神號大世主にとるか、鐔猪の目の金の中覆輪最珍也、鞘の熨斗付金に、織目あるは帯取の迹なり、刀身の地金細かにして、焼刃亦同斷、要之、傳家の寶刀たるのみに非ず、以て天下の至寶とすべし。

刀身が二尺三寸六分、刃紋亂れ刃で、裏と表に、五本の腰樋がある。中心が三寸六分七厘で重さが九十六匁、目貫は金唐花で、目釘まで金無垢である。柄頭は頭槌形で菊紋毛彫、こゝに、折紙で不思議がられてゐる、問題の『大世』、この二字が彫まれてゐる。

刀劍の愛好家は、『千代金丸』の存在に、久しい間、最大級のほめ言葉を用ひて、限りなき羨望をさゝげて來た。専門家は手を竭して、再三再四、辭を低くして尙家に乞うたが『千代金丸』はたゞの一度、これ等の眼にふれようとはしなかつた。

前後一度、その手入れの時、立會つた人々は、先代の尙侯爵夫妻と、家令家職のものゝほかは、前に書いた鑑定者二人、研師の井上行造、杉本次郎、鞘師小堀正治とその門人一名であつた



# 小野通女筆家康像

……増上寺藏……

徳川三百年の基礎を築いた駿府公家康は、非常な佛教信者であつたので、現在でも、家康の肖像畫を神君として祀り、その徳行をあがめてゐる寺院が尠くない。一面、家康も乞はるゝまゝに、肖像を描くことを、喜んで許したものであつた。

○ 貴族院議長の徳川家達公は十六代の當主、千駄ヶ谷の本邸には、先祖家康の肖像畫を祀つた神殿があり、公爵は、毎朝そこに禮拜してゐる。菩提寺である、増上寺境内の徳川家代々の靈廟にも、黒本尊の彫刻と共に、肖像畫が祀られてゐる。が、數多い家康の肖像畫の中でたつた一つ、家康自身彩管を執つて、加筆したも同様の一幅がある。——おそらく、全國中の唯一品と稱される名實、しかも、駿府公のエピソードが、この一幅中に、多分に含まれてゐるから面白い。

○ 慶長十八年、駿府公が七十二歳の時だつた。二代將軍秀忠は、父君の肖像——それも、後世に残すところの唯一幅としての『生けるが如き像』を念じて、これを、誰かに描かせることになつた。が、それには、常に駿府公の側近に侍する身で、畫をよくする者でなければと、いろ／＼と苦心をした結果、小野通女に、これを命じた。通女は、公の最もお氣に入りとして、始終お側に仕へてゐた身であつたところから、その光榮に感激しがなら、公の機嫌のいゝ日を選んで、筆をとつた。

『何時までかゝつてもよい、立派に描けよ』  
秀忠公はかうした言葉で、通女を勵ました。一念凝つた通女の一線一彩は、秀忠の喜ぶ顔と共に完成の域へ進んだ。

○ 『うむむ、立派立派、通女、これは生きた父君を見るやうだ、天晴れな出来栄えぢや』  
と、秀忠は大變な機嫌、通女も大いに面目を施した。——で、ある日、秀忠は父の前に、これを持參して見せた。家康は、ニコ／＼として暫らく見てゐたが、やがて、近侍に鏡を持參させた。そして肖像を見ては、鏡とくらべる。光榮の通女が、お側に居たことは勿論である。



光琳作紅白梅の屏風

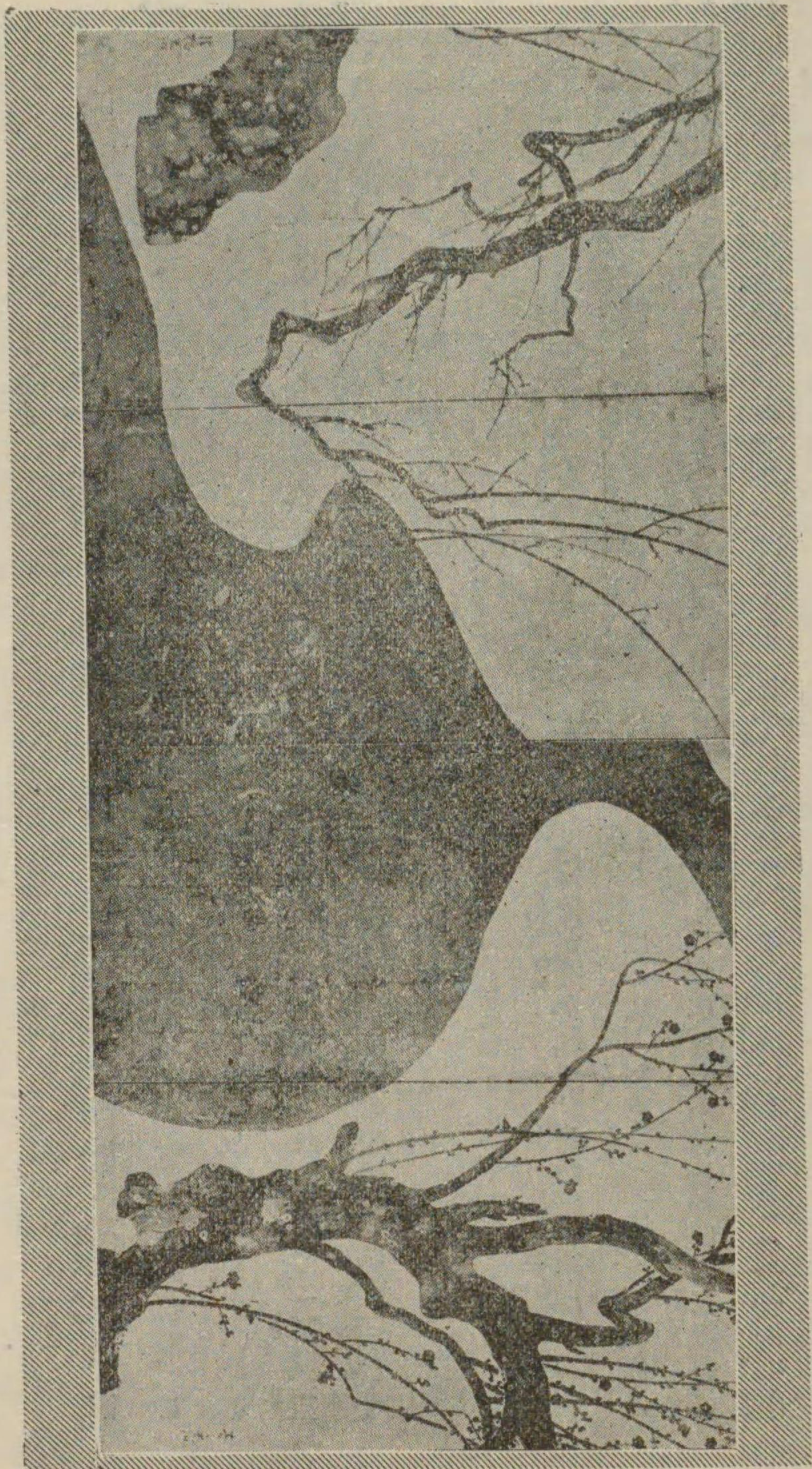
「通女、こゝはかうしたらどうだ、額を少しなほしたら……」  
などの指圖に、通女も家康の眼前で、いはれるとほりに修正した。云はゞ、家康自ら加筆したのも同様で、天下唯一幅といはれるのも道理である。

この畫はその後、秀忠が秘藏してゐたが、乳母に贈り、さらに後、増上寺の觀智國師に贈られた。讚の『和光同塵香結縁始也八相成道者利物之終利』は、同師の筆で、現在は芝西久保の大養寺に所藏されてある。

光琳筆紅白梅屏風

……伯爵 津輕義孝氏藏……

いまから二昔ほど前、津輕家の先代英麿氏が、古くから傳へられてきたいろ／＼の書畫や道具を、日本美術學校の紀淑雄氏と、帝室博物館にゐた故山名義海氏とに頼んで、手入れをしてもらつたことがあつた。二人は津輕家の寶物庫にはいつて、最高峰のみを渡る日本藝術の香をなつか



「風屏梅白紅」 筆 光



そこには、いま天下に無二の逸寶をもつて許されてゐる、尾形光琳の紅白梅の二曲一双と、四季の草花の畫卷が、鼠にかぢりかけられてゐるのであつた。二人はすぐにほかの手を休めて、この屏風と畫卷の手入れに全力をつくした。——この紅白梅の二曲一双と草花の一卷、今にいたるも、依然として光りを包んだまゝ、こゝに納められてゐる。その後、世にふれたことが二度か三度であつたが、早くも、噴々たる名、大光琳の群作中にぬきん出て、屈指の折紙を、専門家のすべてによつてつけられた。

○ 日露大戦後の明治四十二年、英京ロンドンで、日英大博覽會が開かれた。その時この屏風一双が、光琳の代表作に選ばれ、東洋藝術の精髓をほこりながら、はるく海を渡つた。この大作の持つ味と匂ひが、屏風の前に立つ人々の胸にふれ合ふと、響くやうに發せられるのは、最上級の形容詞を用ひた讚嘆の聲のみであつた。——英國人のみならず、この屏風に潜んでゐる一つの奇蹟を、探り當てたやうにほめたゝへた。

○ この博覽會には、皇室の御名代として、御滯英中の故伏見宮殿下が参列せられ、美術品のこと扱ふために、正木東京美術學校長、溝口帝室博物館美術課長などが當時渡英した。屏風は堅が五尺一寸六分、巾が五尺六寸八分、思ひ切つた大膽な筆で、紅白一對の梅を描いてゐる。これに、銀箔押模様の流水をあしらつた技巧と表現——それは光琳の持つすべての藝術を現し盡したものだといつてよい。

○ 苔蒸した梅の老幹から、のび切つた枝の末端、さては花瓣にいたるまでも、光琳獨特の筆致があくまで小氣味よくのびてゐる。その自由な繪筆のあと、着色の妙、この屏風に對してゐるとおぼろげに眼ぶた裏に現はれて來るのは、光琳その人の姿である。うたれてある落款が、一曲には『青々光琳』一曲には『法橋光琳』その文字にも、いひ知れぬなだらかな形が流れてゐる。

○ この屏風は二曲一双、今まで、一曲づゝ離れて出展せられたことはあつたが、一双となつて出たことはなかつた。この屏風が一双として並べられると、初めて水の流れに動きが出て、光琳の眞のうまさ躍動して來る。

光琳作紅白梅の屏風



○ 紀淑雄氏の話

「此屏風を鑑賞する人たちには、見てゐるうちに、この繪を通して、必ず光琳の姿が浮かんで来るやうな氣持ちになる。その自由奔放の筆の蹟から、行き迫つた境地がひらけて來るのを感じられる。これが現代に與へてくれる光琳の大きな教訓といつてよい。」

光琳筆四季草花卷

……伯爵 津輕義孝氏藏……

光琳四季草花の畫卷——これは屏風にあるやうな裝飾風の繪とは、全く趣を變へて、自然描寫の極致をつくしたものの、四季野生の草花を、自然のままの姿にもとめて、何の屈托もなく、無雜作にすらくと描いてゐる。しかもこの畫卷のうちに溢れ漂ふ筆の跡には、底知れぬうまさ、巧さが、深々と流れこんでゐる。

○ この種のもを描いてゐる光琳ものうちで、現存せられてゐるのは、津輕家の畫卷たゞ一つ  
屏風に描かれた紅白梅の自由、雄勁、強靱の趣とは違ひ、草花の行き方に眼を移すと、感覺俄に變つて、いま緑にそめなされた春草を踏むやうな、柔かな情感にひたされる。この筆法が光琳の繪のうへに、すべてを築かれた、基礎的手法だといはれてゐる。

○ 自由も、言論も、思想も、すべてに嚴冬時代であつた封建政治の下——徳川中期の將軍によつて加へられたこの重壓と戰つて、當時の畫家は、僅かばかりの自由の天地——それを、たゞ一枚の紙の上にもとめた。この許された範圍の自由の獲得に、みな思ふ存分の腕を振つたのは無論のことである。自由の勝利者——天才畫家は、かなり輩出した。光琳もまた、勝鬨をあげた勝者の一人であつた。かれの自由暢達、思ふまゝにのびた繪を、この時代の空氣に濾過させて見ると、いひ知れぬ感興にそゝられる。

○ 光琳はまた、時繪にも一家の風を持つてゐた。貝錫をはめこんで、大まかなものをつくつて行く非凡な腕は、一作を加ふるごとに世を驚かせた。津輕家にも、これ等逸品の一つが所藏せられてゐる。この高雅な氣韻に抱まれた品を、津輕家累代の當主は、手近く愛用して來た。

光琳作四季草花



いつか益田孝男が、津輕家で、紅白梅の屏風を見た。その伸び切つた繪に感嘆して來たが、數日間工風をつゞけて來た末に、ある畫家を呼んで、津輕家のものと、毛筋も違はぬものをつくらせて、いまでも朝夕居室に飾つて眺めてゐる。紅白梅の屏風は、そのくらゐに、この世界の至寶とせられてゐる。

光琳の親宗謙は、京都東福門院御所に御用を勤めてゐた吳服屋であつた。光琳ははじめ染物屋を営んでゐたが、畫家を志してから江戸に上つた。初め狩野常信に學び、のち野村宗達の風を慕つて研究し、これに古土佐の風趣をとり入れてつひに大成した。その名は一時天下を風靡し、光琳派の名はあまねく喧傳せられた。のち法橋の位に叙せられたが、享保元年六月二日、齡六十二、京都で死んだ。

元曆萬葉集 (口繪參照)

……男爵 古河虎之助氏藏……

日本にある三大萬葉。——帝室御物の桂萬葉、原富太郎氏の藍紙萬葉とともに、天下至寶の名を恣にしてゐるのが、古河虎之助男の元曆萬葉集。十四冊を通じて千五百六十四枚、時價百七十萬圓を稱されてゐるが、萬葉學上最も價値の多い古筆として、第一に尊ばれてゐるのが、この元曆萬葉集。

元曆萬葉集といふ名、——卷の二十の終りに、右近衛權少將が、元曆元年六月九日、校合したといふ奥書があるので、かう名付けられたものではあるが、その年に書かれたものでなく、七八十年前——鳥羽帝の、元永前後に書かれたものといはれてゐる。それは西本願寺の『三十六人集』のうちの、家持集、能宣集の筆と、この元曆萬葉の、第十九卷の筆者が同じなものと、三井男の元永本『古今集』と『三十六人集』とが、料紙の文様が同じなので、元永年間の書寫と推定せられたものである。

この萬葉集は、宇治關白賴通が平等院を建てた前後に夫々能書家が書いたものらしいが、いま傳はつてゐる萬葉の中でも、これらが最も古い。それ等はいづれも、二十冊中、ばら／＼になつて



わて、この元暦萬葉集の如く、十四冊あることは、驚歎すべき事實で、萬葉を調べるうへに、こよなき慶事といはれてゐる。

○ 『元暦萬葉集』、これはもと、どこにあつたものか判らなかつた。が最近萬葉學史のうへに、驚くべき一事實が発見せられた。それは、伊勢松坂の富豪で、三井家と縁組をしてゐる、中川常宇の持ち物であつたといふことなのである。

○ 常宇は風流な男で、京の公卿歌人、清水谷權大納言實業に、歌道を學んでゐた。その關係からこの萬葉集を、或は、京の公卿から求めたものではあるまいかといはれてゐる。一説には、伊勢の國士、北畠家から出たものだともいはれてゐるが、兎も角、こゝまで判つたことは、欣ばしいことである。——常宇はこの萬葉集を、歌の師匠、實業を通じて、靈元上皇にお眼にかけたことがあつた。上皇は、文藝を好まれた方なので、頗る感歎せられ、上代日本、稀有の筆蹟だと、褒めちぎられた。

○ 常宇の、命にもと大切にしてゐたこの『元暦萬葉集』も、ある事情から、常宇の縁者、やはり伊勢射和の、富山氏の手へ歸した。富山家は、櫛田川のほとりに、八棟の家を建て、豪奢をほこつた家であつたので、當時の民謡にも『伊勢射和の富山さんは、四方白壁八棟づくり、前には大河船がつく』とさへうたはれた家柄であつた。

○ この頃から、『元暦萬葉集』の存在が、天下にやうやく轟いて來た。萬葉の研究家であつた、伊勢の神官荒木田久老は、數名をつれて富山家へ出かけ、この本で照し合はせた。當時江戸に儒者と謳はれた加茂眞淵も、松坂にゐた本居宣長に書を送り、『貴兄もお手傳ひ候ひて、何卒早く下り候やうにと、待入候』とせき立て、來たので、宣長も、校合した本を持つて江戸に下つた。そのため加藤千蔭の『萬葉集略解』の校本のともになつた。萬葉集の持ち主、富山家も没落したので、さらに、攝津神戸の廻船問屋、俵屋の手に歸した。研究家の荒木田久老は、こゝまで出かけて行つて、二度目の校合をしたと、傳へられてゐる。



四年間絃歌を學んで、物にならず、鍼法を四年いそしんで、口を糊するに足らず、書を學んで初めて大成した江戸の儒者、塙保巳一は、和學講談所を開いてゐたので『元曆萬葉集』を模刻したいと、はる／＼依屋に申入れた。依屋では、手もなく斷つたので、さらに、慶徳、石室をはじめ、數名の者を神戸につかはして、全部模寫させた。それを當時の老中、白河樂翁が借受けて、さらに寫したこともあつた。

○ 依屋にも没落の日は來た。家政整理をするうへに、第一に手放さなさねばならなかつたのは、この萬葉集であつた。これに金千兩の値を付して、江戸へ賣物に出した。和學講談所で、出版部の仕事をしてゐた、天保年間の學者の屋代弘賢は、この話を聞いて、飛び立つやうな思ひであつたが、金千兩に驚いて、手をひっこめた。弘賢は、どうしても諦められず、桑名の松平家にすゝめて、つひにこれを買はせた。

○ 老中水野忠邦は、儉約令までも出した消極政治家であつたが、文藻すこぶる豊かな男で、本居宣長の門人、村田春野に歌を學んで、一廉の歌人を氣取つてゐた。文藝愛好者の忠邦には『元曆萬

葉集』を手に入れた、桑名の松平家が、美しくてならなかつた。二度目の借用を申込んだとき、松平和之進は、幼年にも係はらず、家督相續がうまく行つたこと、將軍が日光參社の留守に、江戸の火防奉行を仰せつけられた二つのことが、全然忠邦の好意から出たことであつたので、感激してゐた和之進は、これに酬いるため『元曆萬葉集』を忠邦に贈つた。——一説には、忠邦は借りたまゝ返さなかつたといはれてゐるが、この誤りは、書物に添へられた、使者の口上書によつて明かである。

○ 萬葉學者の泰斗、木村正辭博士が、人を通じて水野家へ『元曆萬葉集』を見せてくれと申込んだが、水野家に見當らなかつた。帝室で、水野家から、書書類をお買上になつたときも、いろいろ調べたが、その姿は發見せられなかつた。故大口鯛二氏や、佐佐木信綱博士も、同様に申込んだが、遂に見當らなかつたので、かつて三田邸宅が類焼したとき、焼けたものだらうといはれて來た。

○ 明治四十三年五月十二日に、佐々木博士は、さらに舊臣に乞ふて土藏の精査を乞ふた。だんだ



ん調べて行くうち、土藏の一隅から、花瓶だといはれて来たものゝ、函の蓋を開いて見ると、これが、探しぬいた『元暦萬葉集』であつた。——故大口鯛二氏が、西本願寺の『三十六人家仙歌集』を、大谷家の土藏から発見したこととともに、明治古筆界の二大発見だといはれてゐる。

『元暦萬葉集』発見當時、花瓶だといはれてゐたこの桐の古函には、文字がなかつたために、判らなかつたのであるが、中には、一枚の紛失もなく、蟲の荒した痕もなかつた。明治四十四年、古河家の顧問、故井上馨侯が仲に入り、古河家が譲りうけたものであるが、明治四十五年七月十日東大に先帝行幸のみぎり、これを天覽に供した。

### 行長筆鎌足公像

……牧田環氏藏……

死んだ博物鑑定の大作家山名義海氏が、生前、口癖のやうにほめ讃へてゐた一幅の名畫がある。氏推賞してゐたものであるから、無論、天下の奇寶たることは疑ひのない話——山名氏は、めつ

たに物をほめぬ人、山名氏もまた、それを自慢の一つにしてゐたのである。

それはいま、牧田環氏の秘藏になつてゐる『鎌足公定慧和尚不比等』の一幅である。絹本着色畫幅のうちに沈む鋭き光り——名玉、絹に包まれてゐる形である。蒼然たる古色に潤ひながら、千古碧潭の底を行く一筋の奔流、山名氏をして、土佐派に知られた巨匠土佐行長が、血を注いだ作品と鑑定せしめたのも、洵に無理からぬ話。

恐らくこれは、土佐行長存命中において、たゞ一幅だらうといはれてゐる。山名氏の鑑定で『その畫風を考ふるに、土佐行長筆と認めらるゝものにして、筆格端嚴、鎌足公の像中、ことに優秀のものなり』と、折紙をつけられてゐる。これはもと、宇野四郎といふ人の所藏であつたが、山名氏からこの話を聞いた牧田氏は、理が非でもといふ所望から、つひに宇野氏を口説き落して、やうやく手に入れたものであつた。

山名義海氏の父義貫氏は、土佐派の畫家として知られた人であるが、牧田氏は、この『鎌足公行長作鎌足公像』



定慧和尚不比等』の一幅を手に入れると、固く函をとさし、諸所の展覽會からの雨のやうな懇請をしりぞけて、ひたすら、門外不出を誇つてゐる。——牧田氏は『この肖像については、行長の苦心や、それに絡はるエピソードなどもあるに違ひないが、その記録はない』といつてゐる。



「像公足鎌」筆長行佐土

この筆者と鑑定せられた土佐行長は、承元年間、土佐家の支族に生まれ、俗稱を『春日』と改めた藤原隆親の三男で左近衛監に任ぜられた。畫は父隆親に學び、

兄光長慶恩の長所を巧に取り入れた。行長には、得意の畫に『縁起草子』がある。荏柄天神縁起、依藤太草子、能惠法師草子、物語繪物などの遺作があり、土佐行長のみに見られる獨特な匂ひと味に、後世を驚嘆せしめてゐる。

### 華山筆黃梁一炊圖

……原邦造氏藏……

渡邊華山は、水のやうに澄み切つた心のうちへ、この日の如くに、自分の姿をはつきりと映したことは、嘗ての経験では、覺えのないことであつた。『人生の清算』をすませ、死を凝視する靜かな心になると、かれは初めて、ほく笑むことが出来た。——天保十一年十月九日、この日の朝の空も、限りなき紺碧が、冴えくと流れてゐた。——

華山は、寛政五年、江戸築地でうきれた。幼ない時から繪を好んだかれは、師を陵谷や文晁にもとめた。家が貧しかつたので、畫を描くに叶ふ紙を買ふことが出来なかつたので、毎日、廿文ぐらゐの紙をもとめては、繪筆にいそしんだが、つひに諸派を折衷し、古法に則つた一家を編んだ。——椿椿山、福田半香、井上竹逸などは、みな華山の弟子であつた。

華山作黃梁一炊圖

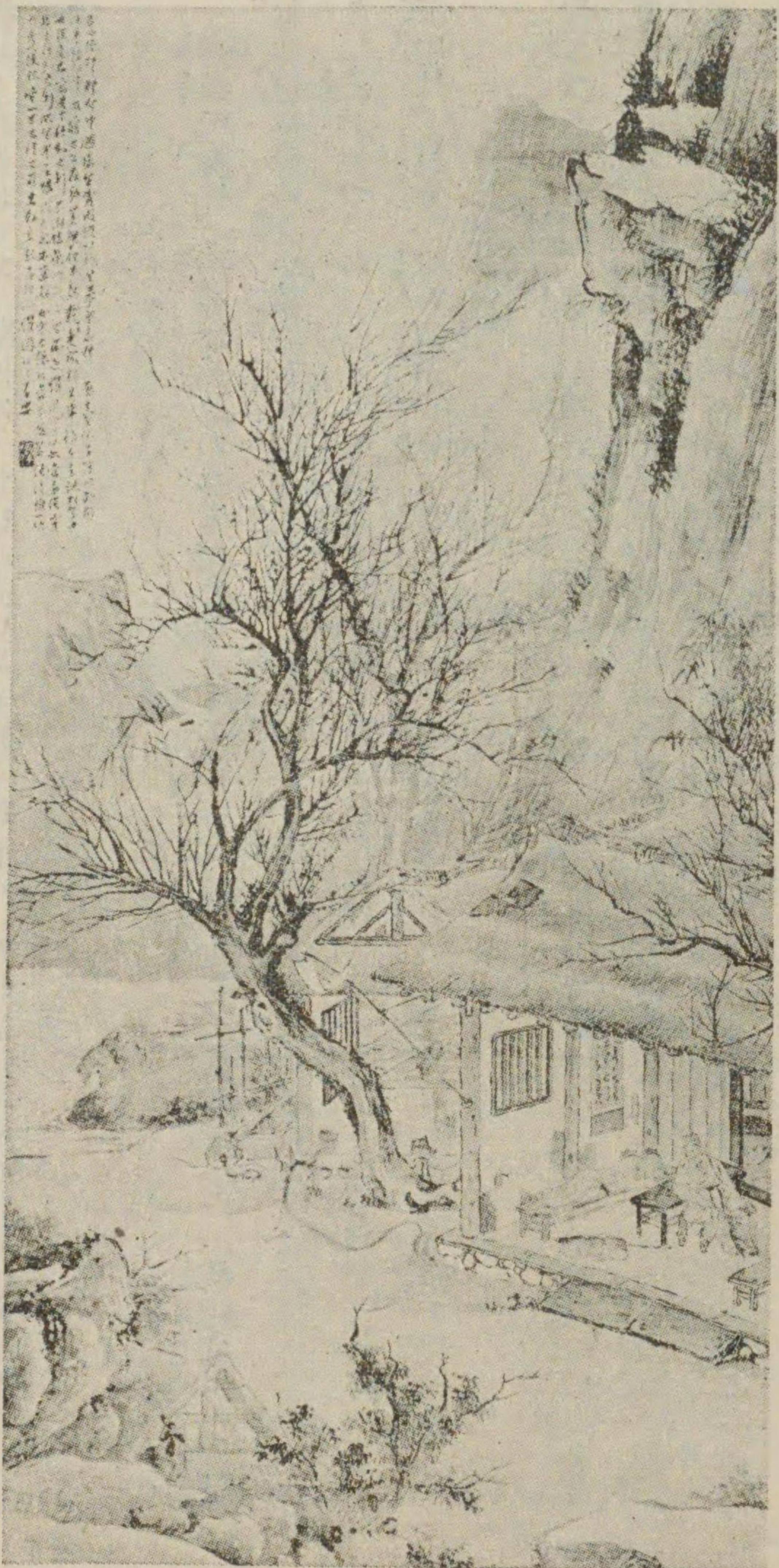


○ 徳川文明は、いよ／＼爛熟の高潮に達して、人みな泰平にさんざめいたが、その底には、暗い奔流が、恐ろしい力で流れ始めた。勤王の志士は、革命の先驅者として四方に湧いた。物情やうやく騒然として来た世に、華山の繪筆は、一家を糊するには、あまりに収入が不足であつた。かれは、飄然として悟る所があり、佐藤一齋に師事し、火のやうな情熱を、革命運動のうちへ溶けこませた。

○ 水野忠邦は、この氣流に、極度の怖れを抱き、これ等の志士を一網にうち盡し、幕府の勢威を天下に示した。華山もまた、危く斬首せられんとしたが、天保七八年に亘つた大饑饉の時、畫を賣つて義金を頒つたことがあつたので、死を減ぜられ、天保十年常陸國に幽閉せられた、かれの藩主三河田原藩主三宅侯は、そのために、幕府から譴責せられた。華山は、累を藩主に及ぼした事に、深い責任を感じて、自刃を覚悟したのである。

○ 華山は、驚くほど靜かな心で、繪筆を取つた。そしてその畫は、何等社會的に、交渉のな

渡邊華山筆 「黄梁一炊圖」



黄梁一炊圖の意は、人生の夢の如き事なり。華山は、此の畫を、自らの志士としての覚悟を、含蓄して描いた。黄梁一炊の故事は、古語に「黄梁一炊、南柯一夢」といふ。華山は、この故事を、自らの志士としての覚悟を、含蓄して描いた。



いものであつたので、かれはもう一度ほゝゑんだ。なぜなら、それは死に行く身が遣す、最後の藝術品であるからだ。華山は、匂ひの高い墨を磨り流すと、かれはかれの心を痛はるやうにして静かに縁先きへ出た。

○ 初冬の陽は、斜めにかれのからだを抱きすくめ、快い温度を一杯に興へた。華山はふと、垣根の傍にある赤い椿の花に眼を投げた。空を縫ふ小禽の羽影がこの花の上をよぎると、赤い大きな花が一つ、がつくりと地に落ちた。薄く敷かれた霜は、その形なりに溶けて行つた。——華山は、自分の瞼の裏が、急に暖かくなるのを感じた。急いで部屋に入るなり紙を展べた。

○ 自双する二日前、華山が描いたこの畫は、『黄梁一炊の圖』であつた。山谷の荒家に假眠を貪る蘆生が、天下を掌握した夢を見た。蘆生はその夢に陶醉してゐたが、醒むれば一場の夢、依然荒家に眠る己れであつた。百年の歡樂、王位の榮華、みな一炊の夢枕であつた。華山は最後までこの『蘆生邯鄲夢裡の圖』に托して、佐幕攘夷の徒の、夢を打破らうとしたものである。

この畫を見ると、死に直面した華山が、生の最後の所産を、いかに謙恭な態度でつくり上げたかゞわかる。暢達した筆力はあくまでのびくとして、一點一抹、心の動きが少しも見出だせぬ。この一幅に盛られた氣魄こそ、志士および藝術家としての渡邊華山の全人格であつた。渡邊華山が自双したのは、天保十一年十月十一日、享年四十九明治二十四年十二月、正四位を贈られた。

### 住吉物語殘缺

……伯爵 大村純英氏藏……

『住吉物語殘缺』がある。『住吉物語』を繪にしたものゝ一片、十八人の男女を乗せた樓船が、瀬戸の海を、右進みに迂つてゐる圖である。筆者は土佐派の支流、長隆が精魂を注いだものといはれてゐるから、時代は鎌倉後期のもの。紙本着色の美しさのうちに、しかも一片の霸氣、畫中に横溢してゐる。豎一尺四分五厘、横二尺九分——いま。

○ この『舟行の圖』——美麗なる小波立つといはれてゐる、瀬戸内海の内懷に、ふかくと抱

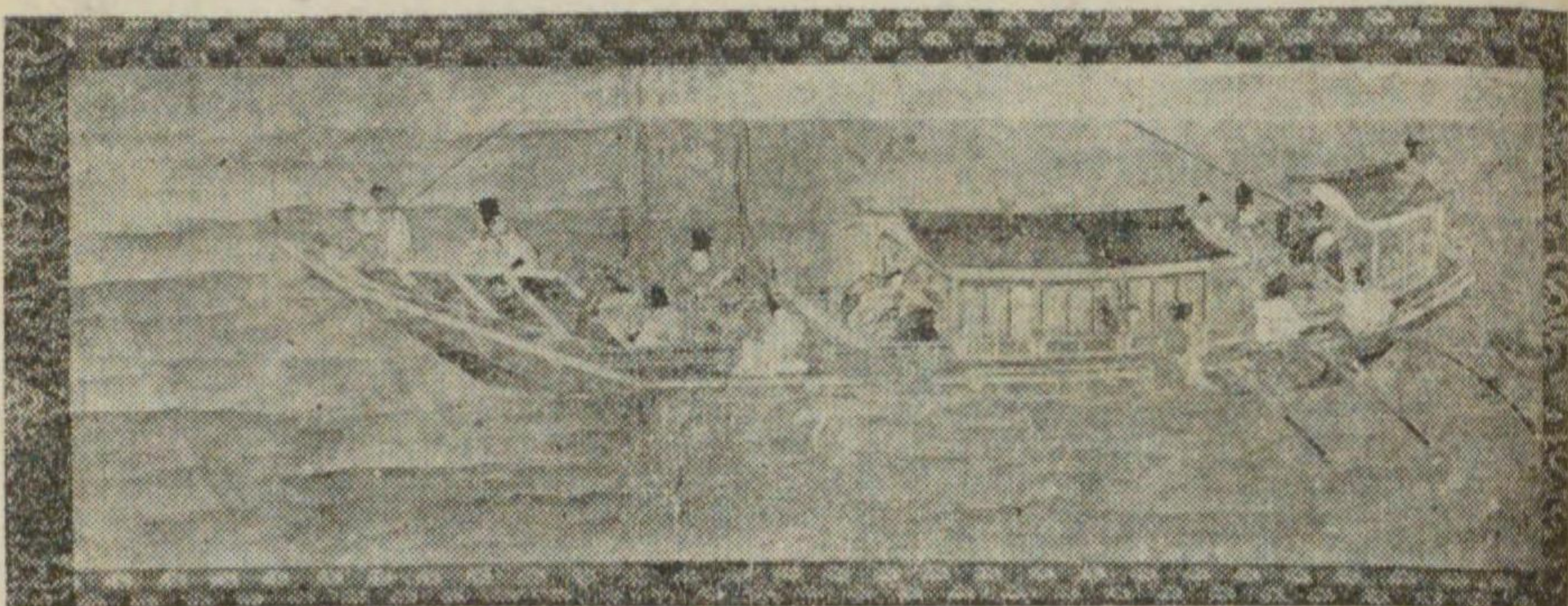
住吉物語殘缺



かれた攝津住吉の海岸のほとり、舩にころぶ眞白な浪がしら、汐の香にむせぶ客の姿態、いづれも、現代の畫家に、おびたゞしき影響を與へてゐるくらゐ、盛りこまれた一幅のうちから、何ともいひ知れぬ味が浸み出て、見るものゝ胸へ、ほのかなる匂ひを通はせる。

○ 『住吉物語』は、著者不明、鎌倉時代に出たものらしい。これには、因果應報の理、全篇を通じて説かれてゐる。これが、戀愛小説の形で現はれてゐるので、當時、洛陽の紙價を、高からしめるまでに、廣く讀まれた。

○ —むかし、中納言で、左衛門督をかねてゐる人の養女に、みめうるはしき美女があつた。中納言の妻は、心よからぬ人であつたので、美はしさに對する反感から、つねに、憎しみを注ぐことを怠らなかつた。住吉に住んでゐる、娘の母の乳母は、この話をきゝ傳へて或夜、娘を連れ出して、この里に匿まうた。——右大臣の子で、四位の少將の位にある男は、早くから、この娘に戀情を運んでゐたが、娘が雲隠れしたあとに、中將の位に進んだ。しかし男は、娘を忘れかね、悶々の日を送つた末、初瀬の觀音に參籠し、娘の居所を知るために七日七夜の祈願をこめた。



「圖の行舟」筆隆長佐土

○ —その満願の日、娘は男の前へ、嫋々たる姿を現した。男は「何所に在しますか、かくいみじき目をば見せ給ふぞ、いかばかりか、思ひ歎くと知り給へる」といつた。娘の顔は急にかゞやしくなつた。そして「かくまでとは、思はざりしをいと哀れにも」といつて一首を詠じた。——わだつなみみの、底とも知らずわびぬれば、住吉とこそ海女はいひけれ。——數日後九年ぶりに會つた二人の姿を、月に濡れてた住吉の濱で見た。二人は楽しく京のぼり、はれやかな明け暮れをつづけた。——男と娘、二人は住吉の濱で、船の中にも、戀を語らうた。——土佐長隆は、それを繪にした。

○ 土佐長隆は、從五位下に叙せられ、越前守に任ぜられた人、參議雅長の孫で、剃髪したのち、快閑といつた人である。古來、繪



巻で傳はるものも多く、みな得難い特徴を備へてゐるが、この長隆の繪の筆法ほど、尖銳で氣格の優拔なるもの、他に比類がない。繪を評するものは、土佐派の繪といへば、ただ閑雅優美とのみいふが、この繪を見て、同じ評をくだすものがあつたら、それは、長隆の繪筆に沈む、底力を知らぬ群盲の一人で、繪をかたる資格はないものとさへいはれてゐる。

### 雪村筆屏風、戴文進筆釣魚圖

……子爵 牧野貞亮氏藏……

現畫壇の大立物で、院展の驍將である木村武山氏が「これは天下の名寶で」と折紙をつけたのは雪村の六曲一双、この墨繪屏風は雪村の晩年、宋元の名家牧谿、顏輝等の風に學び、遂に新意を出して、畫風精巧の域に達した、圓熟の頂上に在る時に揮つた筆であるといはれてゐる。

○ 専門家仲間でも評判の逸物で、この六曲は、代々將軍家の秘藏であつたのを、元祿十六年、常陸笠間、八萬石の藩主牧野家第二代の成貞が、四代將軍綱吉から拜領し、爾來お家の寶物として傳へ來つたものである。綱吉は前橋から將軍家に入つたもの、成貞とは幼友達であつたので、濱

戴文進筆「釣魚圖」



雪村作人物屏風と釣魚圖



町に在つた牧野屋敷には、三日にあげず氣輕な氣持ちでやつて来た。お氣に入りの成貞に『何か一品』と考へた末、この雪村の六曲一双を興へたものである。一線一劃に逆る筆勢、宛然、この裡に躍動してゐる。

雪村は曹洞宗の禪僧だつたが、雪舟を慕つて畫門に入り、遂に天下に名を馳せた。元龜天正の頃、常陸國に流寓したことがあるが、當時、村民共は雪村の盛名を知らず、ただ、畫をかくお坊さんとして、幼兒の夜泣きを封じる占の畫を依頼したところ、雪村は『よし、よし』ばかりに描いてやつた。すると不思議に、夜泣きがやんだといふ逸話もある。

雪村は佐竹家の族で、常州常華村田郷に生れ、貞和三年十二月二日、五十七歳で死んだ。

截文進畫、罷釣睡月圖も、牧野子爵家祕藏中の逸品、谷文晁の鑑定では、明の時代のものである。截文進は名を進と云ひ、靜庵と號したり、玉泉山人ともいつた畫家で、その時代、畫名雷の如く高かつたといふ人、氣味悪いまでに淀んだ湖のほとり、繁茂した芦の間に舟を浮べ、皎々たる明月の下に、綸を垂れる釣人の思ひを、夢の國に走らせてゐる奔放たる筆致は、見る人をして感嘆の聲を惜しませないものである。

これは司空暑の詩文から意味をとつて描いたもの、畏れ多いことであるが、嘗て、明治大帝がこの一幅を御覽になり、殊のほか御氣に召して、お言葉を賜はつたと傳へられてゐる。

### 三日月宗近太刀

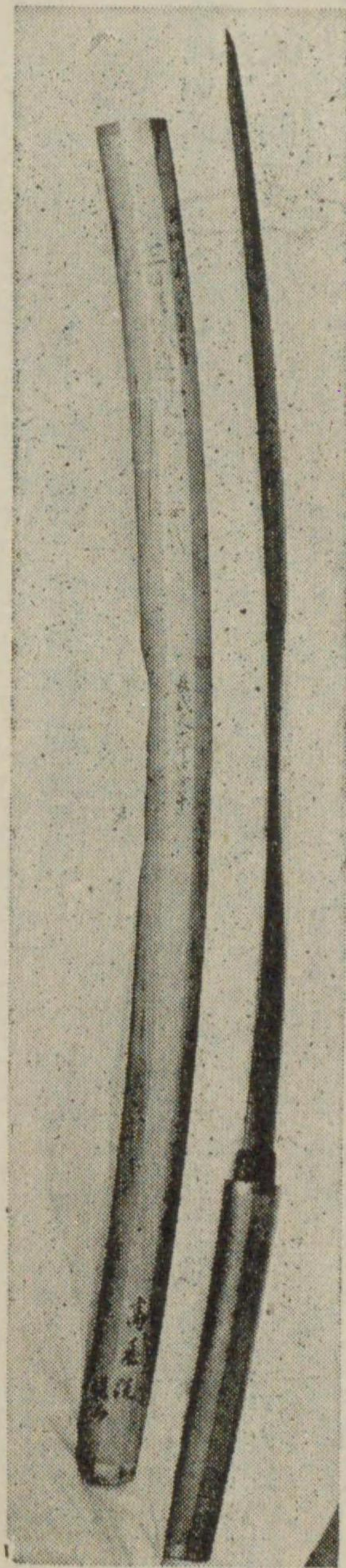
……公爵 徳川家達氏藏……

俗にいふ『天下五口の太刀』——鬼丸國綱、童子切安綱、三池大傳太、實丸經次のうへに立つて、天下随一と稱される名刀が、三日月宗近の一口。三條小鍛治の名と共に、獨り刀劍の覇を稱へて居りながら、かつて世間に姿を見せたことのない業物である。刀身が二尺六寸四分、氷柱のやうな秋水の沬え、鮮かなる焼刃の匂ひ、ともに、他の觀鏡をゆるさぬ。徳川將軍家累代の祕寶で、いま十六代家達公に傳へ秘められてゐる。

三日月宗近太刀



千年冴ゆる「三日月宗近」



「三條」の二字——これへ刻みこまれたのが、永延年間だといふから、いまから九百五十餘年の昔、その陽の下を、光芒、水の滴る如くにいよく冴えて、歴史と傳説を綴りこんで来た、刀壽千年、その奇しき姿である。

現代日本の刀劍界の權威、宮内省御用係として、帝室の御劍を扱つてゐる、松平頼平子が語つたこの寶刀、三日月宗近の話

——この「三日月宗近」を見た人は現在、日本に五人とない。刀劍に造詣の深い一木宮相、犬養木堂氏、その他一二のものと思ふ。全國にわたつて僅三口、宗近の逸品がある。一つは帝室の御物一つは國寶として納められ、あとはこの徳川家の三日月宗近である。

二尺六寸四分の業物、この尖先から少しさがつたところに、閃々たる大亂れのうちから、美しき地肌のうへに飾つて、利鎌のやうな三日月の形、恰も亂雲をかつて獨り皎々たる趣、これがはつきり窺はれるのも、巨匠一代、驚くべき腕の冴えではあるまいか。宗近に三日月の三字を冠らせられたのも、この所以からである。焼刃のほこれといふものゝ、作らんとして作れぬもの、名匠この刀身に、魂を鍛え入れてこそ、始めて求められるものだといふ。

ことに、この三日月宗近の一口に、他の追隨をゆるさぬ、それに二つの驚きがある。それはこの刀

三日月宗近



が千年の歴史をもちながら、その瑠璃色の如き肌のうへに、一點の汚れと染みもないことである。このやうなことは、全く奇蹟の現はれだといはれてゐる。それからもう一つは、神秘的威厳といつてもよいぐらひの、宗近のみが持つ刀の上品さがあることである。それが刀身から極度に放散されてゐるので、一木宮相や犬養氏などは、この壓力の前に、思はず頭を垂れたといふ。

### 西行物語繪卷 (口繪参照)

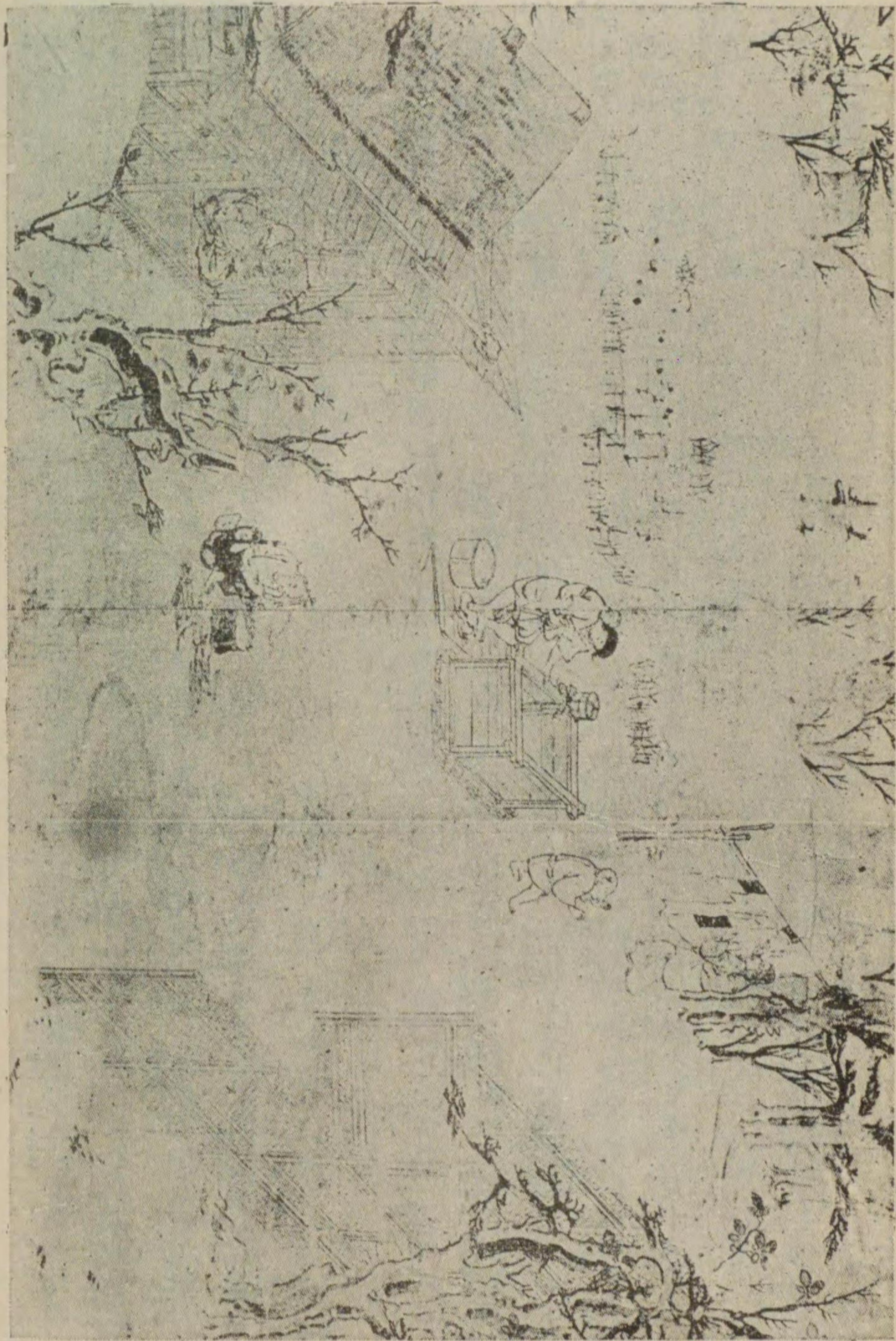
……侯爵 徳川義親氏所藏……

平安朝時代から、鎌倉時代にかけて、名ある人のものした日記や言行を、繪卷にすることがはやつた。いまの世に傳はつてゐる有名なものうちでも、紫式部の『源氏物語繪卷』や『紫式部日記繪卷』などは、その時代が孕んでゐる。空氣や形を知るうへに於て、たゞ一つのものだといはれてゐる。それは平安朝時代のもので、貴族階級や、宮中生活を寫したものであるが、鎌倉時代の歌僧、西行の日記を繪卷にしたものは、平民階級の日記繪卷なので、われ／＼へ、より親しき聲で呼びかけて來る。

佐藤義清は、藤原秀卿九代の孫、鳥羽上皇に仕ふる北面の武士であつた。和歌の天才であつたので、上皇からひどく愛せられたが、氣分に撫でられてゐる歌人の胸には、いたましく映る戦争慘禍の影が、あまりに恐ろしい相ではあつた。——西行は、保延六年十月の夜、水底のやうに澄む月影を踏んで、嵯峨の草庵に行き、つむりを剃つて僧籍に入り、名を法圓よりさらに西行と改めて、具現の苦を遁れた。

一笠一杖、身の輕き西行であつた。かれは、行雲流水をともとして、諸國をたづね、野に伏して詩歌自らを樂しんだ。そして、心の潤うたところには、足を停めて草庵を結んだ。京の圓山に伊勢朝上村に、伊勢宇治館に、大和吉野山奥の院に、流浪歌人は、留淹して歌に精進した。——淺くとも、よしや又汲む人あらじ、われにことなる山の井の水。三年近くすんだ草庵、吉野の奥で詠じた、かれの最も氣に入つたのは、この一首であつた。——西行は、建久元年二月十六日、洛東、双林寺の草庵で死んだ。時に七十三歳。





藤原光長の長男土佐權守經隆、詞書は、爲家卿の筆と鑑定せられてゐる。經隆は畫法を、父光長に學んで夙に天才の名があつた。建仁年中、南殿の聖賢障子を描いたほか、宮曼多良、紀州山水那智屏風、愛染明王などを描き、畫名、さらに轟いた男である。

西行の日記を繪にした人は、土佐宗家の畫人で、藤原光長の長男土佐權守經隆、詞書は、爲家卿の筆と鑑定せられてゐる。經隆は畫法を、父光長に學んで夙に天才の名があつた。建仁年中、南殿の聖賢障子を描いたほか、宮曼多良、紀州山水那智屏風、愛染明王などを描き、畫名、さらに轟いた男である。

この繪卷は紙本着色、堅一尺五分、二卷にわかたれてゐて一卷は、徳川侯の藏になつてゐる。制作された時代は鎌倉中期——七百餘年前のものであるが、この繪卷は、生えぬきの僧である一遍上人や、法然上人の畫傳とは違つて、宗教的な所がない。こゝに寫されてゐる主題の事績が、飘逸なる西行の行狀であるため、その時代の角度より眺めらるゝ、文學的繪畫に終始してゐるの愉快なことである。

卷を通じて設色淡白、鋭い力ある細筆のあと、放膽疏放なる斜擦の横筆とは、山水樹草の趣をことごとくに生かして、われ等の胸をうつ。そのうちに窺はれる經隆の腕の冴え、鎌倉中期の畫匠の面目が躍つてゐる。線描きを主に置いて、自然をもつとも巧に描き、古繪卷中の名品と

日本名實物語



いはれてゐるのは當然である。

### 紫式部日記繪卷

……侯爵 蜂須賀正韶氏藏……

平安朝時代に、文藻一代をほこつた紫式部、上東門院に宮仕へしてゐるころ、寛弘五年の秋から、七年正月にいたるまで、十六ヶ月間の日記——『紫式部日記』が、七百二十年前の建久年間、繪卷につくられた。繪の筆者が、左京權太夫藤原信實朝臣、詞書が、京極攝政良經と傳へられてゐる。

この繪卷、全國にあるものが僅四卷、内容から見ても、ほかに散逸してゐることも判る。紙本で幅が六寸九分、長さ二十尺ぐらひのもの、平安朝時代の風俗——ことに宮中における公的生活の形を知るうへに、この繪卷を通じて、窺ひ知る以上に、正確のものは無いといはれてゐる。

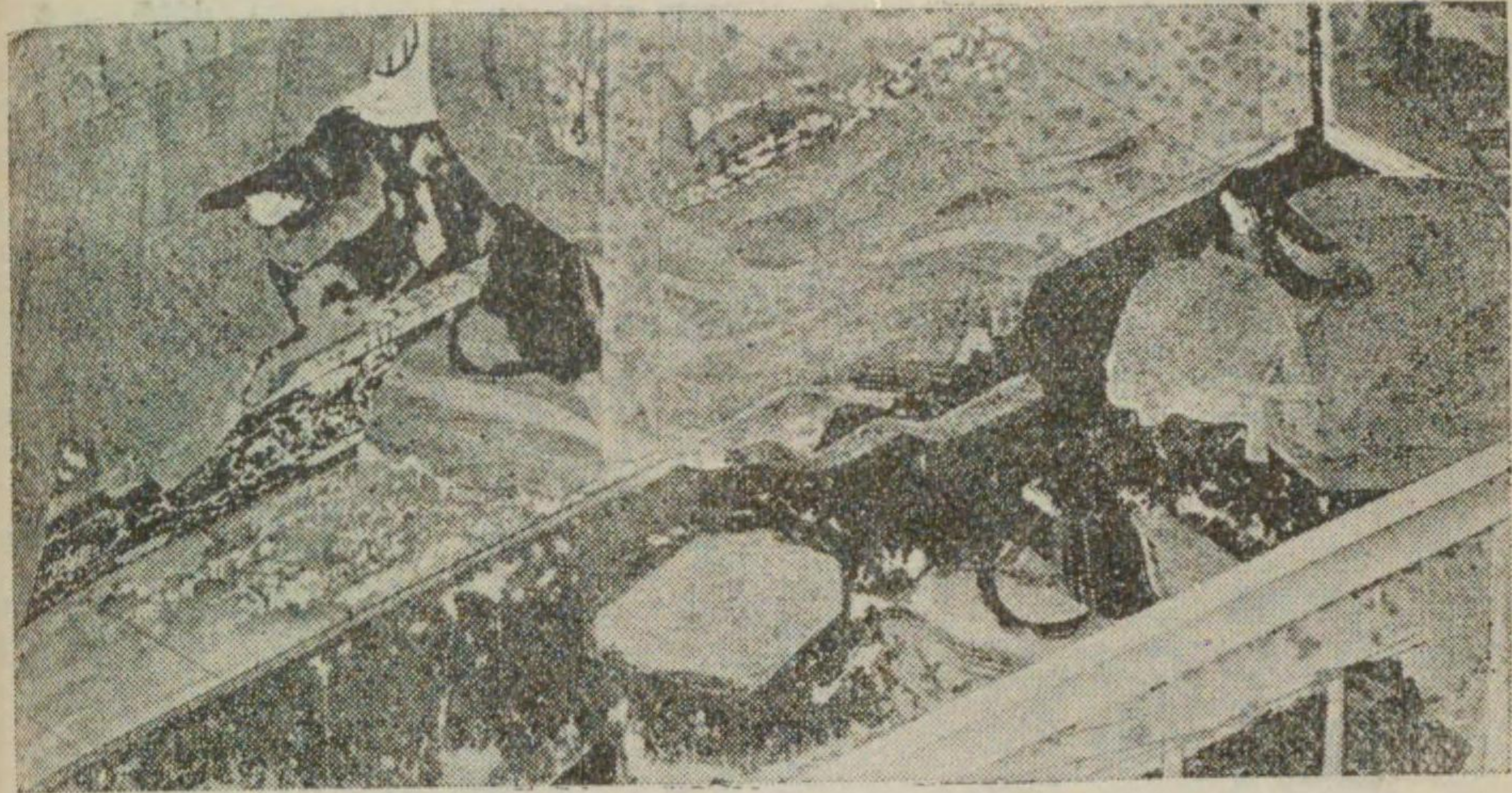
紫式部は、藤原爲時の娘、長保三年四月末、夫の宣孝に死別した後、藤原道長に見出され、

赤染衛門と共に、中宮上東門院に侍した、上東門院も、文藻ゆたかな方であつた。式部は、兄惟規が、史實を読む傍らに於て、暗誦したほどの天才なので、父爲時は、女であつた事を恨んだといふくらゐに、幼時から名を謳はれた。

『源氏物語』は、かれの絢爛な半面を見せてゐる著書であるが、『紫式部日記』は、閑雅優美の一面に、かれの面目を現はしてゐる。——それには、中宮御懷妊の時より、後一條、後朱雀帝の御誕生前後の様子が、やさし氣に記されてある——式部は長ずる所を衿らなかつたので、評判のよかつた女であつた。

日記を繪にした信實は、治承元年に生まれ、文永三年、九十歳で死んだ。詞書をした良經は、信實よりやゝ年長で、建久元年、三十八歳で死んだ。この時、信實は三十歳であつたが、その頃『紫式部日記繪卷』がつくられたものといはれてゐる。現存してゐる四卷を見ると、繪と文との結合が、誤つてゐる箇所を、屢々發見されるのは、今の研究家に、不思議がられてゐる。





紫式部日記繪卷

この時代に、やはり『源氏物語』も、藤原隆能によつて、繪卷にされた。これは、徳川家に秘藏せられてゐるが、『日記繪卷』もそれと同じで『作り繪』といふ畫風、同じ平家納經の『見返し繪』よりは年代的に見て、新しみがある。松岡映丘氏も、鎌倉時代初期につくられたものといつてゐる。この信實が、最も腕をふるつたものに『北野天神縁起』、『三十六歌仙』、帝室御物になつてゐる『穂師の草紙』などが名高い。『紫式部日記繪卷』こそ、専門的に考察して、信實の眞蹟と推定せられてゐる。

『日記繪卷』と、『源氏繪卷』の描寫をくらべて見ると、著しい相違が見出される。『源氏繪卷』に出て来る人物の面貌の、引目鉤鼻式のものとは違ひ、これは、當時初めて勃興した、『似繪』といふ、肖像畫式の、寫實描法をと

つてゐる。前者の屋内描寫に對して、後者に自然描寫の多いのも面白い。——『源氏繪卷』は貴族の私生活をうつつし、『日記繪卷』は、前に書いたやうに、宮中の公的生活を描いてゐる。

蜂須賀侯の『日記繪卷』一卷は、六段の繪にわかれてゐる。この中で、第二圖には、後一條帝御生誕後五日の夜のことが出てゐる。仲秋満月の夜、外祖父道長の屋敷における『産養』のさまが、最も優れて描寫され、庭には、炬火畫の如く點ぜられ、官人の居並んだ圖は、こよなき參考圖といはれてゐる。また第六圖には紫式部が、中宮彰子に、白樂天の詩文集を進講してゐる圖が出てゐる。

### 青磁砧下蕪花瓶

……原邦造氏藏……

新羅、百濟、高麗と、いまの朝鮮が、まだ三韓と呼ばれてゐるころの話だから、推古天皇以前の出来ごとでもあつたらう。どの高麗王の時であるか、この時代もはつきりして居らぬ。兎に角何代目かの高麗王に、藝術を好む男がゐた。そのうちでも、陶器にかけては、一かどの鑑賞家で

日本名寶物語

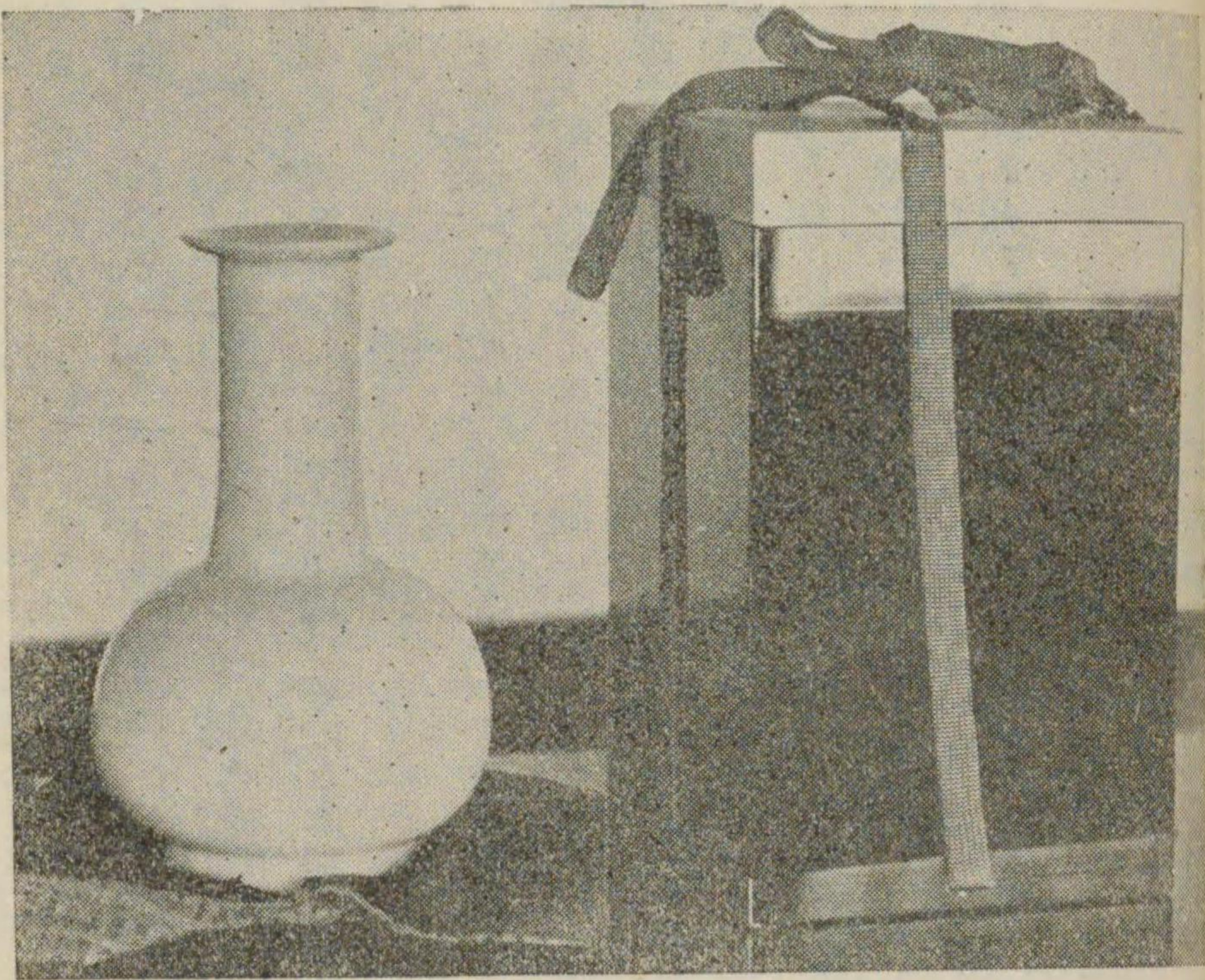


青磁砧下燕花瓶

あつたことから、高麗の國では、いたるところに、陶器をつくる竈の煙を見た。

○ この國の領土は、左程廣くもないのに、穏かな氣候に恵まれなかつた。暖寒をへだてゝゐる線がすこぶる細く、朝に汗ばむやうな暖かさであつても、夜には、刺すやうな寒さに襲はるゝことが度々であつた。この大陸的の氣候の前には、人々もおのゝいてゐるたが、それに、晴るれば濛々たる砂塵が舞ひあがり、降れば、月餘にわたることがあるので、この國では、拭はれたやうな爽涼な大空の下に居る事は、ごく稀であつた。——人々はみな、憂鬱な氣持ちで、生活をつゞけねばならなかつた。

高麗王には、いつもこの事が氣がよりであつた。王がある日考へたのは、ごく稀に見る空の色——雨過天晴の色を、青磁にそめあげて、後世に寶として傳へたいといふ念願であつた。——王は、全國名うての陶工、百數十名を宮中に呼んで、その日にその色を、陶器に仕上げる腕くらべをさせ、宮中の寶物を得る計畫をたてた。



青磁砧下燕花瓶

○ 待たるゝ日が來た。うね〜と續くはるか山の頂きに、黒い雲が一つ浮いた。えらばれた陶工の百數十名は、一世一代、その腕の力を神々に禱つた。——雨が晴れあがつて、高麗の山河は煙るやうな緑をふき出した。空の色も、あくまで深々と澄み切つて、天地ともに、塵一つ止めぬまでに淨められた。陶工らは、いそいでめい〜の仕事に ついた。

日本名寶物語

○ 雨過天晴の色、王の鑑賞眼にかなつたものが、このすぐられた作品中



から、さらにすぐられて、やうやく、三本の花瓶が、宮中の秘寶として保存せらるゝことゝなつた。それはその時、淨められた空の色と、少しも違はぬ色が浮き出たのであつた。この三本が、どう廻り廻つて来たものか、みなわが國に渡來して、いまでは、一本は益田男邸に、一本は濱町常盤に、残る一本こそ、原邦造氏の秘藏となつてゐる。

○ ことに原氏のもの、毛筋はどのいたみもないので、天下の至寶といはれてゐる。實際、この雨過天晴の花瓶などには、細い疵にも、五六萬圓の値がさがるものだといふ。原氏のもの、時價四十萬圓を稱されてゐる。氏の手に渡つたのが明治四十五年、代々これを傳へてきた、柏木祐三郎といふ人から譲りうけたものである。

○ この一品は、藝術的、美術的に、無二の絶品といはれ、けふの如くに進歩した、工藝美術家のあらゆる科學の力をもつてしても、到底、この色を出すことが出来ぬといはれてゐる。

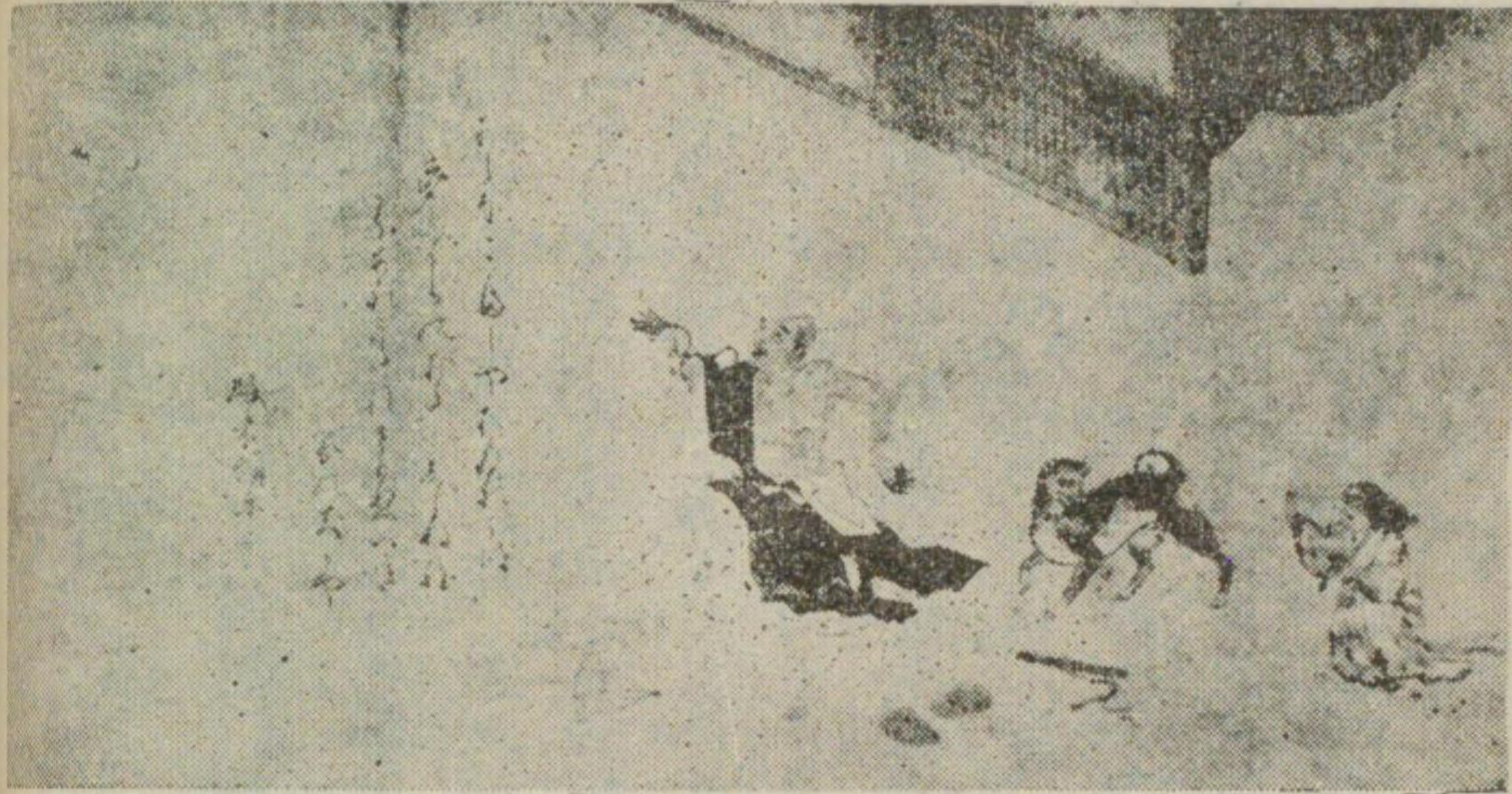
### 破來頓等繪卷

……侯爵 德川義親氏藏……

古來千年、わが國にのみ生まれ出づる藝術で、他に比類なきもの一つに繪卷がある。支那にも繪卷物はあるが、これは、卷を通じて、すべて繪畫のみに終つてゐる。わが繪卷の多くはそれと違つて、繪と詞書が、隣合はせに組込まれてゐる。これは、わが國以外に見ることの出来ぬ藝術で、ひとしく世界に誇り得るゆゑである。

○ この繪卷の奇怪なる名、「破來頓等」といふ言葉は、禪にあるもので、この字の意味が面白い。それは、一切の繫縛をうち破つて、あらゆる、自由平等をもとめることによつて、眞境に獨立することが出来るといふ字義である。そしてこの「はらひとんく」が、その時代の、囃言葉に使はれてゐたのも面白い。それにこの繪卷の詞書が、はらひとんく〳〵の言葉を、頗る重用して、この言葉の持つ内容を、極めて重大に取扱ひ、これを繪によつて説明してゐる。





破來頓等繪卷

この内容は、傳記、縁起、物語風のものでなく、當時の傾向として、このやうなものも、寓意的に存してゐるのであつた。制作は足利初期、繪は、從五位、飛驒守惟久、詞書は、世尊寺行尹といはれてゐる。——惟久は、『後三年軍記の圖』を作つて、畫人としての地位を、確乎不拔に築いた人であるが、『軍記の圖』に繪かれてゐるあらゆるものは、一として詳細ならざるものはないので、當時人争ひて、これを模したと傳へられて來た。

そ、あわれうたはさりぬべき、いへのるぬかや、はらひとん／＼と、聲をあげ、はらひとん／＼を、行するさまであるが、一匹の犬が、その僧の傍に、踊り狂ふてゐるのも面白い。

繪卷物の研究風で、當時第一人者と呼ばれた、内務省の考證官、故中川忠順博士は、この『破來頓等繪卷』研究の、たゞ一人の人であつたが、一昨年死亡して以來、調べる人がなくなり、遂にこの繪卷は、永遠のなぞとなつた。博士の死亡後、これを研究したあとを、いろ／＼探しもつめたが、つひに、發見せられなかつたといはれてゐる。

### 後三年合戦繪詞

(口繪参照)

……侯爵 池田仲博氏藏……

池田仲博侯の秘藏に『後三年合戦繪詞』がある。もとは四卷、うち一卷が散逸して、いまは上中下の三卷、紙本着色の優雅瞭爛、眞に眼を奪ふものがある。竪一尺五寸五分で、この繪の筆者が、『破來頓等繪卷』を繪いた、從五位飛驒守惟久が、鎌倉後期の制作、詞書は、上卷が仲直朝臣中卷は右少將保行、下卷には、從三位行尹が認めてゐる。この初めには、貞和三年、玄惠法印の

日本名寶物語



後三年合義繪詞

序文がある。

この繪詞は、北條家に傳はつて來たものであつたが、北條氏直に嫁した、徳川家康の女普宇子うすこが、離縁されて歸るとき、この『後三年合義繪詞』を携へて來た。その後普宇子は、池田輝政に再縁をしたが、その時に、この繪詞を持つて行つたものである。爾來池田家では、世々傳へて、いまは、仲博侯の秘寶となつてゐる。

鎌倉後期に制作されたもので、當時の畫壇を代表する繪卷は、『蒙古襲來繪卷』、『前三年合義繪卷』と共に、實に『後三年各戰繪詞』が數へられてゐた。飛驒守惟久は、これを描いた爲めに、初めて畫家としての、動かすべからざる、地位を築いたものだといはれてゐる。

——『一行の斜雁雲上を渡るあり、雁陣忽ちに破れて、四方に散り飛ぶ、將軍遙かにこれを見て、恠み驚き、兵をして野邊をふましむ、あのごとく、草むらの中より、三十騎のつはものを尋ねえたり、是かくしおけるなり、將軍の兵これを射るに、數を盡して得られぬ』——八幡太郎

義家の、金澤の柵の件りが中心になつて、繪詞をつくつたものである。この繪詞の別名を、『後三年軍記』、『奥羽軍記』または、『八幡太郎繪卷』などといはれてゐる。

○ 布置構圖の精妙、筆蹟の雄大勁拔、靜動の行きかたなど、畫線の流るゝとこと、全く人目を驚かすものがある。飛雁の亂るゝ形、騎馬武者の馳せ違ふ狀、伏兵の射らるゝところ、義家の仰ぎ見てるる有様など、古風を帯びてゐるうちにも、生氣満ち充ちてゐる。軍記繪として、當時から、おびただしく珍重をせられ、『平治合戰繪卷』などの、深刻味横溢せるものと違ひ、この繪詞がわれゝの胸へ傳ふるのは、常になだらかな、撫でらるゝ如き優雅さのみである。

○ この繪詞は、惟久の想像によつて、描かれたものだといはれてゐる。畫面に行きかた騎馬武者の風俗や武器などより見れば、八幡太郎時代のものとは、いさゝか趣を異にして居り、軍馬のいでたちなども、當時のものとは、全くかけ違つてゐるので、さう傳へられたことは當然の話である。

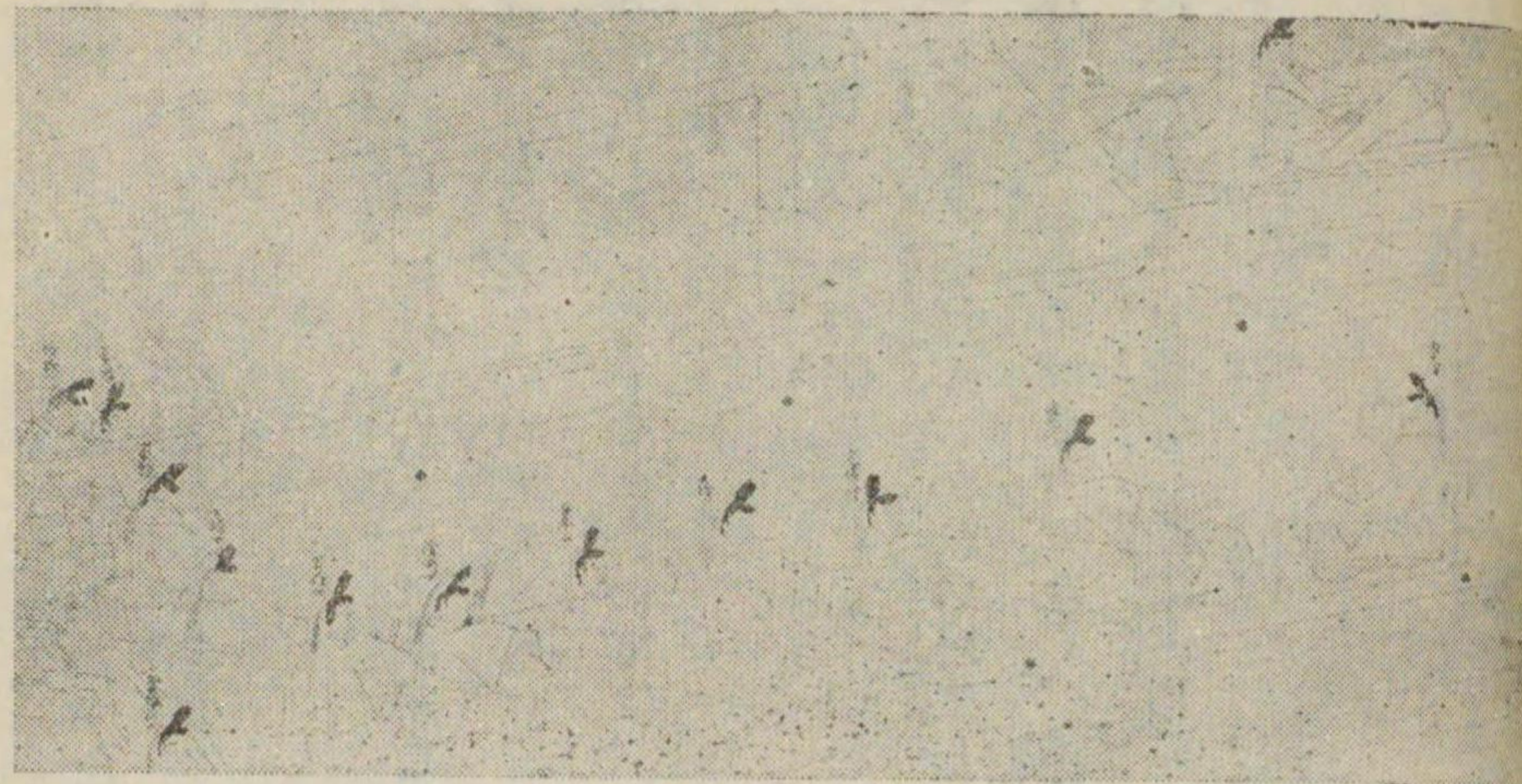


中殿御會圖卷

……公爵 九條道實氏藏……

順徳天皇の、建保六年八月十三日、——いまより約七百十餘年前、宮中の清涼殿で、歌御會を終つたのちに、音樂の會を催されたことがあつた。順徳帝は、當時、歌道や音樂にかけて、豊かな才能を持つてゐられたので、こんな催しが、度々、宮中に行はれたらしかつた。

この日も、順徳帝が中心になられて、催された公宴であつた。ここにゐたらんだのは、殿上人たちと、當時の、歌道の達人らであつた。歌會が終ると、帝は、例のとほり、音樂會を催された。帝はこの時、琵琶をとられて、達者な撥さばきのうちに、落葉の下をくぐる、溪流の咽びのやうな繊細な音色や、枯葉をへうへうと吹きまくる、秋風の如き音にまぜて、美しく、一曲をかなでられた。群臣たちも、いろ／＼な樂器によつて、即興の詩や歌などを歌ひ、いつになき、賑やかな集ひとなつた。



日本名寶物語

【圖會御殿中】筆實信

帝が、何よりも厭に思はれたことは、この會の興趣がつきる時、その瞬間にお胸を襲ふ、淋しき大きな影の現はれることであつた。帝は、何とかしてこの愉快な氣分を、永遠に残したいお心から、いろ／＼思案をせられてふと眼をお投げになると、そこに畏んでゐる姿は、當時似顔書きとして、更に畫壇に名をとどろせかてゐた、右京權太夫信實であつた。

信實は、すぐに、帝のお膝近くに伺候した。帝は爪弾きしてゐられた琵琶を、傍に置かれると、すぐに命ぜられたことは、けふこの公宴の狀を、何者にもさとられぬやうに、寫生をすることであつた。信實もさつきから、そんな心になつてゐた時であつたので、よろこんでお受けをいたし、すぐに支度にとりかゝつた。——侍臣のみ



なは、そんなことは知らなかつたので、燭の心を剪り、眞畫のごとくに、御殿をかゞやかせながら、さんざめく空氣と溶け合つて、興趣はいよ／＼溢れ流れた。

帝の傍には、右大臣道家がゐた。つゞいて、公經、通光などの重臣が居ならび、俊成、定家など、當時名うての歌人たちも、この霽園氣のうちに溶けこんで、いつもの無口に似合はず、愉快氣に、何かさゝやき合つては、大きくはしやいでゐた。

信實が、この繪を帝に奉つたのは、それから、數日のことであつた。白描のものであつたがその公宴の有様が、かれの寫生した似顔によつて、さらに生かされた。——信實は、寫生畫の大家として名あるばかりでなく、諸畫にかけても、妙手といはれてゐた。帝は、これへ、その日に出來た歌を、世尊寺行能に命じて、詞書のやうに、認めさせられた。帝はこれによつて、樂しかつたその日の記憶を、折々よび起されてゐた。

これが『中殿御會圖』として、今の世に傳はつてゐる。一卷になつてゐて、九條公の秘寶、狩

野永納も『中殿御會圖』を着色で描いてゐるが、九條家のものが原本であることは無論である

### 高野切

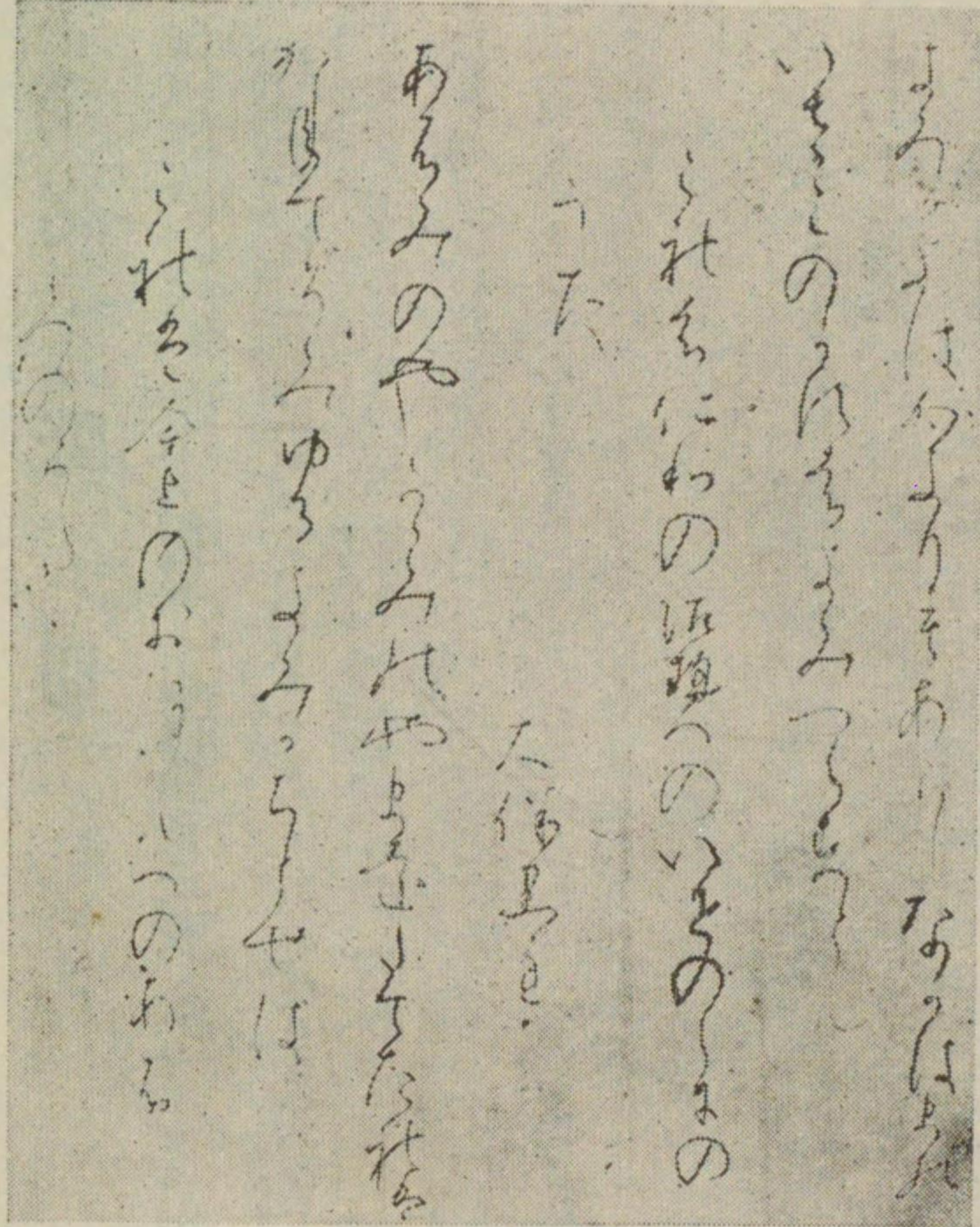
……侯爵 山内豊景氏藏……

漢文字では、支那において、うまいものもあれば、また、古いものも多くあるが、この漢字を崩した假名といふものは、全く、日本獨特の書體である。——日本に生れて出たばかりのとき、その假名で書いた最古のものに、今に傳はつてゐるものが『高野切』、それが最古のものといふだけではなく、その書のうまさ、假名書の絶品として、珍重せられてゐるのだから、いよ／＼尊いことになる。

『高野切』といふのは、醍醐天皇の延喜五年、時の御書所預——いまの宮内省圖書頭にあたる、紀貫之が、帝の仰せを畏んで、撰集した『古今集』二十卷の、貫之自筆と傳へらるゝものゝ斷片をいふのである。もと、高野山のある寺に納められてあつたが、いつか散逸して切れとなり、各名家に分藏せらるゝやうになつた。——『高野切』と稱せらるゝゆえんである。

日本名寶物語





「切野高」筆之貫紀

山内豊景侯の秘蔵する、『高野切』は、巻の第二十一最終巻一巻全部で、巾八寸七分、長さ八尺もあるもので、『切』とはいふが、珍らしく纏まつたものである。一巻全部纏つてゐるものでは、日本に僅か三巻、この外、毛利侯、原富太郎氏の珍藏になつてゐる。毛利侯のは第八巻、原氏のは第五巻であるが、『高野切』の断片で長さ一尺五寸ぐらひのもので

實に四萬圓を呼んでゐる。——山内家のものゝ價も、これでほど想像出来るが、それに第二十巻は、大嘗會の詠進歌など、お祝ひに關するものが多いので、古書愛好者の、垂涎の的になつてゐる。

この巻中には、仁和帝の時、大嘗祭を祝つた、大伴黒主の歌がある。——きみがよは、かぎりもあらじながはまの、いさごのかずはよみつくとも、また詠み人の名は書いてないが、近江の鏡山を讀込んだものに、——あふみのやかどみのやまをたてたれば、かねてぞみゆる、きみがちとせは。前の歌は、伊勢の長濱を、詠込んだものである。

この『高野切』の地紙に、細かい雲母が、一面にまかれてゐる。少し斜めに光線をうけると、仄かにそれが浮びあがる。この底光りする、素朴古雅の味も尊ばれる。それへ、貫之の見事な、假名書の歌が、連ねられてゐるのだから、見る人を、當時の世界へ、吸ひ込んでしまうことも肯かれる。



かういふ古筆類は、一字々々の巧拙を詮議すべきものでない。全體に流るゝ感じ——そこに、和やかさと、品のよさが浮んでゐて、墨つぎなどにうま味あれば、よしとせられてゐるものである。それは恰も、繪畫を鑑賞する時も、同じやうな氣分を、全體から求めらるればよいもので、そこに古筆の尊さと有難さがある。

世に『高野切』なるものは、貫之筆といはれてゐるが、實は、書體が三通りになつてゐて、貫之の一手でないといはれてゐる。斯界の權威者田中親美氏も、明治三十九年に著書『月影集』で、一手でなくとも、切れの價値に係はらぬといつてゐる。筆者の判らぬ古い佛畫でも、尊重さるゝゆえんは、作そのものゝよさにあるからである。『高野切』もその意味で、落款のみを買ふ必要はない。これは古筆鑑定者に最も心得て置くべきことである。

國寶 慕歸繪詞 (口繪參照)

京都 西本願寺藏……

古都の京に、名刹が多い。西本願寺に奥深く秘められてゐる『慕歸繪詞』十卷、これは國寶になつてゐて、近世、一回も寺門を出たことのない逸品、——本願寺の三世、覺如上人の行狀を記したもので、觀應二年、上人が死んでから、次子の慈俊法印が、父の死を悲しんで、その追憶にこれを作つたものだといはれてゐる。

『慕歸』と題したのは——

『かの歸寂を戀ふるが故に、この後素の名として侍り、本より自身才覺なければ、思の如く詞華を和唐にかざることなく、心頑愚なれば、形の如く言葉筆墨にあやつるばかりなり』  
といひ、十卷に分けたのは、圓宗の十乘十境、十界十如、淨教の十題十行、十那十生によるものだといはれてゐる。

繪を描いた人は、第二、六、八の三卷が藤原隆景、第三、四、五、九、十の五卷は藤原隆昌、最初の一巻と第七卷は、後年、藤原久國が補寫した。詞書は、三條亞相公忠が第二卷、一條前黃門實村が第三、五卷、六條前黃門有光が第六卷、少將爲重が第八卷、恒信阿闍利が第九卷、前佐衛佐伊兼が第十卷で、第一、七の兩卷は、後人の補筆になる。このうに、一つの挿話が生れて居る。

日本名寶物語



慕歸繪詞

○ 洛東、東山のほとりに、壯麗華美な金閣寺を設けて、一世に豪奢を謳はせた、足利家三代の棟領義満に倣ふて、八代義政も、銀閣寺を築いて驕奢をほこつた。ある日、義政から本願寺へ「慕歸繪詞」を一見したき旨申し込んだ。本願寺ではそのころから、絶対に「慕歸繪詞」を寺外に持ち出さぬことにして居たが、將軍が強ひての頼みなので、詮方なく、義政に見せることにした。

○ 義政は、日を経ても「慕歸繪詞」を、本願寺に戻してくれなかつた。そしてつひには、將軍家の物といふやうなことにして、そのまゝ數年をすごした。その間、本願寺では矢のやうな催促をつづけたが、いつも瓢箪鯨の返事ばかりで、「慕歸繪詞」は依然義政の手許にあつて、かれの鑑賞心ばかりを満足させてゐた。

○ 本願寺では、とうとう腹に据ゑかねて、當時の勢力者飛鳥井中納言に頼み、厳しき抗議を申入れた。義政も、宮中に勢力を張つてゐる中納言は、いさゝか苦手であつたものと見えて、文明十三年十二月四日、やうやく返してはくれたが、第一、七の兩卷は、つひに戻らなかつた。本願寺

では仕方なく、翌冬、藤原久國に、二卷を補寫させた。

○ 「慕歸繪詞」を見た或る昔の人が、かういつたことがあつた。

「釋尊は、馬上に采配を揮つて、三軍を叱咤する大將軍の如く、親鸞は、印絆纏に捻ぢ鉢卷の土方のやうだ。形は異なれど、土方の親方の方、遙かに碎けて親しみやすく、温味も多い」  
この評者の言葉は、かなり當を得たものだといはれてゐる。覺如上人は、まさに第三世の親方に當るわけだから、われ／＼に近いだけ、親しみの多いことになる。

○ 繪卷といへば、大概のものは、貴族階級を主にしてゐるが、この繪卷は、上人が布教した民家の情景を寫したものが多し。平民を主にした繪卷は、他に類の無いものといつてよい。この繪卷に最も優れてゐるのは、第十卷にある「覺如上人臨終の場」で、この物語りが、涙に綴られる。

○ 若くして、宗祖親鸞の再誕といはれ、穎悟、人をおどろかせた覺如が、如信について、第三世の法燈をうけたころは、親鸞が死んでから三十幾年後であつた。教勢いまださだかならず、近畿

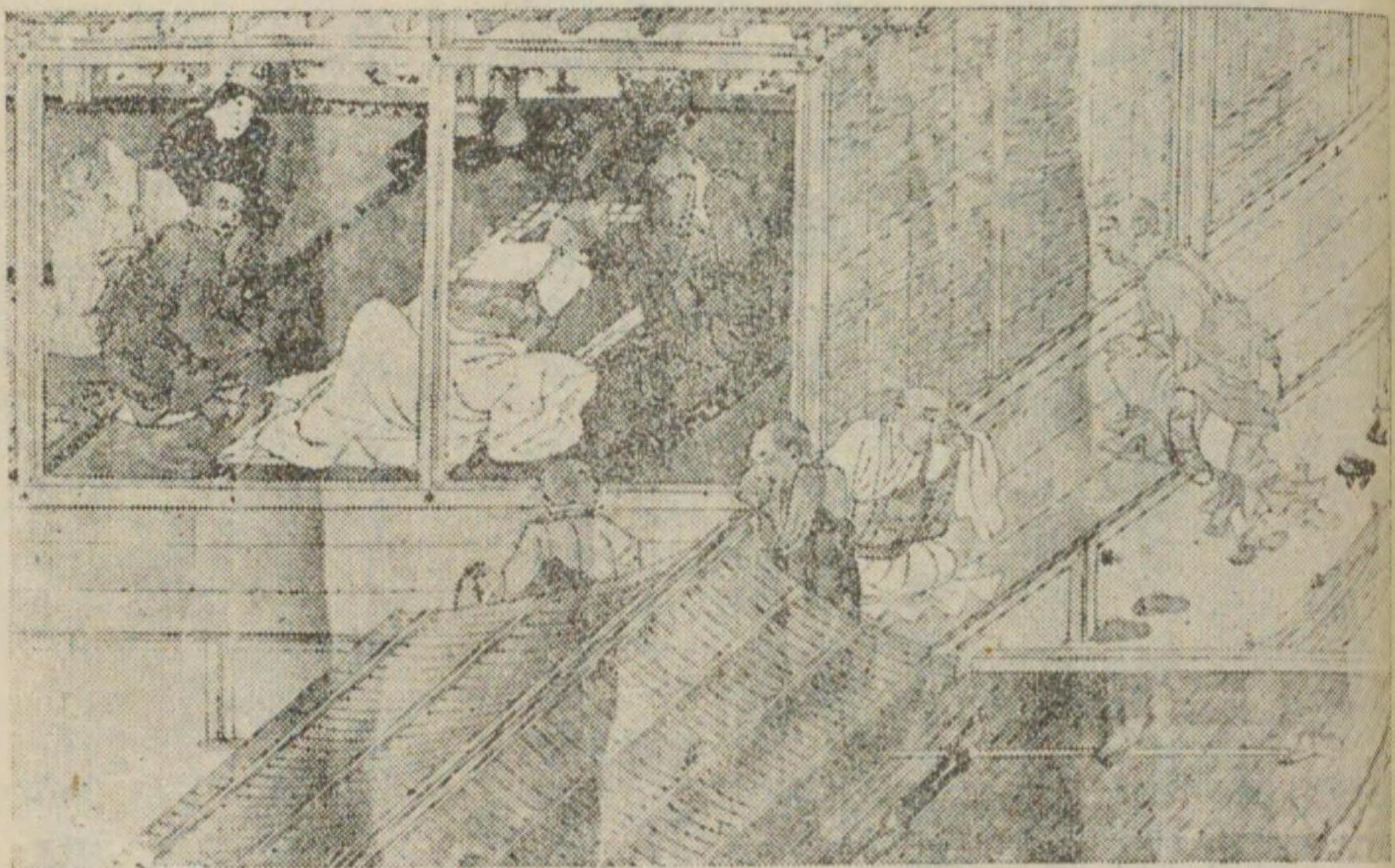


における勢力は頗る微弱なもので、親鸞が開拓した東國に、門徒僅に散るばかりであつた。

○ そのころ本願寺の財政は、東國の人々がさゝげる、僅な燈明料によつて維持されて來た。しかも東國の人々は、些細なことに口實を構へては仕送を怠り、本願寺の財政を、事毎に脅かしてゐた。このために、本願寺は疲弊をつゞけて來たが、この窮乏を救ふために、敢然として起つたのは、學識の聞え、都鄙に謳はれた覺如の長子、存覺その人であつた。

○ 若くして情熱家の存覺は、すぐに、近畿一圓の布教に、全力をつくした。火のやうな辻説法が多くの民衆に響いて、見る／＼うちに、門徒の數を増した。不如意の淵に喘いでゐた本願寺の財政的沈淪が、存覺によつて救はれたことは一再でなかつた。この存覺が、父の覺如との争ひからつひに義絶する餘儀なきに至つた、父子相剋の悲しき一幕が、描き出さるゝ時がきた。

○ いづくの世界にも、争ひは絶えぬ。情熱家の存覺が、民衆を煽る教義の趣旨に、一刻な覺如は快よく思はなかつた。つひには、膝を突き合はせては相譲らぬ法論に、根らめ合ふことがしばし



日本名實物語

覺如上人臨終の場面

ばあつた。父子の争ひは、驚くほど眞剣であつた。なぜなら、内には宗内の異議を整理して統一をはかり、外には浄土の法論に對して、眞宗の本領を明かにせねばならぬかれ等であつたからだ。此眞劍さが、火と水の二人のうへに、避くべからざる最後の切札となつて投げられた。

○ 覺如と存覺の互の胸は、いひ知れぬ淋しさに傷みながら、手を振りきり合つた。こんな悲しい事件に遭遇しながらも、眞宗の宗義は、覺如等の教化によつて、旗幟鮮かとなり、こゝに本願寺の基礎は、やうやく定まるに至つた。——存覺が勘當を許されたのは、覺如の死ぬ一年前のことであつた。



覺如が死んだのは觀應二年の四月、京都においてであつた。存覺はその時、大阪の池田在にあつて、火のやうな布教を續けてゐたが、父の病篤しとの知らせをうけて、矢のやうに、京都に馳せ戻つた。しかしこの時は、覺如はもはや、この世の人ではなかつた。薄い親子の縁に、なみゐる人々の顔は、みな悲しげな泪に濡れた。

この臨終の部屋に、存覺が駆けつけて來た姿は、『慕歸繪詞』の第十卷に描かれてゐる。この繪が、この繪卷の中心ともなつて、覺如の行狀が、繰りのべられることになる。

### 地獄草子繪卷

……男爵 益田孝氏藏……

從四位下刑部大輔、藤原光長の巨作と傳へらるゝ『地獄繪卷』、これが四卷になつてゐて、光長の持つ、あらゆる藝術美を、極度に誇張してゐる。備前安住院にある、國寶指定の一巻、原富太郎氏秘庫の一巻、ほかの二巻が、益田孝男に珍藏せられて、みな紙本着色、堅八寸八分、二十尺以上の各巻に溢れ漂うた地獄相、累々層々として盛られてゐる。

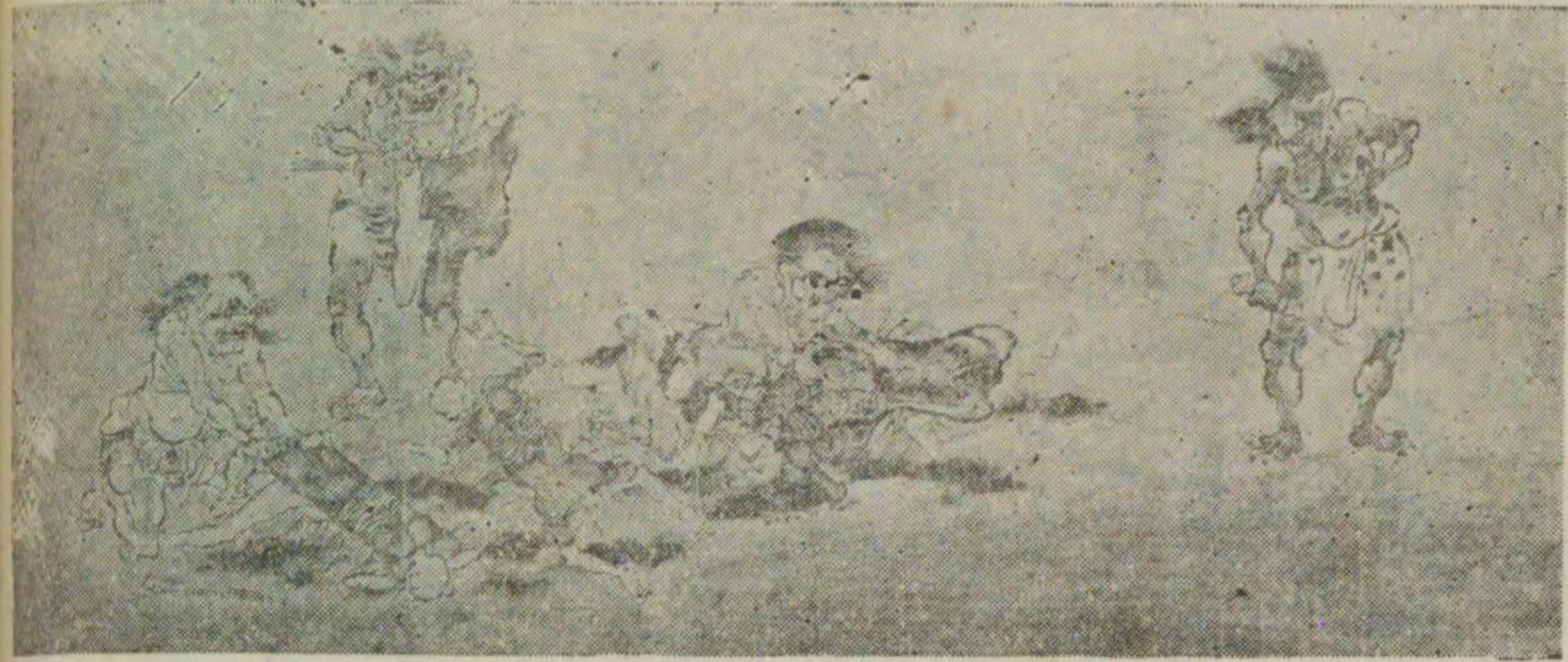
三惡道中の、地獄道を描きつくして、餘す所の無い巨作、詞書の筆者は、明かでないか、美しい假名書になつてゐるので、この繪をさらに物凄さへ誘ふ。繪と繪の間にある、詞書の書出しに必ず『地獄に別所あり』と書かれてゐるので、この繪卷、またの名を『別所繪卷』。

『地獄繪卷』は、關戸氏の藏になつてゐる『病草子』とも、鎌倉時代の、やゝ初期の作といはれてゐる。『餓飢草子』、『伴大納言繪詞』と同じ畫系、これは、佛教教義に基礎を置いて、地獄の狀を説明し、その怖ろしさを、眼のあたり見せたものである。そしてこの一種の宗教畫は、消極的に惡業の果ての怖ろしさを、積極的には、佛教普及と教化のため、描かれたものであるらしい。

四卷のうちには、閻魔の前に曳き据えられ、亡者の虐まるゝ圖、信仰を忘れた者が墜ちて、尿糞池に喘ぐ圖、または、不正商人が、秤目をごまかし、榮耀をつくしたために責めらるゝ『函量所』の圖など、見るものゝ眼を、蔽はしむるものがある。益田家の二巻は、梅檀乾園婆が、鬼衆の

日本名寶物語





藤原光長 地獄繪卷

首を、鋒に貫いてゐる圖や、鐘馗が、鬼の眼を抉つてゐる圖など、虐むものを虐んでゐる圖が中心をなし、陰惨限りなく、筆の運びが繰展べられてゐる。

○ 藤原末期から、鎌倉時代にかけて、宗教畫の流行が著しかつた——地獄を説き、極樂を語つたものうちで、最も詳しくかつたのは『正法念處教』であつた。殊に、有情を中心としての地獄が、それには、眼のあたり見るやうに、説かれてゐて『厭離穢土』『欣求淨土』のことわりが、嚙み含めるやうに教へられてゐた。

○ 惠心僧都は、この『正法念處教』に盛られてゐる思想を、さらに濾過して、『往生要集』を著した。當時この著書は、都鄙を擧げて讀まれた。光長も、頭よりも眼に誘ふことが、この思想

を宣傳するうへに、最も早道であることを知つてこの『地獄繪卷』に、精魂をそゝぎこんだといはれてゐる。

○ この繪卷は、有名な『餓飢草子』と姉妹畫になつてゐる。いま残つてゐるのは、この二つであるが、恐らく光長は、六道の圖を、みな描いたであらふことも想像出来る。當時の大眾を相手にした教義宣傳の目的——それは、光長のこの繪卷によつて、餘す所なき收獲を得られたと同時に、その繪卷に残された、鎌倉藝術の粹が、これに溢れてゐることも、無論より以上の收獲といつてよいわけである。

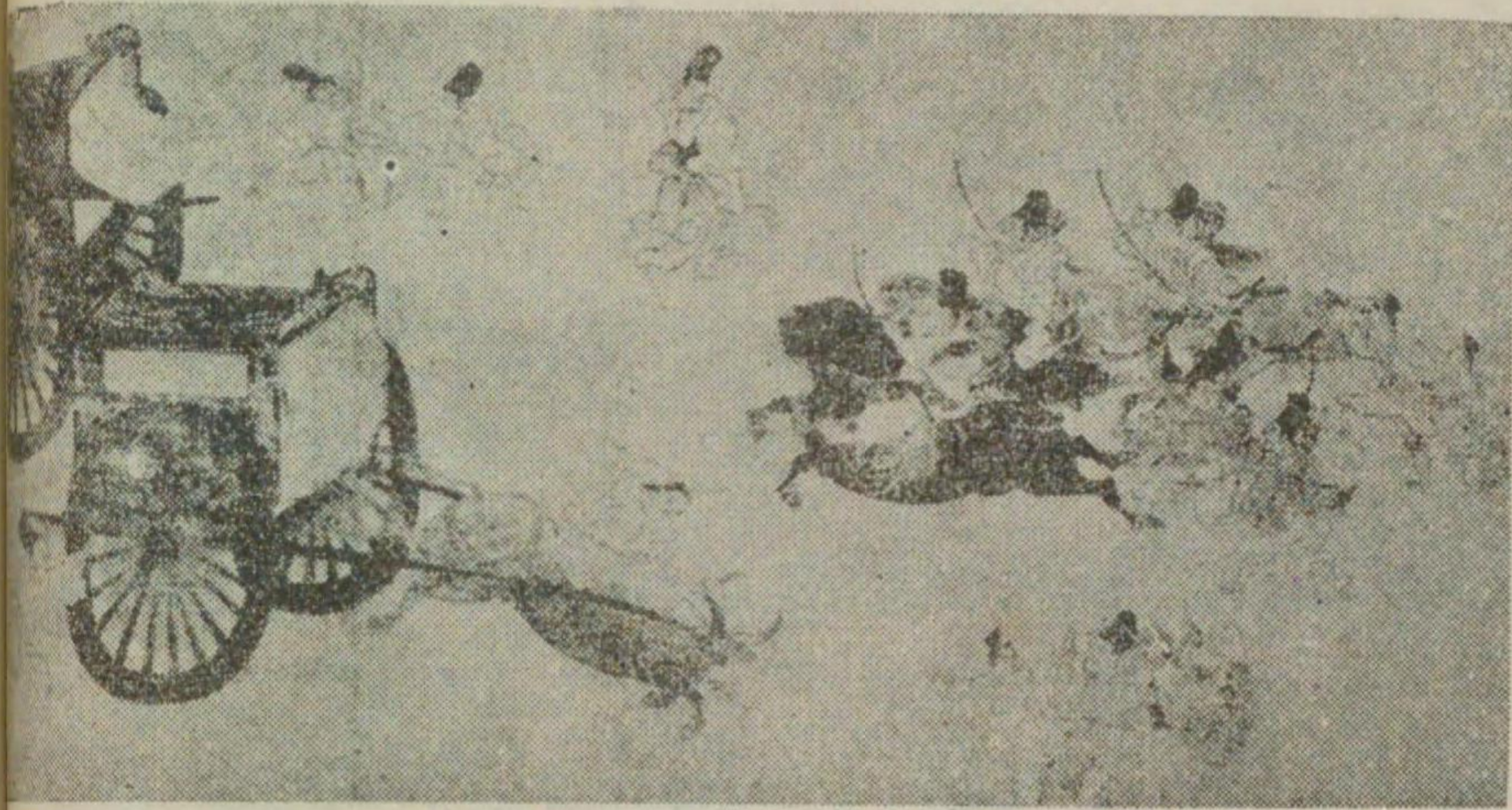
### 直幹申文繪詞

……伯爵 酒井忠正氏藏……

村上帝の天徳年間、内裏火を發して炎上したことがあつた。秋の暮つ方で、その夜は、はだかになつた樹々の梢が、うつやうに吹きまくつて來る強い風の前に、みな一樣に、悲しげな聲にふるへてゐた。燃えさかつた火が、矢の飛ぶやうに皇居を嘗めかゝつたので、御寢殿にあらせらるゝ

日本名寶物語





直幹申文繪詞

村上帝も、僅かに、身をもつて避難せられたことは、洵にお痛はしいかぎりであつた。帝は、中の院に入らせらるゝや、すぐに近侍のものをお召しになつた。——空はまだ、爛れたやうに眞赤に染まり、木を裂くやうな音が、時々聞えて来る。名も知れぬ鳥が一羽、怪し氣な啼聲をたて、この空をよぎつた。

○ 近侍の者は慌て、御前に伺候した。そして、多分そのお訊ねであらうと思つて、代々の御渡物、お椅子、時簡などは、やうやくに持出した旨を申しあげた。愁はし氣なお顔でゐられた帝は、御不興に變つて手を振られた。ふだんの御落着にも似合はせられず、早口で、すぐにかう仰せられた。『申文は無事であつたか、申文は。』——

におろかなことであつた。なぜなら、その申文は、帝には、この品は命にも換へ難き品だと、ふだんよく仰せられて居たからである。無事である旨を申上げると、帝は始めて、高らかに笑はれた。——あか／＼とした空の色も次第に薄れて、四隣はやうやく、閑寂に沈んで行つた。

○ この事柄は繪になつて、『直幹申文繪詞』の一部を構成してゐる。——天曆年間、時の文章博士であつた橋直幹は、かね／＼民部大輔を望んで、手を盡して運動を試みたが、いろ／＼の事情から、その目的は達せられなかつた。直幹は、あせり抜いた揚句、直願のほかに途の無いことをさとつて、自己推薦の一書を、直接帝に奉つた。

○ 帝はこれを御覽ぜらるゝや、俄に、みけしきを變へられた。其一書の文意は、不遜極まるものであつたからである。『自分は文章博士ではあるが、文章博士だからといつて、民部大輔が勤まらぬ筈はない。だから是非民部大輔にして頂きたい』といふ、可成り謙讓と禮儀を怠つた申し條であつた。それにも係はず、帝はすぐに御機嫌をなほされたのみか、感歎の聲さへも發せられたのは、側近のものには、不可解な一つの謎であつた。それは、文意は兎も角、その文章の立派なこ



とと、書は本朝三蹟の一人といはれた、小野道風が認めたものであつたからである。側近の者が、この申文を取捨てようとする、帝は慌てゝ遮られ、自ら、お手函の底深くに秘められた。

○ この申文を帝に奉つたという史話を描いたのが、『直幹申文繪詞』である。紙本着色、竪一尺の一卷もので、之はいま、酒井忠正伯の、秘寶中の秘寶となつてゐて、當の忠正伯さへも、虫干しの時以外は滅多に見ぬ掟であるといふ。南北朝時代に描かれたもの、筆者は土佐派の代表的人物と謳はれてゐる土佐光顯である。光顯が、この制作を思ひ立つてからは、その構想を練るのに、傍目にも痛はしいほどの苦心をした。一卷に刻みこまれた光顯の魂、躍り上らんばかりの面目いよく、冴えて、暢達しきつた筆力に描かれた人物、悉く巻中に勇躍してゐる。光顯はかの『法然上人繪傳』をも描いた人で、また『歌仙圖』は、美術學校の寶物として、大切に保存せられてゐる。

○ なほ、この『申文繪詞』の主人公の、橋直幹は、長門守長盛の子、大内記に任ぜられて後大學頭となつたが、天曆二年文章博士となり、勅を奉じて、文章得業生を策試した。その天徳年間の

始め、式部大輔となり、村上帝に侍讀した男である。

### 經 冊 子 (口繪参照)

……前山久吉氏藏……

藤原末期につくられた『經冊子』を秘藏してゐる前山久吉氏が、いつか關西から歸るとき、列車のなかで、古美術通のある男爵に會ふと、その人はいきなり『君は餘程我慢強い男だね』といつた。前山氏は面喰らつてゐると、手眞似で長方形を空に描いて『あのことだよ』といつた。氏もやつと合點して『經冊子のことですか』と聞き返すと、男爵は『あす是非見せてほしい』——二人は、東京驛で別れた。

○ ーその翌日、男爵は、約束した時間よりもうんと早く、前山氏邸を訪ふた。前山氏が『經冊子』の包みを携へて姿を見せると、男爵は、早くくとせき立てた。そしてその包みが、ほぐされるなり、男爵は一言も發せずに、四時間近くを、むさぼるやうに眺めた。想像以外の絶品であつたので、男爵の前に繰のべられたのは、たゞ驚異の世界のみであつた。——男爵は歸るとき、



『經冊子を見せてよい人は、三人位なものであらう』と感嘆した。日本でこれを見る資格のある鑑定家が、男爵の選定によると僅三人、それほど、この『經冊子』は、眞に珍寶だといはれてゐる。

○ この大きさは、豎が八寸位、巾は四寸ぐらゐになつてゐる。勸普賢經を書いた僅か七八枚つゞりの帖である。珍らしいことに、その中へ、和歌が二首認められてゐる。その一つが、——あさほらけ、ありあけのつきと見ゆるまで、よしの山に、ふれるしらゆき。これは、小倉百人集でお馴染の歌であるが、百人一首では『見ゆるまで』か、『見るまでに』となつて居り『山』が『里』となつてゐるので、最初は、まへの和歌であつたといはれてゐる。

○ それからもう一つ冊中に、この藤原末期の、風俗畫が一枚描かれてある。これが、この時代のことを調べる上に、貴重なる資料であり得ることは、いふまでもない。最古の風俗畫として、宇治平等院の扉繪を、その最上位に置き、この冊子の畫、武藤山治氏の久能寺經、本願寺大谷家の三十六人集等の中にある風俗畫など、けふの世に残つてゐるものを數ふれば、僅五指を屈せらるゝばかりである。

○ この冊子を仔細に見ると、用紙は悉く唐紙を用ひられてゐて、それへ胡粉をひき、さらに雲母で、模様を刷つてゐる。この唐紙の使はれたものに、三十六人集があるが、寫經に、唐紙を用ひたものは極めて稀有である。

○ さらに寫經の様子を見ると、畫の上へ經文が書いてあるが、歌のところは、避けて書いてゐるところから押すと、歌を書いた人の供養のために、寫經して納めたものらしい。従つて、歌の部分には敬意を表して、寫經したかつたといふことも、あり得ることに思はれる。

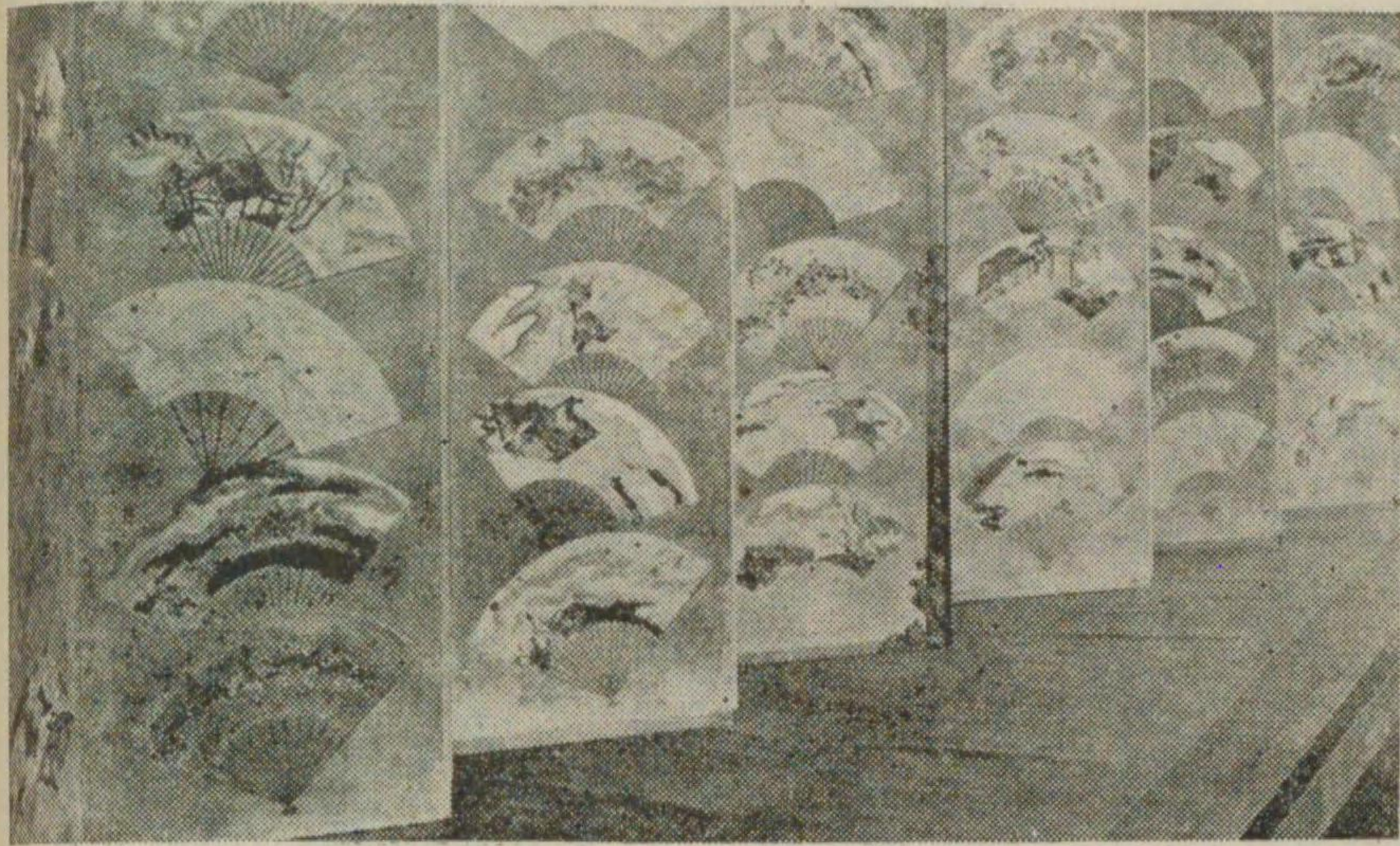
### 三十六歌仙屏風 宗達筆扇面散し屏風

……原 邦造 氏 藏……

原邦造氏か、秘藏してゐる二つの屏風、みな、世を驚かすに足る大作、一は『三十六歌仙屏風』

日本名寶物語





風屏し散面扇

六曲一双、一は『宗達筆扇面散し』これも六曲一双、ともに天下の珍を稱してゐる。これが二つながら、最上層的光彩を輝かしてゐる。

『三十六歌仙屏風』の繪は、みな本阿彌光悦の筆——光悦は、海北友林を師とし、これに土佐風の格を交へて、いはゆる、光悦風の一家をなした巨匠である。慶長年間の作、さらに光悦は、この三十六枚の繪の上に十枚の和歌を、松下堂昭乗が五枚、三貌院信尹が六枚、枚烏丸大納言光廣が五枚、小堀遠江守が六枚の和歌を認めた。——繪は、僧正遍照、小野小町、紀貫之など、歌聖といはれた人達の姿、書かれた和歌はかれ等の作である。光悦は、關白龍山につきて、御家流の書を學び、中頃、道風、佐理を慕つて一家を興し、昭乗

信尹と共に寛永三筆と謳はれた、書家であつた。

光悦の書は残つてゐる。しかしかれの描いた畫が、しかも三十六枚揃つてゐることは、驚くべきことといはねばならぬ。これが天下に珍重せらるゝゆゑであるが、この屏風は又の名を、『六歌仙屏風』ともいつてゐる。

『扇面散し』を描いた宗達は、光悦と同時代の人であつた。宗達は、永徳に畫法を學んでのち、古土佐の筆意を慕ひ、さらに、あらゆる畫人の長所だけをうけ入れて、かれ獨特の畫風を創め、畫名天下を風靡した。水墨に金泥をもつて彩るのは、宗達の一機軸といはれてゐる。宗達の『扇面散し』は、天下にたゞ二つ、一は帝室のものになつてゐるが、六十枚の扇面を見ると、このうち浮ぶかれが苦心のあと、層々と盛られてゐるのを見遁せない。扇の骨にまで、いひ知れぬ鏤心のさまが現れてゐる。

この扇面のうちに、宗達大成後のものと、各流を研究中に描いたものがある。畫も、草花あ



珥加里貞次大脇指

り、山水あり、また人物もあるといふ風に、百姿百態、かれ獨特の手法、縦に横に流れてゐて、白描のものから、眼を射るきらびやかな極彩色のものまである。このうちでも、宗達が、研究中に描いたものは、専門家と雖も、全くかれを想ふことの出来ぬ手法が用ひられある。

『扇面散し屏風』は、はじめ維新のころ、國事に奔走した、ある志士の持ちものであつたが、この畫の散逸を懼れ、先代の原氏に特に頼みこんで、引取つて貰つたものである。

珥加里貞次大脇指

……子爵 京極高修氏藏……

備中國、青江の刀匠貞次——これは、後鳥羽天皇の、御番鍛冶を拜した人、元暦年間、七百四十餘年前に、全國を鳴り轟ろかせた巨匠であつた。この貞次の鍛へたもので、今に残つてゐる『珥加里青江』不思議な名のこの刀、長さが一尺九寸九分、作銘なく、象眼銘で、羽柴五郎左衛門尉長とあるきり、あとは切れてゐる。——今、白鞘にをさめられて、京極高修子の秘寶、累代傳へ

られて來た一振である。

『珥加里』は「にっこり」である。お化けの笑ひ聲の容だといはれてゐる。——貞次の刀に、この名をつけられるまでの、不思議な因縁話、その話がけふの世まで残つてゐる。足利のころ、渡邊綱の末流で、佐々木家の、十番備頭をつとめてゐた駒丹後守、これがこの貞次の所有者であつた。そのころ、駒丹後守の住んでゐた、江州蒲生郡の長廣寺に、子供をつれた幽霊が現はるといふ噂、それが丹後の耳にも達した。

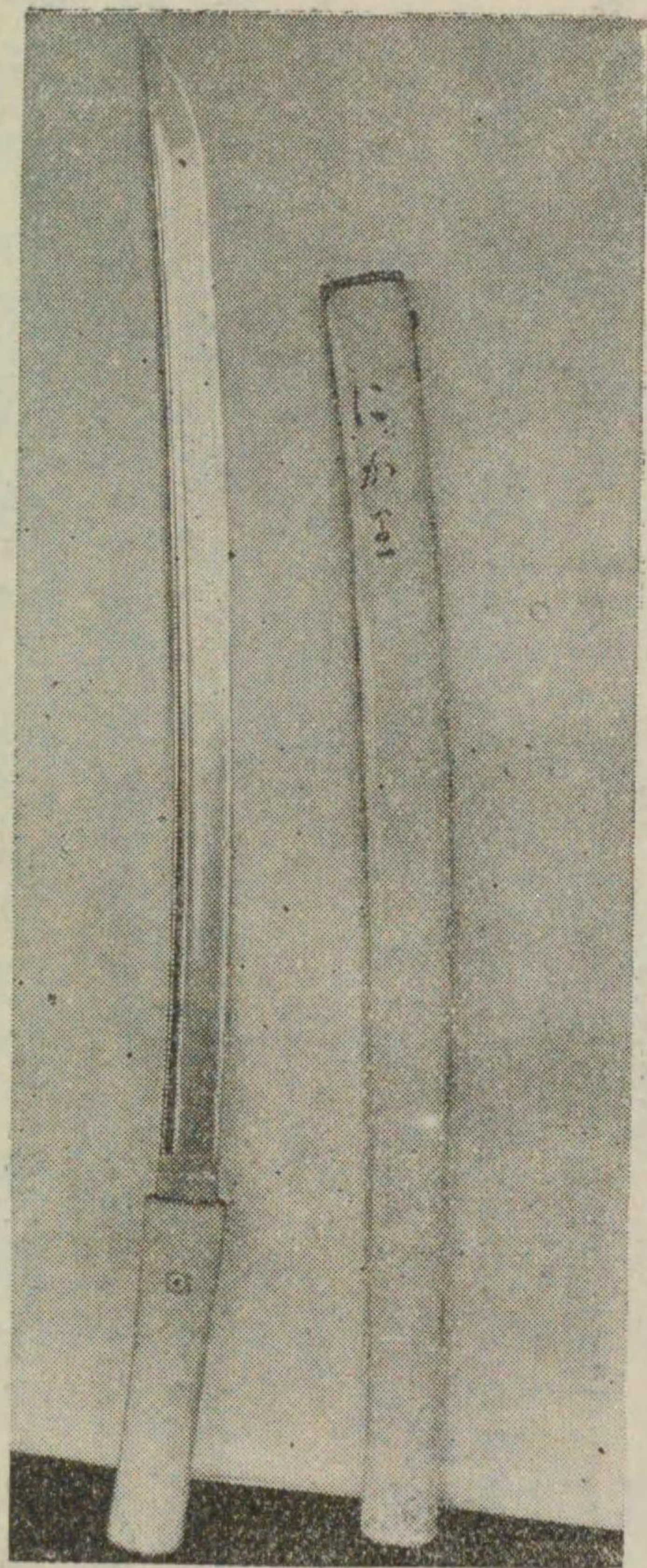
戦國の武士の膽は大かつた。丹後は、その上に、冒険よりうくる興味を、著しく感じてゐる男なので、この噂を聞くと、すぐに、青江貞次を佩いて、この寺に出かけた。その夜は漆のやうであつた。更蘭けて、あたりの空氣が、恐ろしい壓力を加へて來るのを、丹後が氣付いたとき、透き通るやうに蒼白い母子の幽霊が、かれの眼の前へ浮き出して來た。

親の幽霊は、丹後を見るとにっこりと笑つた。そして子を振返つて、殿様に抱かれなさいと指



珥加里貞次大脇指

した。子の幽霊は、丹後に寄り添はんとしたとき、かれは、抜き討ちにした。親の幽霊も、丹後に近づいて来たが、これも、見事に斬り捨てられた。——丹後は、翌朝この寺を再び訪ねた。本堂に行つて見ると、苔蒸した大小の石佛がころがつてゐた。それは、二つとも、首の無いものであつた。その後、幽霊の姿も、この寺より掻消したと傳へられてゐる。



た。勝家が、薨破柴田の名を轟かせた、長廣寺といふのは、丹後の、幽霊を退治したのと、同じ寺であるのも、奇しき因縁である。

○ 丹後の青江貞次は、その後、柴田修理勝家に傳はつ

天正十一年四月、勝家の子於國丸は、齡十六歳、この貞次を佩いて、賤ヶ岳に出陣した。佐久間盛政は、中川清秀を襲殺し、戦勝に酔ひつゞけて、馬首を返さなかつた。於國丸は、勝家の命によつて、これを諫止するため、盛政の陣に赴いた翌曉、秀吉の大軍殺到して全軍を潰滅させ、於國丸は丹羽勢の捕虜となつた。秀吉は於國丸を六條磔に斬つた。かれの佩いてゐた青江貞次は秀吉より、一度丹羽長重に興へたが、幽霊を斬つた因縁を聞き、秀吉はこの刀を召上げ、「珥加里青江」と名づけて、かれの秘藏とした。

○ 慶長の中頃、秀頼は、自分の顧問であつた、若狭守京極高次に、これを興へた。以來、京極家の重器となつたものであるが、享保七年の春、佐渡守高矩の時、將軍吉宗は請はれて見せたところ、宗吉は稱美措かなかつた。この刀はもと、双渡り二尺五寸、長重の時二尺一寸とし、自分の名を入れた。金象眼に羽柴とあるのは、秀吉より賜はつた、記念に入れたものである。

宗達筆四季花卉卷 (光悦書)

……男爵 團琢磨氏藏……



宗達四季花卉卷

嵯峨帝、弘法大師、橘逸勢、これが日本の三筆。寛永の三筆といふのに、近衛信尹、松花堂および本阿彌光悦がある。——光悦は、書名高かつたばかりでなく、樂焼などをつくるのに、非凡の腕を持つてゐて、他の追隨を許さぬ、飄逸風雅のものをつくつた。この手づくねは、茶室などで、殊のほか珍重せられてゐるが、光悦の手づくねは、かれの營む生活形式の現はれであつた。書もまた、枯淡俳味を帯びてゐて、かれの風格を通はせてゐる。しかしかれの繪で、けふまで残つてゐるものは、殆どない。——光悦の本職は、刀劍鑑定師であつた。

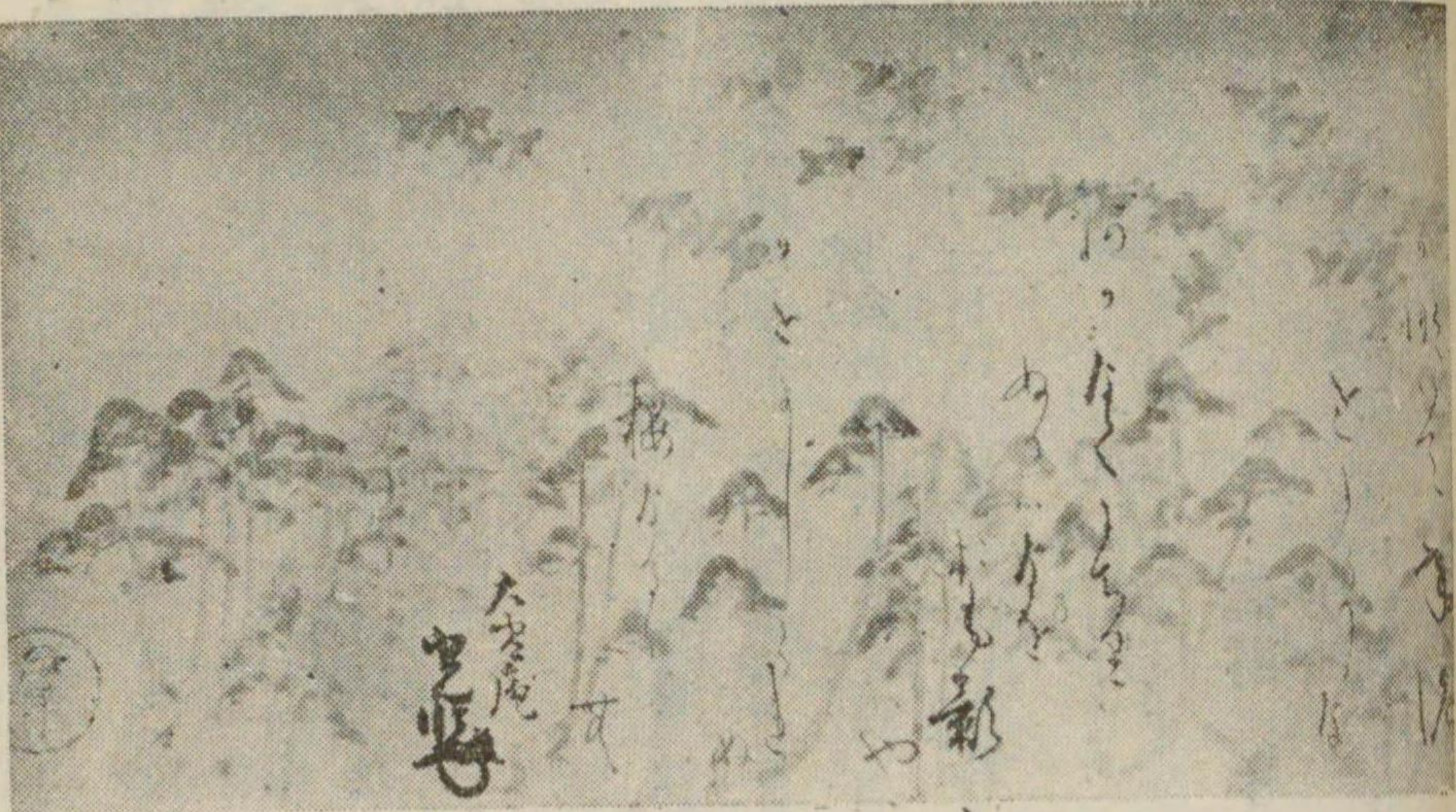
團琢磨男の秘藏してゐるものに、野村宗達の描いた四季花卉の畫のうへに、光悦が古歌を認めてゐる一卷がある。かれと宗達は、同じやうな道を、歩んでゐるだけに淺からぬ私的交渉を續けてゐた。この一卷に描かれてゐるものも、心安かつた二人の間には、何の窮屈な心もなく、作りあげられたひろくとした一卷であつた。三筆といはれた、光悦の筆跡もさることながら、宗達の描いた下繪には、殊に驚歎せずにもられない。

畫は金銀泥の二色、四季色變りの紙を用ひて居る。春は、霞のやうに立置めた櫻を描き、夏は

藤の花、秋は秋芒に月をあしらひ、冬は海邊の松に、群れ飛ぶ千鳥を描いてゐるが、數十羽の千鳥、みな姿態を異にして、抜けてんばかりに羽叩いてゐる。

この畫卷は、もと加賀のある人の所藏であつた。十數年前、益田男へ見せに行つたところ、男も垂涎して種々交渉をしたが、値開きから、折合はなかつた。間もなく、京の鷹が峰、光悦寺で開かれた光悦會の下見の日、わざわざ西下した田中親美氏が、これを激賞して、團男に告げた。——團男は數千金でこれを買求めた。

益田男も、同じ宗達の畫で、やはり光悦の書のある『百鹿圖卷』を持つてゐた。團男は、このことを知つて



(參)卷花卉季四書悦光 筆達宗



● 類聚古集

ゐるだけに、買求めたこの畫卷と、『百鹿圖卷』をくらべて見たかつた。そして、買入れたことを益田男に告げず、『百鹿圖卷』を、見せてくれと申込んだ。それは、團男の想像してゐたより、立派なものであつた。そして巻末に捺されてゐる、宗達の雅號『伊年』の印の大きさをくらべるため、名刺を出し之を折つて寸法をはかつてゐると、益田男は肩をたゞき、『君とうく買つたな』といつた。そして二人の間に、大きな笑ひが交された。

○ 宗達筆の下繪、光悦書の長卷は益田男所藏の『百鹿』のほか、大倉男の『百荷百首』、牧田環氏の『四季草花』などがある。これに、團男の『四季花卉』の一卷をいれて全國に僅か四點、そのうち、大倉男のものは、大震災で焼失した。いま三卷の名作が、殊に、團男のものは、何といつても、一しほの莊嚴さが、溢れてゐるといはれてゐる。

類聚古集

……侯爵 中山輔親氏藏……

京の舊家烏丸家で、徳川初期ころより傳はつて來た古文書類が、小長持にはいつたまゝ、明治

二十七年に、親戚にあたる、中山侯爵家の手にうつされた。この中には、細川幽齋が、小田原城中で書いた有名な『歌枕名寄』などもはいつてゐたが、この書類を整理した宮相田中光顯伯が、最も驚嘆したのは、このなかより、『類聚古集』の十六冊が、発見せられたことであつた。

○ 『類聚古集』の存在は、學界最大の欣びである。その價値にいたつては、國家の至寶といはるゝぐらゐに、國寶級の秘寶を稱してゐる。平安朝の末期で、保元平治の亂にさきだつこと三十年、今より約八百年前、藤原敦隆がつくつたものである。敦隆は、當時の有名な文學者で、一門もみな、文學者であつた。紫式部なども、遠い親戚にあたつてゐるが、敦隆は保安元年、五十幾歳で死んだ。

○ 敦隆は、萬葉集にある、短歌と長歌を、題目のうへより見て、これを分類し、二十冊に書きあげた。この時代から、徳川の初期——烏丸家に傳はるまでには、どうしたものか、四冊は散逸した。残つてゐる十六冊、——それが、いま中山家に傳はつてゐる『類聚古集』のすべてである。

この本の、六卷目の最終に、『一見了』の三字、書き印になつて記されてゐるが、これは伏見天日本名寶物語



皇の、御眞筆であらうと、鑑定をせられてゐる。伏見天皇は、有名な文家好きの方、萬葉なども、可成り御研究になつた。それは、帝が『類聚古集』をお讀みになつたため、記憶のおしるしに、かう書かれたものらしい。この『類聚古集』は、もと、細川幽齋のものであつたが、烏丸家へ移るまでに、面白い物語がある。

細川幽齋は、徳川家康と親しくしてゐた。その關係から、慶長五年、天下分目の、關ヶ原の合戦の時は、丹後舞鶴城にあつて、家康に好意を示してゐた。——幽齋は文學者として、名高い人であつたので、いろんなものゝ研究をしてゐたが、わけて、古今集の研究にかけては、當時日本一といはるゝぐらゐの博識であつた。

幽齋が、家康へ事ごとに示す好意は、豊臣方の、憤りを煽るに充分であつた。關ヶ原の合戦が始まると、石田三成は、手勢を動かして舞鶴城を攻めたため、この城の運命は、明日をも知れぬ危さに近づいた。このことが、後陽成天皇のお耳に達すると、天皇は、烏丸光廣、三條西實條、中院通勝に、舞鶴城の圍みを解き、幽齋を救ふべしと勅宣を賜はつた。三人は舞鶴に下向し、この趣を石田三成に傳へると、三成は濫々圍みを解いた。

三人は、舞鶴城に、幽齋に對面した。そして、帝の御好意を傳へたのち、好學の三人は、幽齋から古今集に關する、詳しい教へをうけた。天下が、葵の旗風に靡くと、幽齋は京に出た。そして、三人のうちに、最も才氣煥發である、烏丸光廣を訪ねて、自分の秘藏してゐた、自著『歌枕名寄』や、十六冊の『類聚古集』を與へた。——烏丸家には、爾來、累代の秘寶として來た。

この『類聚古集』を、明治四十五年七月、明治大帝が、帝大行幸のみぎり、お眼にかけたことがあつた。大帝はその時、佐々木信綱博士から、これに關する御進講を聞きしめされ、御機嫌いとうるはしかつたといはれてゐる。

### 三十六人歌仙家集

……伯爵 大谷光照氏……

西本願寺、大谷家の秘寶中に、第一を謳はれてゐる『三十六人歌仙家集』、これも、國寶指定の

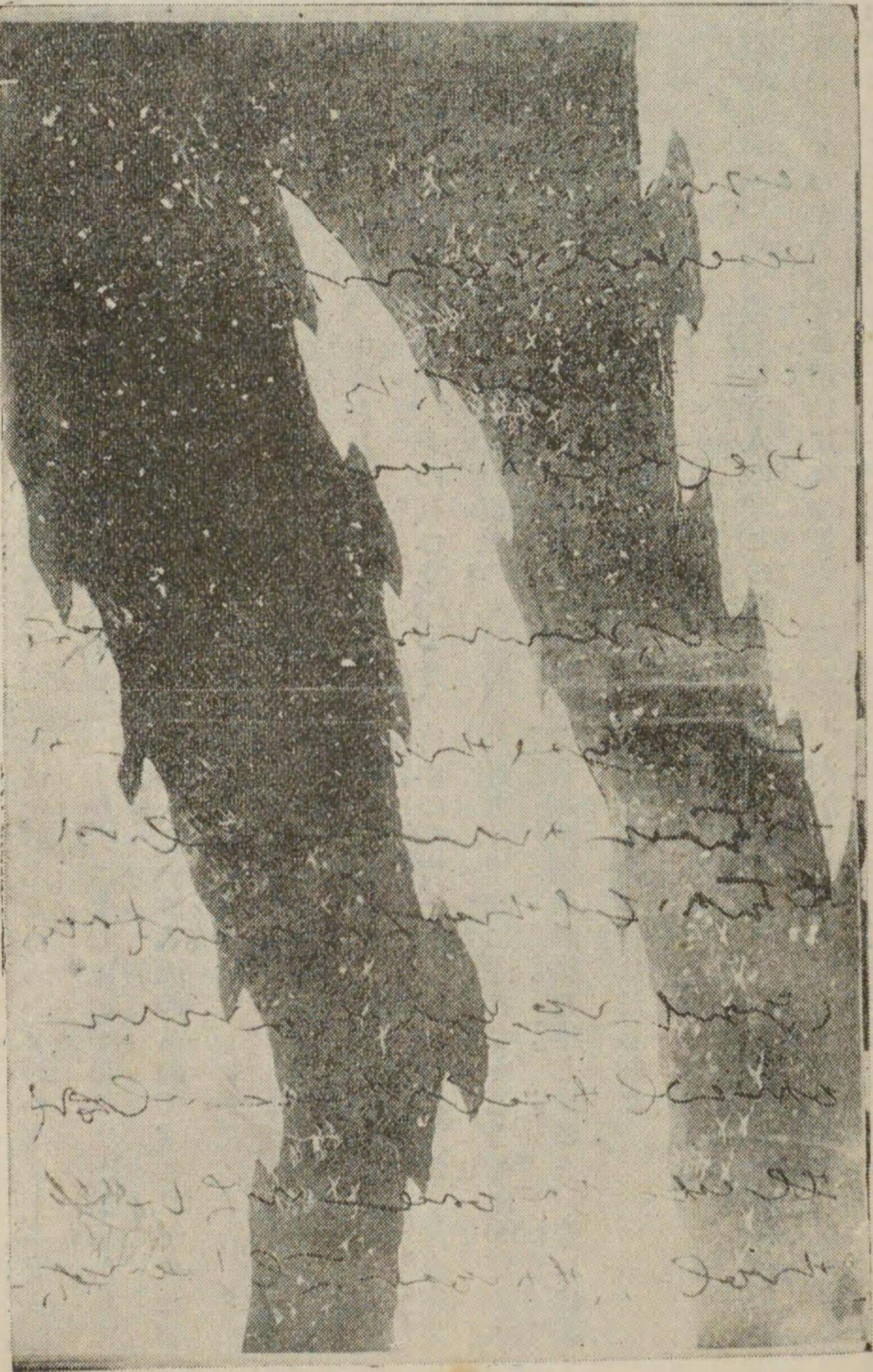
日本名寶物語



交渉をうけたとき、すぐに断にたぐらひ、大谷家には、何者にも換へがたき品、卅五冊になつてゐて、千三百七十二枚、一冊十枚綴りより、九十八枚綴りにいたるものもある。

この『三十六人集』こそ、現代の日本が持つ、古筆中の最上層のものとして、古雅の匂ひ、壯嚴きはまりなきまでに、四隣に燦する。見る人にして、初めて頭のさがる絶實といはれてゐる。こゝに現はるゝ『三十六人集』の筆者は、いづれも不明、たゞ藤原時代に、天下に名を謳はれた、道風、佐理、行成等の名筆家が、一世一度、全精力を傾けたものといはれてゐる。書は、一冊か二冊目ごとに、筆者が違つてゐるが、この『三十六人集』を見て、美術家連や研究者が、最も尊い研究資料としてゐるのは、この書の料紙で、これが、あらゆる技巧のうへに、妙絶の限りをつくしてゐる。

それは、『重ねつき』、『破れつき』、『切れつき』等の、つぎ目の技巧を用ひて、たくみに、山、洲濱模様、芦分舟などを、自然の繪のごとくに、浮き出させてゐることである。そのうへに、金銀泥を、花鳥草木などに用ひた散らし描き、全くあやかなるものである。料紙の一點だけより見て





も、『三十六人集』の持つ價値が、いかに藝術的に、最上位を擲んでゐるかゞわかる。——『紫式部日記』のうちにも、この料紙が問題にせられて、そのつくり方にまで及んでゐることが書かれてゐる。それに、書の綴りかたも、一切糸を用ひぬ『粘葉綴』といふ古風のもので、これがまた、研究家に珍重せられてゐる。

○ 關白藤原道長の娘彰子、中宮として入内するとき、道長は、秘藏してゐたこの『三十六人集』を、喜びの引出物として與へた。その後ひきつゞき、宮中の御寶として傳へられたが、後奈良天皇の御即位前のころ、宮中の御財政、意に任せなかつたことは、洵に恐れ多いことであつた。本願寺の證如上人は、この財政的沈澁を見るに忍びず、黄金一萬兩の獻納を申し出ると、帝には嘉納あらせられた。——後奈良天皇御即位の大典は、つゝがなく執り行はせられた。

○ その後後奈良天皇は、證如上人の、この好意に酬いらるゝために、何か贈り物をせられたい御希望から、いろいろ心をお用ひになつたが、證如上人が、かね／＼『三十六人集』を、褒めちぎつてゐることを聞かれ、これを下賜さるゝこと、なつた。その時、『差遣はす』といふ、御沙

汰書の女房奉書も添へられた。——この女房奉書も、いま大谷家に傳はつて『三十六人集』とともに、秘庫に藏せられてゐる。

○ 『三十六人集』は、粘綴りになつてゐる關係から、幾分の散逸は免れがたいことであつた。しかし一冊に纏つたものは、決して他の類の無い所である。散逸してゐる一枚——その價すら、市場は、常に數萬圓を稱してゐる。

○ 明治二十九年八月、故大口鯛二氏が、京都に遊んだ折、大谷家の寶庫を見たことがあつた。その中に『歌集』と書いた一函があつたので、見ると『三十六人集』であつた。そして、女房奉書も発見せられたので、いよ／＼その確實さに、裏打ちをせられた。大谷家ではそれまで、確實な事は、判らなかつたといはれてゐるが、この発見は、佐々木博士の『元曆萬葉』の発見とともに明治年間に於ける、古筆の二大発見である。



螺鈿時雨鞍 (口繪参照)

……侯爵 細川護立氏藏……

『青貝摺時雨芦出の鞍』——細川護立侯が、家寶の第一に押し立てゐる逸品、俗に『時雨の鞍』といつて、天下に名だゝる品である。京の男山八幡に、納められてゐる『海松文の鞍』これとともに、天下二つの鞍と謳はれてゐる。これを愛用して來たのが源義經なので、この鞍にある、藝術的價値を包んで、さらに、歴史的回顧が、その上へ、ゆたかなる彩りをつゞける。

源義經は、芝居の『勸進帳』に出るやうな、綺麗な男であつた。背は少々低かつたが、色は眞つ白で、そのうへに神彩秀發だといふから、男前としてのよい條件は、みな備へてゐたらしい。たゞ反齒だといふことであるが、これは、同名のものと間違はれたのだといふから、義經には、迷惑千萬のことであるに相違ない。精悍な軍馬の背に、この絢爛たる『時雨の鞍』を置き、

美々しく着飾つた若武者が陣頭に采配を振る形、それは恰も繰り展べられた錦繪から、抜け出た一つの姿であつたことも想はれる。

義經は、この鞍を愛馬に置き、各所に轉戦した。一の谷の役に、鴨越の嶮を征服したときも、この『時雨の鞍』であつた。かれはこの鞍を、愛用したことは有名な話で、馬より降りたとき、軍兵が、この鞍を持つて、かれに従つて行くことを、常としたほど大切にした。

比叡山の大僧正であつた慈圓が作つた歌に、新古今集に蒐録せられてゐる『わが戀は、松に時雨のそめかねて、眞葛が原に、風さわぐなり』——この歌が、この鞍に、青貝ですり出されてゐる『時雨の鞍』といふ名かこゝより生れたのも、無論のことである。鞍の模様は松葉のうへを眞葛が一面にからんでゐて、この間を點綴した『わが戀』の一首、それが各所に縫出されてゐる。

この『時雨の鞍』は、純然たる日本風なものであつて、自由奔放に伸び切つてゐる。基調を大和繪に置いてあるので、優雅の匂ひ、限りなく滲み出てゐる。



この『時雨の鞍』は、細川家累代の秘寶である。それが、いつの代より傳はつてゐたものか、記録にもない。同時に、この鞍の作者が、誰であるかも知れないが、これが、神社佛閣に傳へられたものなら、とくの昔、國寶の指定をうけてゐるものだといはれてゐる。この『時雨の鞍』は、いまは熊本の細川侯本邸秘庫に納められてゐる。

### 病草紙繪卷

……關戸守彦氏藏……

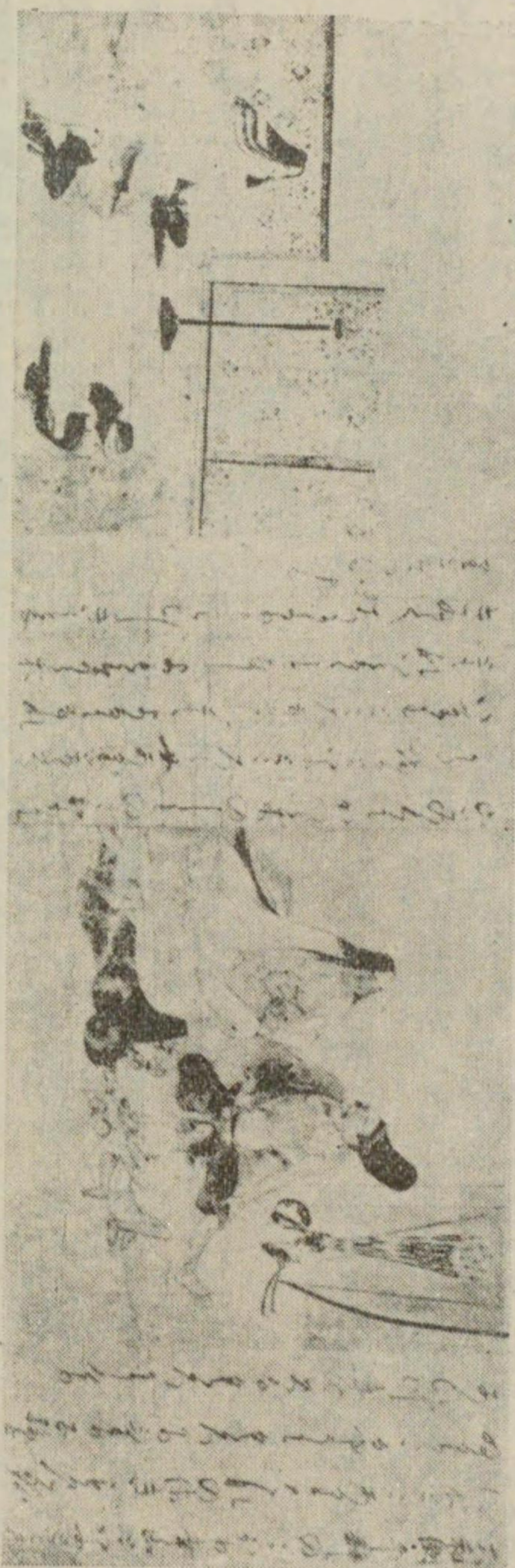
關戸守彦氏の珍藏になる『病草子』の一卷、紙本着色になつてゐて、竪八寸五分五厘、鎌倉時代や、初期の制作、『地獄繪卷』や『餓飢草子』など、同じ畫系に屬するもの、筆者は、從四位下、刑部大輔藤原光長の作と傳へられてゐる。——光長は、土佐派の始祖といつてもよい人であつた。

○ 病苦に喘ぐ、人々のさまを描いたものなので、またの名が『異疾草子』、この殘缺は、益田男のところと、原富太郎氏に秘藏せられてゐて、これまた、當代の珍を誇つてゐる。『病草子』の一卷を通じ、繰り展べらるゝものは、悉く、人生悲惨の場面ばかり、これを勤むる役割は、不具廢疾の人どや、神經の忘失者である、狂人などばかりである。人生四苦のうち、病苦、それが手に執る如くに描き盡されてゐるが、これに含まれてゐるものは、全く宗教を基調とした、極めて眞摯なるもの、人生行路の難を、病に形になり、描かれたものといはれてゐる。

○ この『病草子』は、詞書と繪を、各十六段にわけてゐる。繪の第一は、鼻さきの黒い親子が描かれてゐて、遺傳的皮膚病を説明してゐる。第二は、神經衰弱か、ヒステリーで夜眠れぬ女を、第三に、眼病を患つて、眼球のぐるぐると動く男の圖、第四は、口腔科に屬するもので、舌の端に腫物の出來た男が、描かれてゐる。第五圖は極めて奇抜なもの、肛門がないため尿糞を口より吐き出してゐる圖、第六圖は、男女両性の人、第七圖は、流し醫者に治療せられたために、失明した男が出てゐる。



第八には齒痛患者、第九には、お尻に穴が澤山に開いてゐる人、第十に女が毛髪を剃り落してゐる圖、第十一には霍亂、第十二はうつむく病の男、第十三は口臭の女、第十四嗜眠病患者、



『病草子』

第十五に、顔にあざのある女が、鏡を見て悲觀して居る所、第十六の終りの圖には、一寸法師の不具者が、いづれも、十六圖を通じて、いろ／＼の病の形が描寫せられてゐる。

詞書は、假名書の見事なるものである奥書に、土佐光定が鑑定して、この『病草子』を、土佐吉光の眞蹟だといつてゐるが、なほ、『一時の戯れと雖も、實に稀世の品と謂つべし』と褒めてゐる。しかしこれは、光定のいつてゐる如く、一時の戯れなどではなく、光定には、この畫の精神を掴み得なかつた爲に、かう斷じたものであるらしい。この『病草子』は、表現の方法を、漫畫的形式によつてはゐるが、作者の態度は、おそろしく眞剣なもので、病そのものに、かなりの理解を以つてゐて、最も通俗的な、現はしかたによつたものである。

作者は、これほど、不快なものを扱ひながら、作者の持つてゐる、藝術的態度を、少しも崩して居らぬ所に、この『病草子』の高い匂ひが窺はれる。見るものに、不快な感じを抱かせぬのみならず、この畫を描いた、作者の意圖のうちへ、引込んで仕舞ふ腕の冴え、眞に驚くべきものである。